

史跡旧二条離宮（二条城）

2003年

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

史跡旧二条離宮（二条城）

2003年

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

序 文

京都市内には、いにしへの都平安京をはじめとして数多くの埋蔵文化財包蔵地（遺跡）が点在しております。また、平安京遷都以来今日に至るまで都市として永々と生活が営まれてきており、各時代の生活跡が連綿と重なり合っています。都であるゆえに、そこから発見されるその一つ一つは、日本の歴史を語るうえで欠くことのできないものとなっています。

財団法人京都市埋蔵文化財研究所は、こうした遺跡の発掘調査を通して京都の歴史の解明に取り組んでおります。その成果を市民の皆様幅広く公開し活用いただけるよう進めていくことが研究所の責務と考えております。現地説明会の開催、写真展や遺跡めぐり、京都市考古資料館での展示公開、出土遺物の小・中学校や公的施設での貸出展示、ホームページでの情報公開などを積極的に進めているところであります。

さて、当研究所では従来各年度毎で報告してまいりました「京都市埋蔵文化財調査概要」を改め、平成13年度調査分より各調査箇所毎に1冊の報告書として発刊しております。その第15冊目として、このたび収蔵庫建設に伴います史跡旧二条離宮の発掘調査の成果を報告いたします。本報告の内容につきましてお気づきのことがございましたら、ご教示たまわりますようお願い申し上げます。

末尾になりましたが、当調査に際しまして多くのご協力とご支援をたまわりました関係者各位に厚くお礼ならびに感謝を申し上げる次第です。

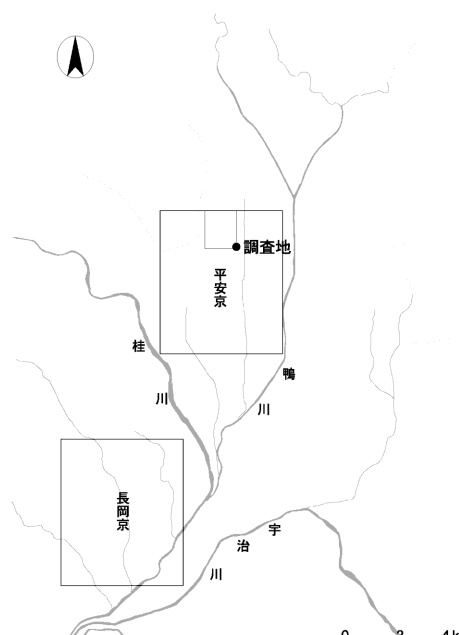
平成15年2月

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

所 長 川 上 貢

例 言

- | | |
|------------|---|
| 1 遺 跡 名 | 史跡旧二条離宮（二条城） 平安京冷泉院跡、平安宮侍従所厨跡 |
| 2 調査地点所在地 | 京都市中京区二条通堀川西入二条城町541 二条城 |
| 3 委託者及び承諾者 | 京都市 代表者 京都市長 梶本頼兼 |
| 4 調査期間 | 12年度調査：2000年11月7日～2001年3月30日
13年度調査：2001年10月1日～2002年3月29日 |
| 5 調査面積 | 12年度調査：730.5m ²
13年度調査：1,450m ² |
| 6 調査担当職員 | 平田 泰 |
| 7 使用地図 | 京都市発行の都市計画基本図（縮尺1：2,500）「聚楽廻」「壬生」を参考にし、作成した。 |
| 8 使用測地系 | 日本測地系（改正前） 平面直角座標系（ただし、単位（m）を省略した） |
| 9 使用標高 | T.P.：東京湾平均海面高度（座標および標高は、京都市遺跡測量基準点を使用した） |
| 10 使用基準点 | 京都市が設置した京都市遺跡測量基準点（一級基準点）を使用した。 |
| 11 使用土色名 | 農林水産省農林水産技術会議事務局監修の『新版 標準土色帖』に準じた。 |
| 12 遺構番号 | 調査区ごとに通し番号を付し、遺構種別記号を前に付した。
用例
SA：柵 SB：建物
SD：溝 SE：井戸
SF：道路 SG：池
SK：土壌 SX：その他
Pit：柱穴 |
| 11 遺物番号 | 年度ごとに土器類、瓦類、銭貨、その他の順で通し番号を付した。 |
| 12 掲載写真 | 村井伸也・幸明綾子 |
| 13 作成担当職員 | 平田 泰 |
| 14 自然遺物の分析 | 環境考古学研究会に依頼した。 |



（調査地点図）

目 次

平成12年度の試掘確認調査

1 . 調査経過	1
2 . 遺跡と既往の調査	3
(1) 歴史的環境	3
(2) 既往の調査	4
3 . 遺 構	4
(1) 遺構の概要	4
(2) 1 区の遺構	5
(3) 2 ・ 3 区の遺構	7
(4) 6 ・ 7 区の遺構	8
(5) 8 ・ 9 区の遺構	9
4 . 遺 物	11
(1) 遺物の概要	11
(2) 土器類	12
(3) 瓦 類	14
(4) 銭 貨	18
(5) その他の遺物	18
5 . ま と め	19
(1) 各区の遺構について	19
(2) 二条城創建期西面堀について	19

平成13年度の発掘・試掘確認調査

1 . 調査経過	21
2 . 遺 構	23
(1) 遺構の概要	23
(2) 1 区の遺構	24
(3) 6 区の遺構	33
(4) 7 区の遺構	34
(5) 8 区の遺構	34
(6) 9 区の遺構	35
3 . 遺 物	36
(1) 遺物の概要	36

(2) 土器類	37
(3) 瓦 類	42
(4) 銭 貨	49
(5) 縄文土器・その他の遺物	50
4 . ま と め	53
(1) 各区の遺構について	53
(2) 冷泉院の池庭について	54
自然科学分析	
(1) 試料について	55
(2) 花粉分析	55
(3) 珪藻分析	56
(4) ま と め	58

図 版 目 次

図版 1	平成12年度調査	遺構	1	1 区全景（北から）
			2	1 区全景（東から）
図版 2	平成12年度調査	遺構	1	2 区・3 区全景（北から）
			2	2 区全景（北から）
図版 3	平成12年度調査	遺構	1	3 区蔵跡検出状況（北から）
			2	2 区景石検出状況（北から）
図版 4	平成12年度調査	遺構	1	6 区全景（東から）
			2	6 区SD 2 検出状況（東から）
図版 5	平成12年度調査	遺構	1	7 区全景（北から）
			2	8 区1 区石垣検出状況（東から）
図版 6	平成12年度調査	遺構	1	9 区全景（北から）
			2	9 区1 区石材抜き跡（北東から）
図版 7	平成13年度調査	遺構	1	1 区第 1 面全景（北から）
			2	1 区第 2 面全景（北から）
図版 8	平成13年度調査	遺構	1	1 区第 3 面全景（北から）
			2	1 - 4 区第 2 面全景（北から）
図版 9	平成13年度調査	遺構	1	1 - 3 区第 2 面全景（北西から）
			2	1 - 3 区第 3 面全景（北から）

図版10	平成13年度調査	遺構	1	1 - 2 区SX275検出状況（東から）
			2	1 - 2 区SD153検出状況（北から）
			3	1 - 2 区SD153遺物出土状況（東から）
図版11	平成13年度調査	遺構	1	1 - 1 区景石検出状況（東から）
			2	1 - 2 区SE232検出状況（南から）
			3	1 - 2 区SE227検出状況（東から）
図版12	平成13年度調査	遺構	1	1 - 2 区洲浜検出状況（北から）
			2	1 - 2 区全景（北西から）
図版13	平成13年度調査	遺構	1	6 区全景（西から）
			2	6 区列石検出状況（西から）
			3	6 区景石検出状況（南から）
図版14	平成13年度調査	遺構	1	7 区全景（西から）
			2	8 区全景（東から）
図版15	平成13年度調査	遺構	1	9 区全景（東から）
			2	9 区景石検出状況（北から）
図版16	平成12年度調査	遺物		軒丸瓦・軒平瓦
図版17	平成12年度調査	遺物		金箔瓦・軒丸瓦・菊丸瓦・軒平瓦
図版18	平成13年度調査	遺物		土器類
図版19	平成13年度調査	遺物		軒丸瓦・軒平瓦

挿 図 目 次

図 1	調査位置図（1：5,000）	1
図 2	調査区配置図（1：1,000）	2
図 3	調査風景	3
図 4	調査風景	3
図 5	1～3区遺構平面図（1：200）	6
図 6	2区北半・3区東端遺構平面図（1：100）	8
図 7	6・7区遺構平面図（1：200）	9
図 8	8・9区遺構平面図（1：200）	10
図 9	8 区 1 区石垣実測図（1：80）	11
図 10	8 区 3 区石垣実測図（1：80）	11
図 11	9 区 1 区南壁断面図（1：200）	11
図 12	土器類実測図 1（1：4）	13

図13	土器類実測図2 (1 : 4)	14
図14	瓦類拓影・実測図1 (1 : 4)	15
図15	瓦類拓影・実測図2 (1 : 4)	16
図16	銭貨拓影 (1 : 2)	17
図17	その他の遺物実測図 (1 : 4)	18
図18	調査位置図 (1 : 5,000)	21
図19	調査区配置図 (1 : 1,500)	22
図20	調査前全景	23
図21	調査風景	23
図22	1区遺構平面図 (1 : 400)	25
図23	1-1区景石配置実測図 (1 : 100)	26
図24	景石1・4実測図 (1 : 50)	27
図25	景石6～9実測図 (1 : 50)	28
図26	1-2区洲浜実測図 (1 : 50)	30
図27	1-2区断割調査実測図 (1 : 100)	30
図28	1-2区SX275、SE232・227・314実測図 (1 : 50)	31
図29	6～9区遺構平面図 (1 : 200)	32
図30	6区景石実測図 (1 : 50)	33
図31	9区東半・12年度調査区遺構平面図 (1 : 100)	35
図32	1-3区黄灰色砂層出土土器類実測図 (1 : 4)	37
図33	1-2区SD233出土土器類実測図 (1 : 4)	38
図34	1-2区SD217・SE226・SD83・SE227出土土器類実測図 (1 : 4)	39
図35	1区出土彩釉陶器実測図 (1 : 4)	40
図36	室町時代から江戸時代の土器類実測図 (1 : 4)	41
図37	1-1区出土瓦類拓影・実測図 (1 : 4)	43
図38	1-2区出土瓦類拓影・実測図 (1 : 4)	44
図39	1-3・1-4区出土瓦類拓影・実測図 (1 : 4)	46
図40	6・7・9区出土瓦類拓影・実測図 (1 : 4)	48
図41	銭貨拓影 (1 : 2)	50
図42	縄文土器拓影・実測図 (1 : 4)	51
図43	石鏃実測図 (1 : 2)	52
図44	その他の遺物実測図 (1 : 4)	53

表 目 次

表 1	遺構概要表	5
表 2	遺物概要表	12
表 3	遺構概要表	24
表 4	遺物概要表	36
表 5	花粉分析表	59
表 6	珪藻分析表	59

付 表 目 次

付表 1	平成12年度調査	土器類一覧表	60
付表 2	平成12年度調査	瓦類一覧表	61
付表 3	平成12年度調査	銭貨一覧表	62
付表 4	平成12年度調査	その他の遺物一覧表	62
付表 5	平成13年度調査	土器類一覧表	63
付表 6	平成13年度調査	瓦類一覧表	65
付表 7	平成13年度調査	銭貨一覧表	67
付表 8	平成13年度調査	縄文土器一覧表	68
付表 9	平成13年度調査	その他の遺物一覧表	68

平成12年度の試掘確認調査

1. 調査経過

京都市中京区二条通堀川西入二条城町に所在する二条城で、築城四百年記念に伴う収蔵施設建設が企画された。二条城は全域が史跡旧二条離宮（二条城）に指定され、北東部は平安京冷泉院跡、北西部は平安宮跡、南西部は平安京神泉苑跡に比定されている。このため、二条城内に4ヶ所の候補地を選定し、埋蔵文化財の試掘確認調査を実施する運びとなった。

調査は、2000年11月7日から準備を開始し、11月14日から重機による表土の排土作業に入った。調査は、2区・3区、1区、8区・9区、6区・7区、1掘区の順に実施し、2001年3月30日まですべての作業を終了した。

4区・5区は京都府・京都市文化財保護課・二条城側と協議した結果、通路確保等により試掘調査を行わなかった。

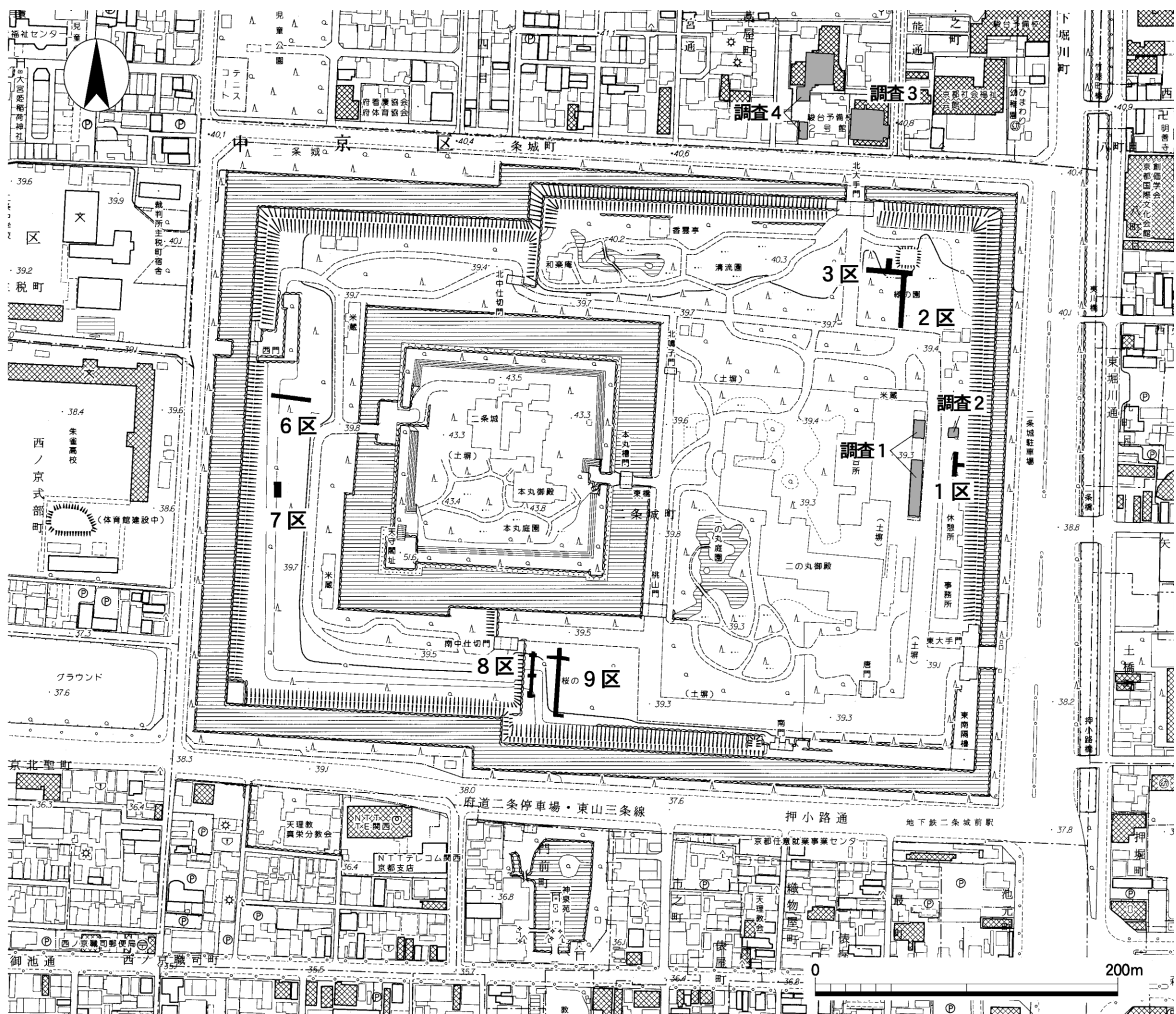


図1 調査位置図(1:5,000)

調査の結果、1～3区で平安時代の冷泉院に伴うと考えられる池庭を確認した。また南西部の8・9区で、寛永3年（1626）の後水尾天皇行幸時に建てられた女院御殿の地業を検出し、この下層で慶長8年（1603）創建期の二条城西堀外側の石垣や堀を確認した。

なお、2001年3月27日には報道発表を行い、3月29日に現地説明会を開催し、調査成果を公開した。

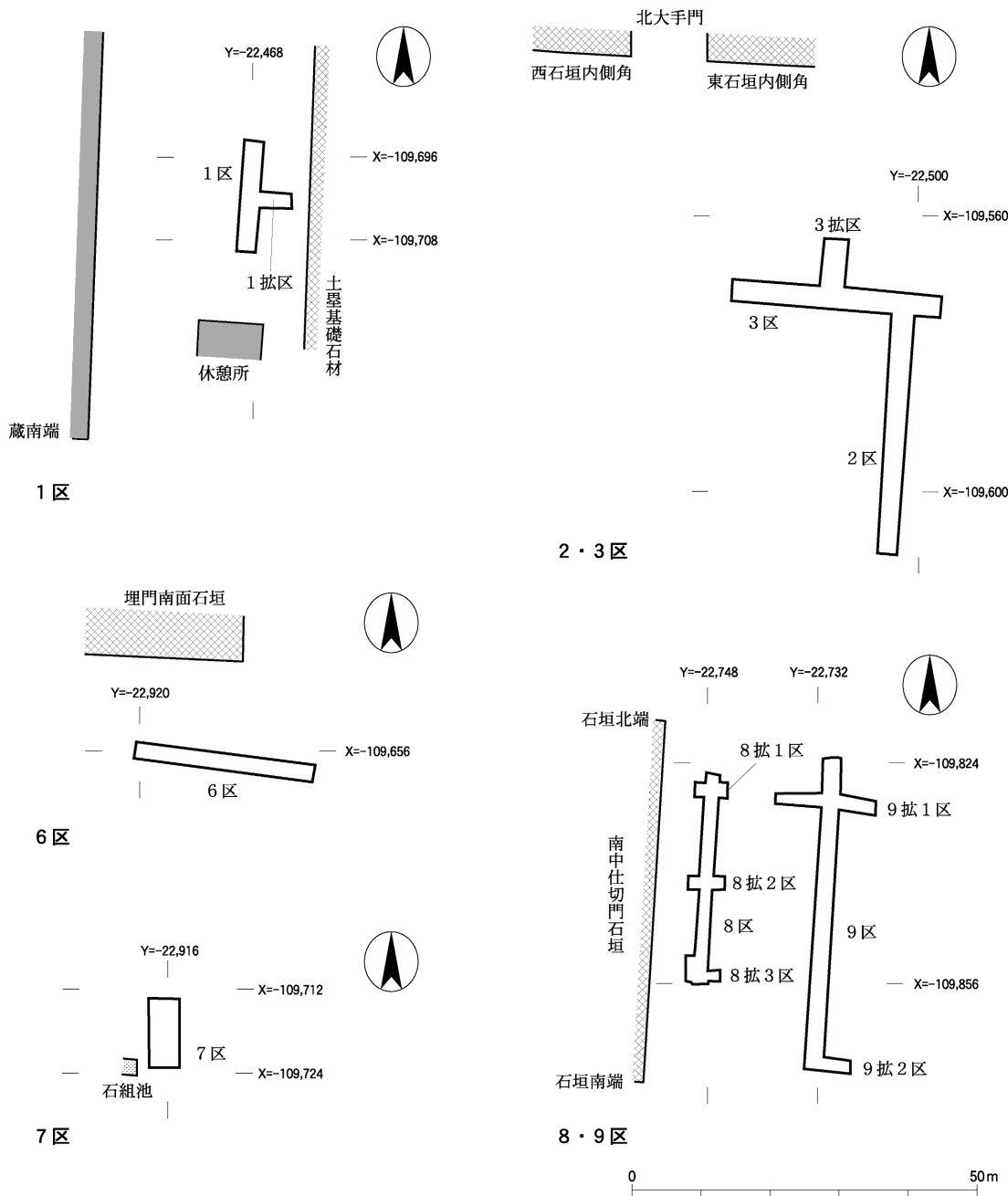


図2 調査区配置図（1：1,000）

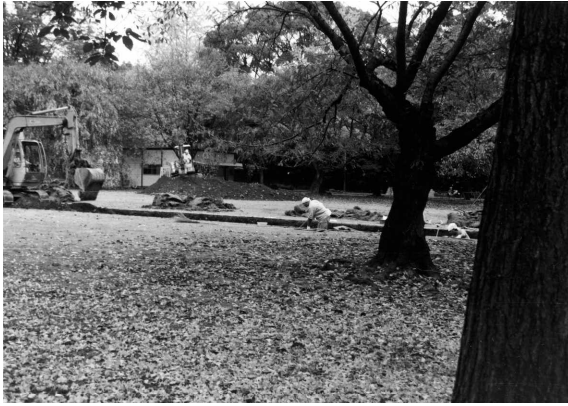


図3 調査風景



図4 調査風景

2 . 遺跡と既往の調査

(1) 歴史的環境

冷泉院は、左京二条二坊三町から六町の4町分を占める。弘仁7年(816)に文献の初見があり、嵯峨天皇の後院として造営され、讓位後は仙洞となっている。その後仁明天皇以降、歴代天皇の後院・仙洞となって伝領されるが、清和天皇の貞観17年(875)に罹災する。この時、類焼舎54宇、収蔵の凶籍・文書・財宝の多数が灰燼に帰したという。

後、陽成天皇の元慶4年(880)頃までには再建されるが、約70年後の天曆3年(949)に2回目、さらに約20年後、円融天皇の天禄元年(970)に3回目の火災に遭う。この被災後に冷泉院の「然」を「泉」に改め、冷泉院としている。

冷泉院は11世紀代に入ると重要性を減じたものか、文献記録への記載が少なくなる。罹災記事は後一条天皇長和5年(1016)、後冷泉天皇永承5年(1050)があるのみで、下って鎌倉時代の建保2年(1214)には、二条猪熊焼亡があり、冷泉院内の「中山明神」が被災したとある。また、寛元2年(1243)には五町東半域の一戸主の宅地が左衛門尉佐伯康長に下賜されており、この頃には既に、方2町の敷地は維持されていなかったとみられる。

二条城は徳川家康によって、二条堀川西方一帯、南北3町、東西2町の規模で造営された。慶長6年(1601)5月に縄張りを始め、建設地内の町家四、五千軒を立ち退かせたと記録にある。当初は新御屋敷、新御所と称しているが、四周に堀と石垣を巡らし、内に土塁を構えた広大な敷地を持つ平城であった。慶長8年(1603)2月に將軍宣下を受け、3月に二条城に入り、御所に参内して拝賀、4月には公家、大名を招いて祝宴を催している。この頃には主要な殿舎は、ほぼ完成していたことがわかる。後、慶長11年(1606)までには順次、天守閣、御殿、門、長屋、四周の築地塀が整備されている。この後、元和6年(1620)には、和子入内に伴う女御御殿が二条城内に造られる。主要な殿舎が伏見城から移築され、一部の建物が新造されている。

この後、寛永3年(1626)の後水尾天皇の行幸に備え、二条城は大規模な改修が加えられてい

る。敷地は西へ約1町半ほど拡張され、10間幅の堀と多聞櫓で囲まれた本丸を新たに造営した。従来、城内北西隅にあった天守閣を、規模を大にして本丸の南西角に遷している。建物は、本丸御殿、行幸御殿、中宮御殿、女院御殿などが新造され、二の丸御殿が改築された。工は寛永元年(1624)1月に起こし、5月には石引きを始め、寛永3年3月までに竣工している。

(2) 既往の調査

平安京冷泉院跡の発掘調査は、昭和56年度に1例(調査1)、昭和57年度に2例(調査2・3)、平成6年度に1例(調査4)、計4例の調査が過去に実施されている(図1)。また、二条城内を対象にした電気配線と上下水道管の埋設に伴う掘削への立会調査が昭和51年度から55年度にかけて実施されている。

調査1は二条城内の冷泉院跡中央南部地区の調査で、縄文時代晩期の流路、平安時代前期の二条大路北側溝、湿地状堆積土層、北東方向への下がり¹⁾を有する池状遺構を確認している。

調査2は前年度調査の東10mの調査で、平安時代後期の北西に下がり²⁾が認められる池状遺構を確認している。

調査3は二条城北大手門外、竹屋町通北側地点の調査で、大炊御門大路の路面と南側溝、冷泉院北面築地内溝を検出し、9世紀前半の多量の一括遺物が出土する成果³⁾を挙げている。

調査4は調査3の西隣における他団体の調査で、弥生時代中期(様式期)の溝、平安時代前期の大炊御門大路南北側溝、北側宅地内溝、冷泉院北面築地内溝⁴⁾を検出している。

註

- 1) 辻 裕司「左京二条二坊(3) 史跡二条城」『昭和56年度 京都市埋蔵文化財調査概要(発掘調査編)』(財)京都市埋蔵文化財研究所 1983年
- 2) 久世康博「左京二条二坊(3) 史跡二条城」『昭和57年度 京都市埋蔵文化財調査概要』(財)京都市埋蔵文化財研究所 1984年
- 3) 上村和直・吉崎 伸「左京二条二坊(2)」『昭和57年度 京都市埋蔵文化財調査概要』(財)京都市埋蔵文化財研究所 1984年
- 4) 関西文化財調査会

3. 遺 構

(1) 遺構の概要

1区 1区・1拡区で、平安時代中期・後期に埋没した池堆積土層、平安時代中期の汀線、平安時代後期の溝・井戸、室町時代後期の整地層・井戸・土壇・柱穴、江戸時代前期から中期の整地層・柱穴・土壇などを検出した。

2・3区 2区で弥生時代中期と見られる竪穴住居跡の床面らしきものを確認した。2区北側・3区東半では、平安時代前期から後期の池庭に配された遣水、落口、景石多数、列石を2ヶ所で検出した。3区中央、3区で江戸時代前期と見られる基壇、礎石据付跡6基、雨落溝2条を、江戸時代中期から後期の土壌・柱穴を検出した。2区でも江戸時代中期から後期の土壌・柱穴を検出した。

6・7区 6区で桃山時代の溝・土壌・柱穴、江戸時代前期の整地層を検出した。7区で、平安時代後期の溝・整地層・礫敷、江戸時代前期の整地層を検出した。

8・9区 8区・9区では、全域で江戸時代前期の礫敷面、江戸時代中期・後期の土壌・柱穴を検出した。8区1・3区で、桃山時代末期の石垣・石垣裏込・堀を検出した。8区2区、9区1・2区で石材採取跡・堀を確認した。

(2) 1区の遺構(図版1、図5)

平安時代中期・後期の池SG37の堆積土層SX38は、にぶい黄褐色砂泥で、厚さ0.4mを測る。1区北半に堆積する。この上層に平安時代後期の灰黄褐色砂泥層が堆積する。層厚0.3m前後で、同じく1区北半に堆積する。

平安時代中期の汀線は、1区・1区で8m前後を検出した。北東方向から南西方向に延伸する。地山とみられる黄褐色泥砂がベースとなり、北西方向への下がりを確認している。

平安時代後期の溝SD29は、1区中央で東西方向に検出した。幅0.5m、深さ0.3mを測り、東から西方向に傾斜する。同時期の井戸SE31は、1区北側で南半部分を検出した。東西幅約3m、深さ1.5mを測る。

室町時代後期の整地層は、1区中央で検出した。にぶい黄褐色泥砂に川原礫を交えた土層で、厚さ0.4mを測る。井戸SE36は川原石を積み上げた円形石組み井戸で、掘形径1.7m、石組み内法

表1 遺構概要表

時代	遺構						
	1区	2区	3区	6区	7区	8区	9区
弥生時代中期		SX82					
平安時代	SG37、SX38、SD29、SE31	遣水、落口、景石、列石、瓦敷、玉石敷、SG5	遣水		SD4・5、SX6		
室町時代後期	整地土層、SE36、SK16、Pit26			SD1・2、SK3	SD3		
桃山時代						石垣、堀堆積土層	石材採取跡
江戸時代前期	Pit9・23・27		雨落溝、礎石据付跡			整地土層	整地土層
江戸時代中期～後期	SK11	SK1・8・13・17・67、Pit94・115				SK1、Pit3	SK1・5・6

0.8mを測る。井戸内に径0.5m前後の石材を投棄、埋め戻されている。土壌SK16は1区南端で検出した。東西1.5m、南北1.3mを測る方形で、深さ0.5mを測る。柱穴Pit26は1区南半中央で検出した。径0.4mを測る円形で、深さ0.2mを測る。

江戸時代前期から中期の整地層は、灰黄褐色泥砂層、にぶい黄褐色泥砂層からなり、窪みや低地を埋め立て、最上面に明褐色泥砂層を貼り付ける。江戸時代の遺構は、この面を切り込む形で検出した。土壌SK11は、ほぼ円形の土壌で、径1.5m、深さ0.5mを測る。Pit9・23・27は、柱間7尺(約2.1m)で南北に並び、径0.5m前後、深さ0.3m前後を測る。

(3) 2・3区の遺構(図版2・3、図5・6)

2区中央で、竪穴住居跡床面の一部とみられる黄褐色粘土層SX82を確認し、層中から弥生土器が出土した。この広がり、地山である砂礫層を切って三角形に広がり、住居跡床面の西端部を検出したものとみられる。

平安時代前期から後期にかけての庭園遺構は、2区北半、3区東端で検出した(図6)。遣水は幅1m前後、深さ0.2~0.1m前後で、3区北東隅から2区北西で池SG5に流れ込む。流路はほぼ直線的であるが、溝底は流水による抉れが激しい。砂岩やチャートの石材を使った景石は、縦1.5m、横1mから縦0.7m、横0.5m前後のものが10石以上配置されている。落口付近には平坦に敷き詰めた瓦敷きが認められ、水流による抉れを防いでいる。調査トレンチ西側では、景石から一段下がった地点に玉石を貼り付け、景石の間を縫う流水に、せせらぎを作出する効果を与えるものとみられよう。陸地は2区東側で大きく円弧を描いて廻りこみ、南西方向に伸び、景石はこの陸地線に沿う形で斜面部に配置されていたものとみられよう。東端で検出した列石は、時期的に古いもので、改造前の池庭に伴う何らかの施設に関わるものとみることが出来る。

3区中央、3区で、江戸時代前期の蔵跡に関わる南北方向の溝2条(図5-1・2) 礎石据付跡6ヶ所(図5-3)を確認した。蔵の基壇は、黄色粘土と小礫を叩き締めて水平面を造る。現地表下0.4mに検出した。南北方向の溝2条は、それぞれ蔵の西雨落溝、東雨落溝に比定できる。西雨落溝は幅0.7m、深さ0.2mを測る。南北3mを検出した。東雨落溝は幅2.2m、深さ0.1~0.2mを測る。北側で浅く、南側でやや深くなる。江戸時代中期から後期に至るまで使用・改修を受けた痕跡が認められる。礎石据付跡は、3区で2ヶ所、3区で4ヶ所を確認した。3区の礎石据付跡は、径1.5m、深さ0.2m、ほぼ円形の平面形を有する。礎石は抜かれている。推定柱間は、梁間3間(約5.85m)、桁行1間(約1.95m)、基壇東西幅6.3mを測る。これら礎石据付跡は、掘り下げを実施せず、面的な確認に留まっている。

2区の江戸時代中期以降の遺構は、土壌SK1・8・13・17・67がある。SK1は調査区南側で検出した。平面形状は不定形で、径0.8m、深さ0.2mを測る。SK8は調査区北部で検出した。円形で、径1m前後、深さ0.4mを測る。SK13は調査区北東端で検出した。南北2m以上、東西1.5m以上、深さ1m前後を測る。南西部コーナーは矩形を呈し、全形は方形とみられる。SK17は調査区北域、東壁下で検出した。東西長1.5m以上、南北長2mの楕円形を呈し、深さ1.2mを測る。

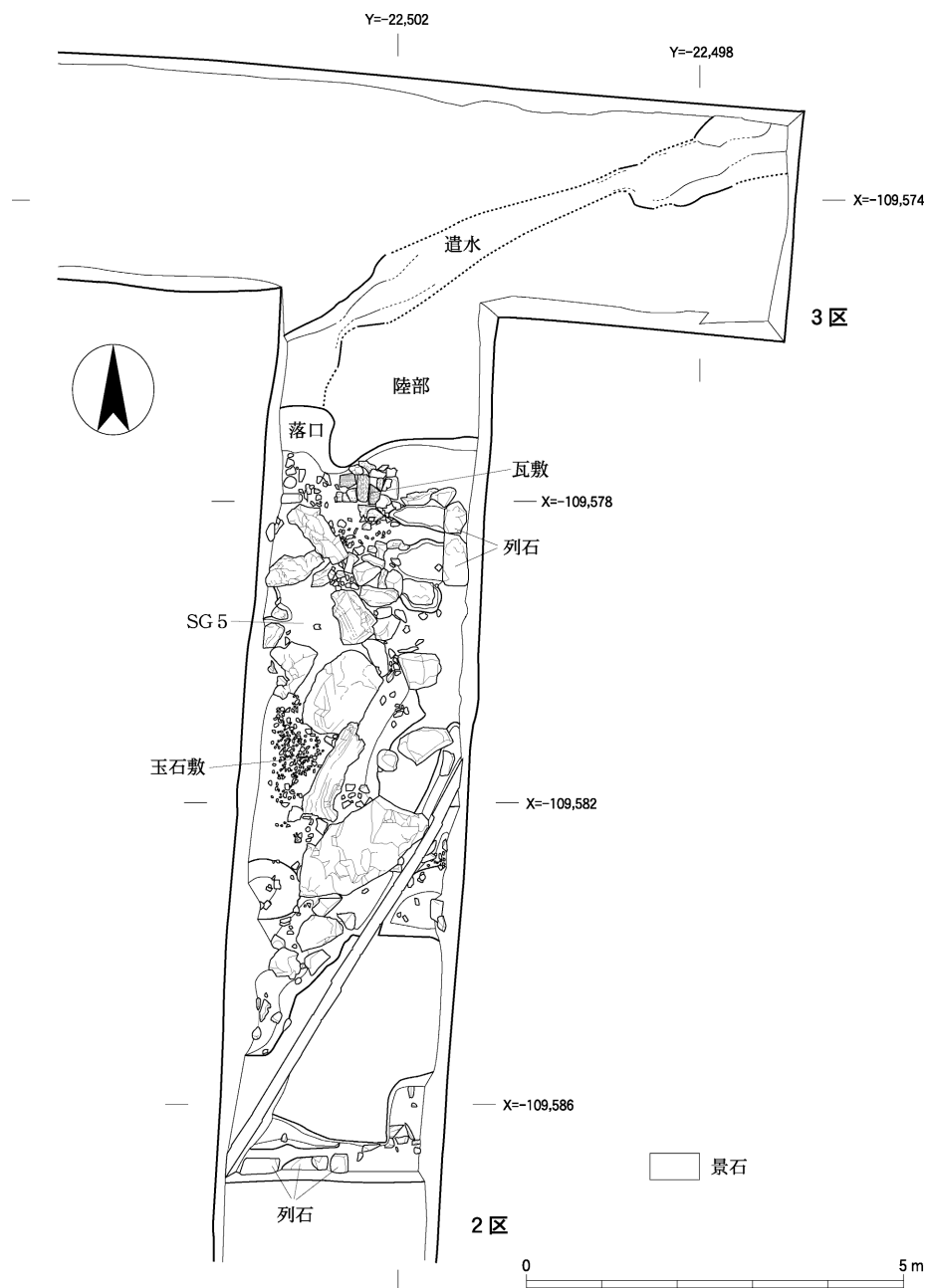


図6 2区北半・3区東端遺構平面図(1:100)

SK67は調査区中央で検出した。楕円形を呈し、東西1m、南北0.7mを測る。他に、柱穴Pit94・115がある。Pit94は調査区南端で検出した。径0.5m、深さ0.4mを測る。Pit115は調査区北部で検出した。径0.5m、深さ0.5mを測る。

(4) 6・7区の遺構(図版4・5、図7)

6区の遺構には、溝SD1・2、土壇SK3がある。SD1は調査区西端で検出した南北方向溝で、幅3m前後、深さ0.7mを測る。室町時代後期に属する。SD2も南北方向溝で、幅2.5m、深さ0.8mを測る。断面形は逆台形で、肩崩れはほとんど認められない。SK3は調査区東端で検出した。平面形は不定形で、東西4.5m以上、南北1.5m以上、深さ0.5mを測る。これら遺構の上層で、調

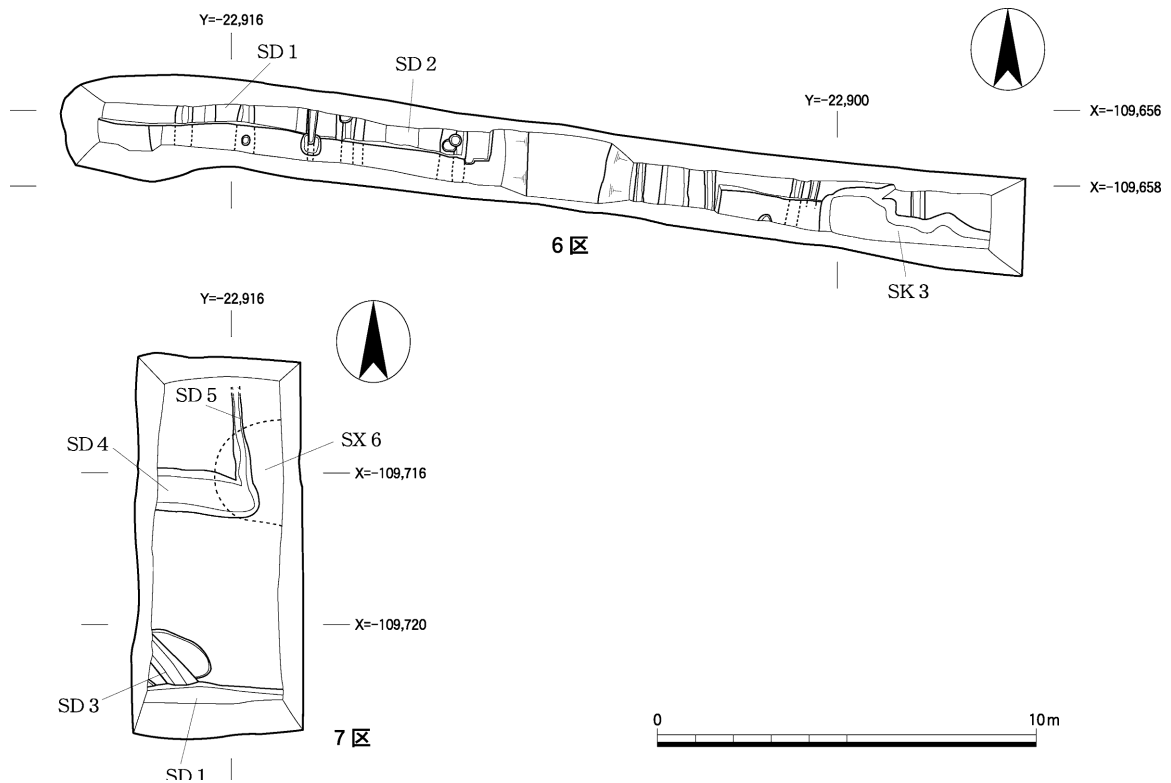


図7 6・7区遺構平面図(1:200)

査区全域に1.3m前後の褐色砂礫の盛土があり、江戸時代前期の整地層と見られる。

7区では平安時代後期の溝SD 4・5、整地層SX 6を検出した。SD 4は東西溝で、幅1.2m、深さ0.3mを測る。流水方向は西から東へ向かう。SD 5は南北方向溝で、調査区中央北側でSD 4と合流する。幅0.4m、深さ0.1mで、北壁付近で消失する。SX 6は暗褐色砂泥層で、SD 4以北、SD 5以東で確認できる。厚さ0.1mを測る。溝SD 3は北西方向から南東に向かう溝で、幅0.6m、深さ0.2mを測る。室町時代後期に属する。溝SD 1は暗渠で、石組調整池から中堀方向に伸びる。

(5) 8・9区の遺構(図版5・6、図8~11)

8 掘1区・8 掘3区で、石垣と堀の堆積土層を確認した。8 掘1区の石垣(図9)は、石垣最下段のもので、径1m前後の石材2個を確認した。南北方向に連なり、東面している。8 掘3区の石垣(図10)は、径0.5~1.0m前後の石材で石垣を組み上げたもので、中央を除く南・北で各2段の組み上げを確認した。東面して南北に連なり、8 掘1区の石垣と連続するとみられる。石垣面を覆って堆積する暗褐色灰色泥砂層は、堀底に堆積した土砂とみられるもので、江戸時代前期の整地面から1m以上の堆積を確認した。石垣の裏込からは室町時代後期の土師器小片が出土する。江戸時代前期の整地層は、褐色砂泥層、暗褐色砂泥層などからなり、厚さ0.7m前後で、上面に礫を貼り付け、叩き締めている。江戸時代中期以降の遺構は、この面を切り込んで成立する。土壌SK 1は調査区北端で検出した。径2.5m、深さ0.6mを測る。柱穴Pit 3は径0.5m、深さ0.4mを測る。

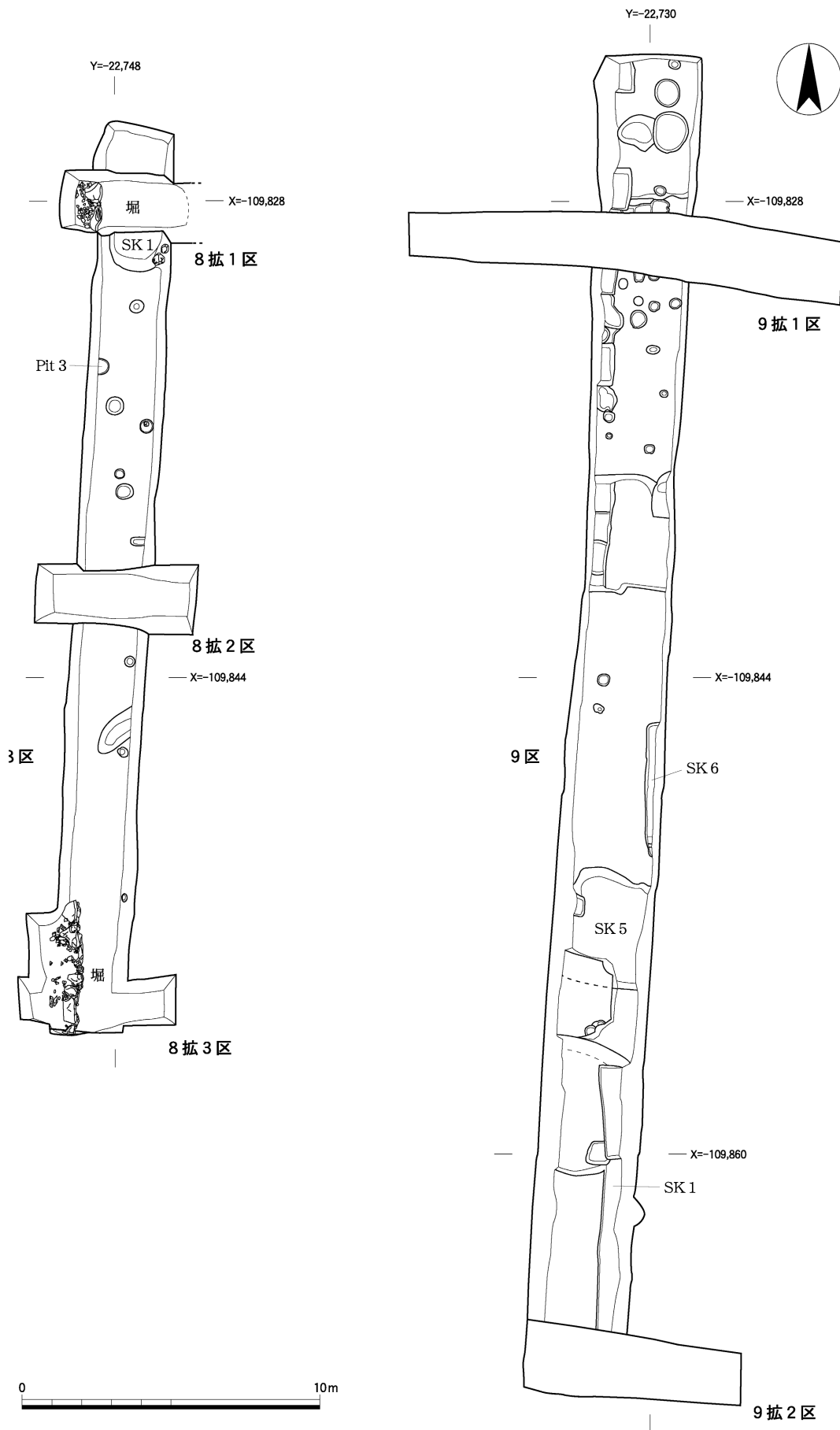


图 8 8·9区遺構平面図(1:200)

9 掘 1 区で石垣の石材抜き跡、堀の堆積土層を検出した（図11）。抜き跡は堆積土層が乱れており、石垣裏込めの礫が散乱する。堀の堆積土層は暗褐色灰色泥砂で、下層に行くにしたがい粘性を増す。江戸時代前期の整地層は、9 区全域で確認した。厚さ 1 m 前後を測り、褐色砂泥層、暗褐色砂泥層からなり、小礫が混在する。整地表面は、さらに礫を加えて叩き締められている。江戸時代中期以降の遺構は、この面を切り込んで成立しており、土壌 SK 1・5・6 がある。SK 1 は調査区南部で検出した。調査区外に伸びており、規模、平面形状は不明。1.5 m 以上を測る。江戸時代後期の遺物が出土する。SK 5 は調査区中央で検出した。平面形状は、ほぼ隅丸方形で一辺約 4 m、深さ 0.9 m を測る。SK 6 は調査区中央部の東壁下で検出した。平面形状は不明、一辺 5 m 前後、深さ 0.4 m を測る。いずれも江戸時代中期の遺物が出土した。

4 . 遺 物

(1) 遺物の概要

1 区 1 区・1 掘区では、平安時代前期・中期・後期の土師器皿、須恵器杯・椀、灰釉陶器椀、瓦類、銭貨、室町時代後期の土師器皿、焼締陶器甕・鉢、銭貨、江戸時代前期・中期・後期の土師器皿、陶磁器椀、瓦類、銭貨などが出土した。

2・3 区 2 区では、畿内 様式の弥生土器甕、平安時代前期・中期の土師器皿、須恵器杯、緑釉陶器椀、灰釉陶器椀、黒色

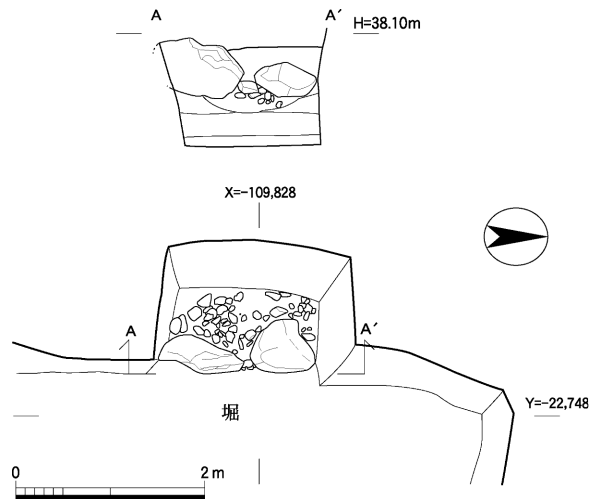


図9 8 掘 1 区石垣実測図 (1 : 80)

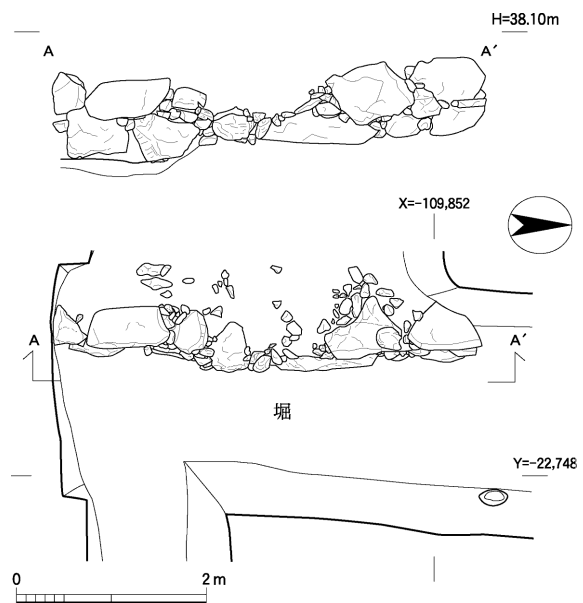
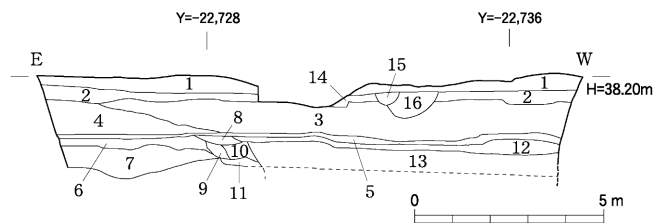


図10 8 掘 3 区石垣実測図 (1 : 80)



- | | |
|--------------------|----------------------------|
| 1 にぶい黄褐色砂泥 | 10 灰黄褐色砂泥+赤褐色砂泥
(石材抜き跡) |
| 2 黒褐色砂泥 | 11 暗褐色砂泥+褐色砂泥
(石材抜き跡) |
| 3 暗褐色砂泥 | 12 黒褐色砂泥 |
| 4 褐色砂泥 | 13 暗褐色灰色砂泥 (堀堆積土層) |
| 5 黄褐色砂泥 | 14 褐色砂泥 |
| 6 灰黄褐色砂泥 | 15 オリーブ褐色砂泥 |
| 7 にぶい赤褐色砂泥+灰黄褐色砂泥 | 16 褐色砂泥 |
| 8 にぶい黄褐色砂泥 (石材抜き跡) | |
| 9 黒褐色砂泥 (石材抜き跡) | |

図11 9 掘 1 区南壁断面図 (1 : 200)

土器椀、瓦類、銭貨、江戸時代前期・中期・後期の土師器皿、陶磁器椀・皿、瓦類、銭貨が出土した。3区では、室町時代前期の土師器皿、焼締陶器鉢、江戸時代前期・中期・後期の土師器皿、陶磁器椀・皿、瓦類、銭貨などが出土している。

6・7区 6区では桃山時代の土師器皿、焼締陶器椀、木製品椀・箸、瓦類、銭貨が出土した。7区では平安時代後期の土師器皿、瓦類、江戸時代後期の土師器皿、陶磁器椀・皿、瓦類が出土した。

8・9区 8区・8区・9区・9区では、平安時代前期・後期の土師器皿、須恵器杯、緑釉陶器皿・椀、瓦類、桃山時代の土師器皿、焼締陶器椀、江戸時代前期・中期・後期の土師器皿、陶磁器椀・皿、瓦類、銭貨、石製品などが出土した。

(2) 土器類 (図12・13、附表1)

弥生時代 (図12 - 1・2)

1・2は2区Pit115、SX82から出土した弥生土器底部片で、1は混入、2は竪穴住居跡床面と見られる遺構から出土した。器壁は厚く、内外をハケ目調整、体部への立ち上がりは急である。畿内第 様式期に属するものとみられよう。

平安時代 (図12 - 3～29)

3～7は2区景石間の埋土下層から出土した。3～6は土師器皿、7は須恵器杯蓋で頂部にツマミの付かないタイプである。平安時代前期、9世紀後半に属する。

8～17は1区北壁下端、東壁北部下端の断割り調査で出土した。いずれも下層(にぶい黄橙色

表2 遺物概要表

時代	内容	コンテナ箱数	Aランク点数	Bランク箱数	Cランク箱数
弥生時代	弥生土器、土錘		弥生土器2点、土錘1点		
平安時代	土師器、須恵器、黒色土器、緑釉陶器、灰釉陶器、輸入陶磁器、瓦類、銭貨		土師器19点、須恵器1点、青白磁1点、白磁5点、青磁1点、軒丸瓦6点、軒平瓦5点、銭貨7点		
室町時代	土師器、焼締陶器、輸入陶磁器、木製品				
桃山時代	土師器、焼締陶器、施釉陶器、輸入陶磁器、瓦類		金箔軒丸瓦2点、金箔軒平瓦1点		
江戸時代	土師器、瓦質土器、施釉陶器、染付、磁器、塩壺、瓦類、銭貨、金属製品、土製品、石製品		土師器6点、瓦質土器1点、施釉陶器7点、染付4点、白磁1点、塩壺2点、軒丸瓦2点、軒平瓦3点、菊丸瓦7点、道具瓦1点、鬼瓦1点、銭貨24点、煙管2点、土製品1点、石製品1点		
時期不明			菊丸瓦1点、軒棧瓦1点		
計		213箱	116点(6箱)	9箱	198箱

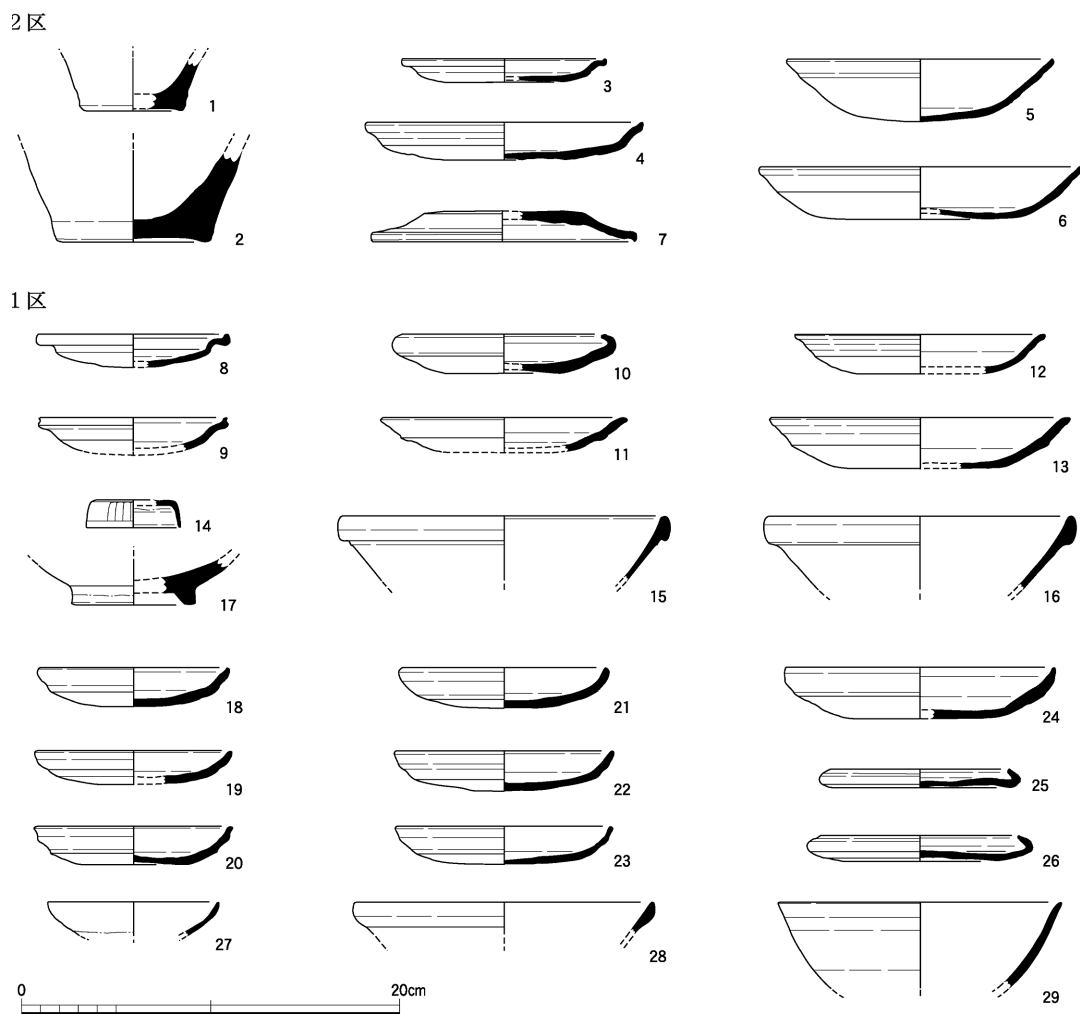


図12 土器類実測図1 (1 : 4)

泥砂層)からの出土である。8～13が土師器皿、14～17が輸入陶磁器で、14が青白磁合子蓋、15～17が白磁椀口縁部と底部である。平安時代後期、11世紀後半に属している。

18～29は1区SD29から出土した。18～26が土師器皿、27～29が輸入陶磁器で、27は青磁皿、28・29は白磁椀で、28は薄い玉縁を持つ。29は玉縁を有しないタイプで、器壁の薄いものが多い。平安時代後期、12世紀前半に属している。

江戸時代 (図13 - 30～50)

30は施釉陶器椀で、2区SK67から出土した。江戸時代中期に属する。

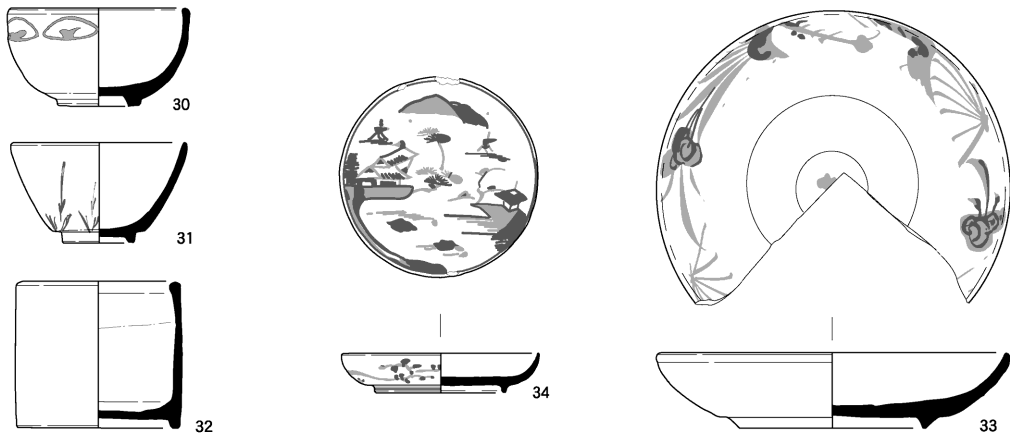
31～34は2区SK17から出土した。31・32は施釉陶器 (京焼) で、31が椀、32は香炉である。33・34は伊万里産染付磁器。江戸時代中期に属する。

35～37は施釉陶器 (京焼) で、35が皿、36が椀、37が鬢水入れである。3区遺構検出中出土。江戸時代中期に属する。

38は伊万里産染付磁器で、3区SK26から出土した。江戸時代中期に属する。

39～50は3区SK22から出土した。39～44が土師器皿、45・46が土師質土器塩壺蓋、47が磁器 (白磁) 皿、48が染付磁器仏飯器、49が施釉陶器 (京焼) 椀、50は瓦質土器焙烙である。江戸時

2区



3区

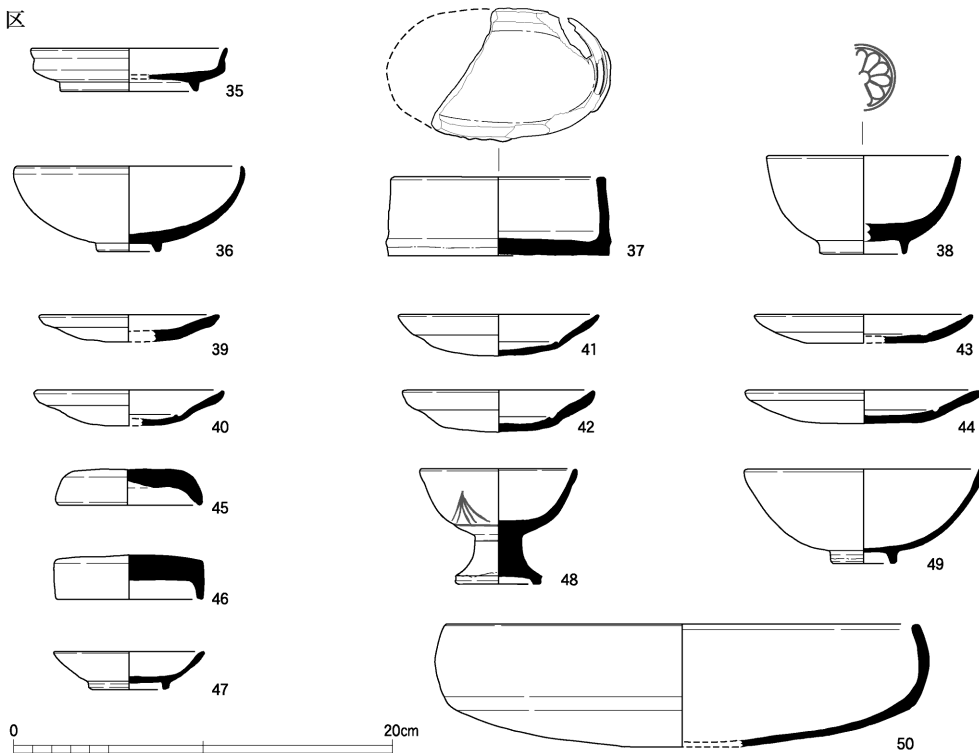


図13 土器類実測図2 (1 : 4)

代中期、18世紀後半に属している。

(3) 瓦 類 (図版16・17、図14・15、附表 2)

平安時代 (14 - 51 ~ 61)

51は単弁八葉蓮華文軒丸瓦で、間弁は棒状、中房に1 + 5の蓮子を配する。界線は二重で、外区には珠文が巡る。焼成は硬質、胎土には砂粒を含み淡黄灰色。平安宮出土の緑釉軒丸瓦と同範であるが、施釉は施されていない。栗栖野瓦窯産、平安時代前期。52は単弁八葉蓮華文軒丸瓦で、範は浅い。文様は平坦で、中房に「下」銘、子葉は盛り上がり、間弁はY字形。平安時代中期。53は単弁十六葉蓮華文軒丸瓦で、花卉の反りはわずかで、外区に珠文を配する。平安時代前期。

54は複弁四葉蓮華文軒丸瓦で、間弁は撥形を呈し、界線は細く、外区に珠文を配する。平安時代前期。55は蓮華文軒丸瓦で、蓮弁は簡略化されている。中房に1 + 4の蓮子、外区に珠文を配する小型の軒丸瓦である。平安時代前期。56は複弁蓮華文軒丸瓦で、各蓮弁は肉厚に表現され、外区に珠文を配する。内・外区を分ける界線がやや幅広い。平安時代中期。

57~59は均整唐草文軒平瓦である。57は中心飾りが対向C字形で、左右に緩やかに3反転する主葉、支葉を配する。外区の珠文はやや密である。栗栖野瓦窯産、平安時代前期。58も中心飾りは対向C字形で、C字形頭部は内側に巻き込む。西賀茂瓦窯産、平安時代前期。59は左右に2反転する唐草を配している。平安時代前期。60・61は共に剣頭文軒平瓦である。60は剣先単位を密

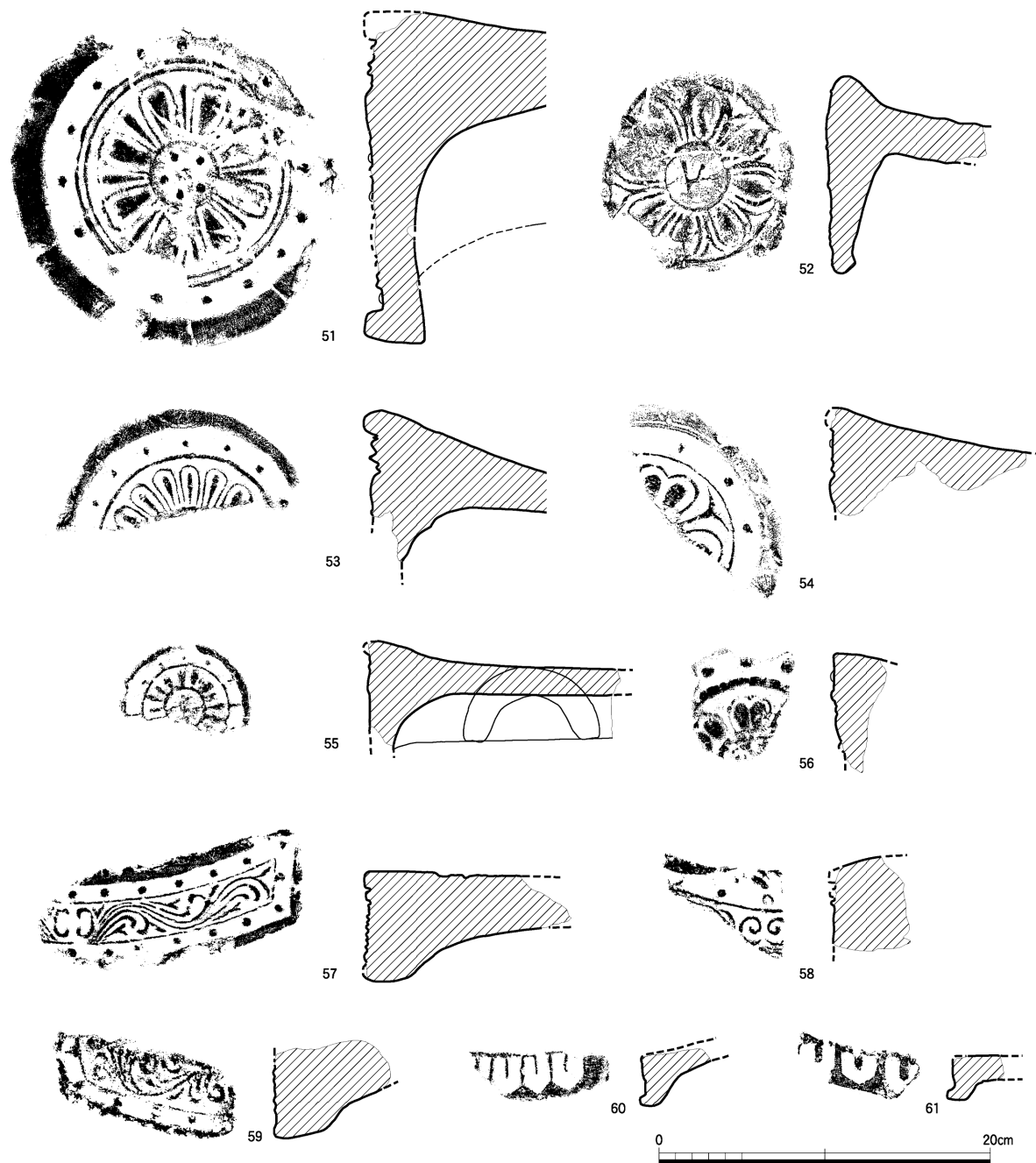


図14 瓦類拓影・実測図1 (1 : 4)

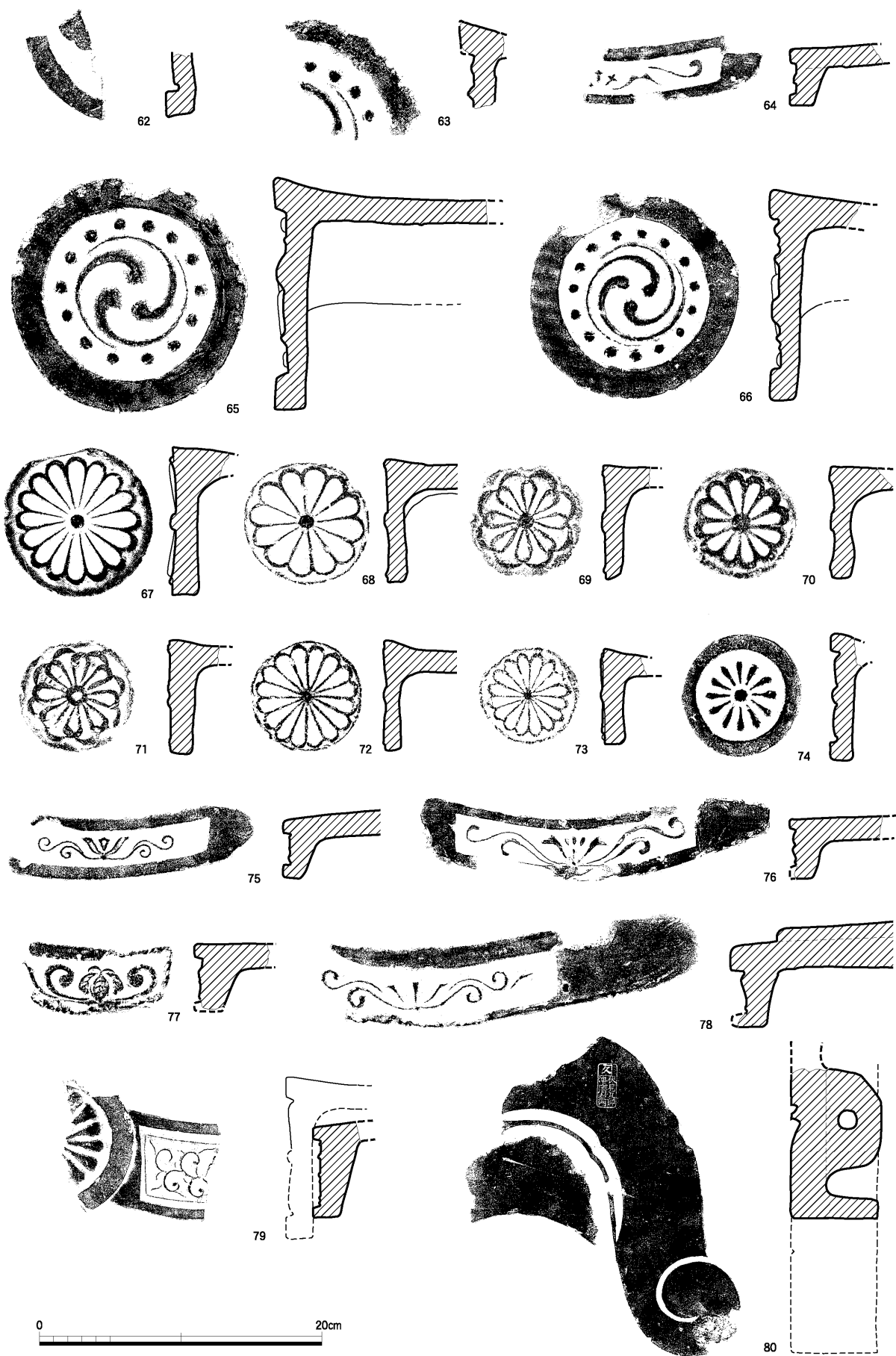


图15 瓦類拓影・実測図2 (1 : 4)

に配置する。平安時代後期。61は剣先単位間がまばらで、剣先鑄を太くしている。鎌倉時代か。

桃山時代から江戸時代（図15 - 62 ~ 80）

62~64は金箔瓦である。62は家紋軒丸瓦で、家紋は桐文と思われる。周縁に金箔が残る。63は三巴文軒丸瓦で、尾部から頭部に向かって右巻きの三巴文を配する。瓦当一部に金箔がわずかに残る。64は唐草文軒平瓦で、中心飾り付近に金箔が一部残る。桃山時代。

65・66は三巴文軒丸瓦で、右巻きの三巴文を配する。65・66共に巴の頭部は離れ、尾部は長く、互いに接しない。巴文の外側には珠文を配する。周縁幅は広い。江戸時代。

67~73は菊丸瓦で、菊花文を配する。67・72・73が十六弁、68・70が十二弁を連続して配する。69・71は二重に八弁を配している。67は他のものに比べるとやや大きく、瓦当面には漆喰が塗られた跡が認められる。江戸時代。

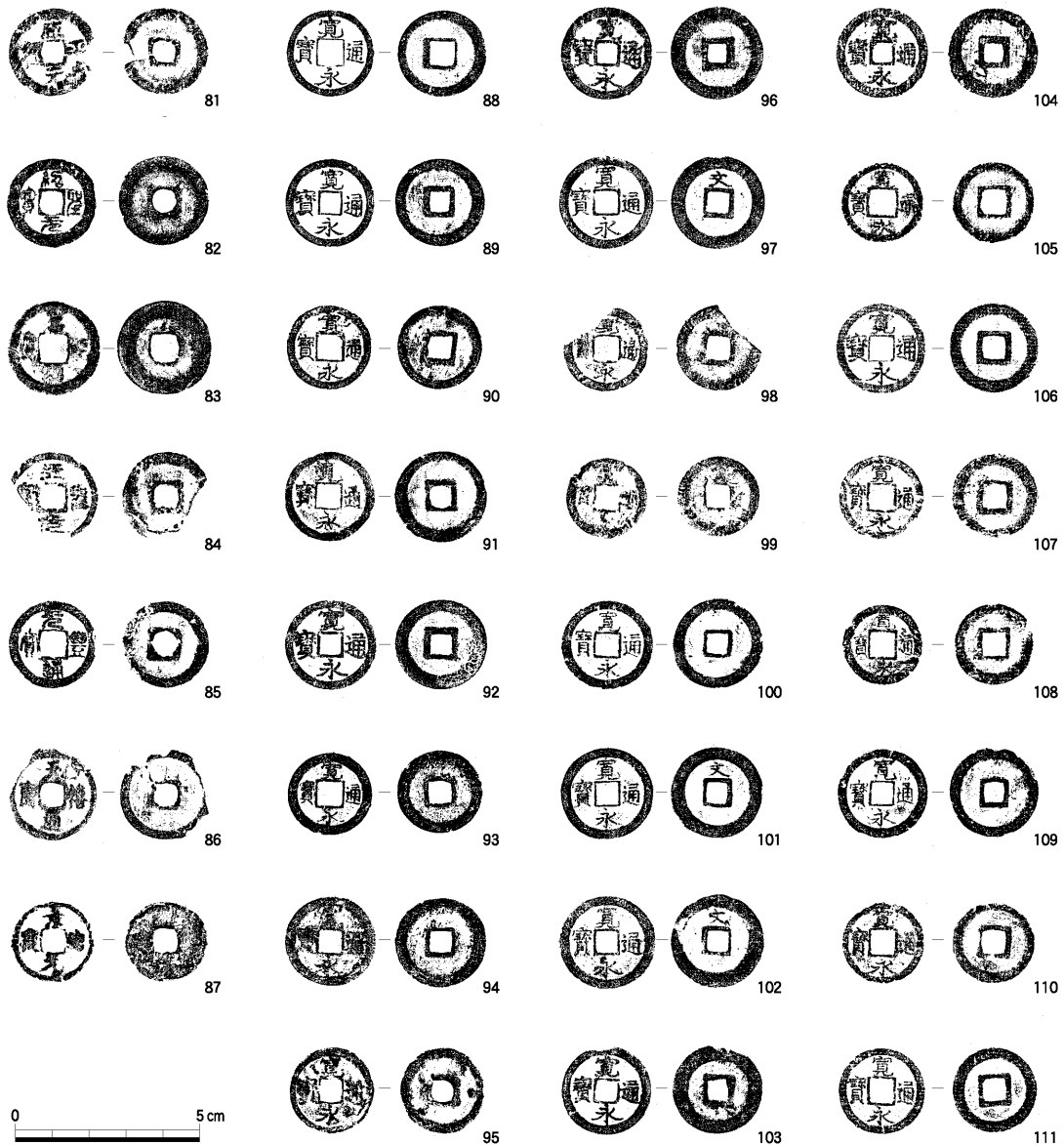


図16 銭貨拓影（1：2）

74は菊丸瓦で、十二弁の菊花文を配する。弁は盛り上がる。時期不明。

75～77は唐草文軒平瓦で、77の中心飾りには鳶文を配している。江戸時代。

78は道具瓦で隅瓦の一種である。江戸時代。

79は軒棧瓦で、丸瓦部に菊花文、平瓦部に唐草文を配する。時期不明。

80は鬼瓦で、周縁上部向かって右上に刻印が認められる。上段に「久」、下段縦2行に「伏見瓦師 池上清右工門」と判読できる。江戸時代後期以降である。

(4) 銭貨 (図16、付表3)

81～87はいずれも北宋銭で、「咸平元寶」「紹聖元寶」「皇宋通寶」「天聖元寶」「元豊通寶」「天禧通寶」「景德元寶」が出土した。81は2区景石間埋土上層、82は1区Pit13、83・84は1区室町時代後期の包含層、85・86は6区SD2、87が8区SK7から出土している。

88～111は17世紀前半から18世紀前半にかけて各地で鑄造された「寛永通寶」で、88～95が2区SK67から出土、96・97が2区壁面・SK8、98・99が3区Pit73、SK150。100～105はいずれも8区出土で、103・104が黒褐色砂泥層・SK3から、他は清掃中・壁面から出土した。106は9区壁面清掃中、107～110は3区江戸時代遺構検出中、111が8区SK1からの出土である。

(5) その他の遺物 (図17、付表4)

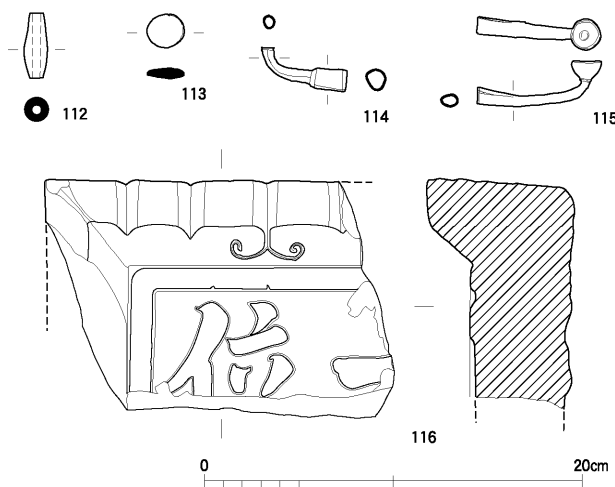
土製品 (図17 - 112・113)

112は土錘で、中央が膨らむ筒型を呈し、中心に小孔を開ける。1区灰黄褐色泥砂層から出土した。

113は碁石とみられ、にぶい黄橙色を呈する。2区SK1からの出土で、江戸時代に属する。

金属製品 (図17 - 114・115)

8区整地層の暗褐色砂泥層から煙管の吸口(114)・火口(115)が出土した。吸口端部を上方



に曲げた古式のもので、江戸時代前期に属している。

石製品 (図17 - 116)

石製品は9区黒褐色泥砂層から116が出土した。扁額とみられるもので、右半と下端の一部を欠く。右から「正一位」と彫り込まれたと考えられるもので、「位」の字の一部に金泥を塗布した痕跡が認められる。江戸時代に属している。

図17 その他の遺物実測図(1:4)

西辺405m（約207間）、堀外北辺350m（179間）、堀外南辺350m（179間）で囲まれた規模とみられていた。しかし今回発見された石垣が、創建時西面堀の外側石垣基部と確認されたため、南辺及び北辺の規模を縮小して復元する必要がある。

それによれば、堀外南辺331.35m（約170間）、同じく堀外北辺331.35m（170間）となり、西面の堀は、従来の推定より17.55m（約9間）東寄りに設定されたことになる。また石材抜き跡と石垣間の幅は18.8mを測る。計測位置が石垣基底部東端から抜き跡西端部であるため、石垣の勾配を加味すると、石垣の天端部間では、19.5m（10間）になることも考えられる。したがって西面の堀幅は19.5m（10間）で縄張りされた可能性も指摘できよう。

平成13年度の発掘・試掘確認調査

1. 調査経過

平成12年度の試掘確認調査の結果を受けて、二条城築城四百年記念に伴う収蔵施設建設予定地が、城内東、現事務所北側に選定された。このため、今年度はこの建設予定地を発掘調査、さらに他の整備事業予定地は試掘確認調査を実施する運びとなった。

調査は2001年10月1日から開始し、2002年3月29日にすべての調査を終了した。この間、2002年3月22日に報道発表を、3月26日に現地説明会を開催し、調査の成果を公開している。

なお、当初1～9区の調査を予定していたが、3区・5区は府・市文化財保護課と二条城側が協議した結果、工事に伴う通路の確保・作業等の調整ができず、調査を断念した。

調査の結果、平安京冷泉院跡園池に伴う池、汀線、洲浜、景石などを検出し、冷泉院の北部から南東部に広がる園池の状況の一端が明らかになった。

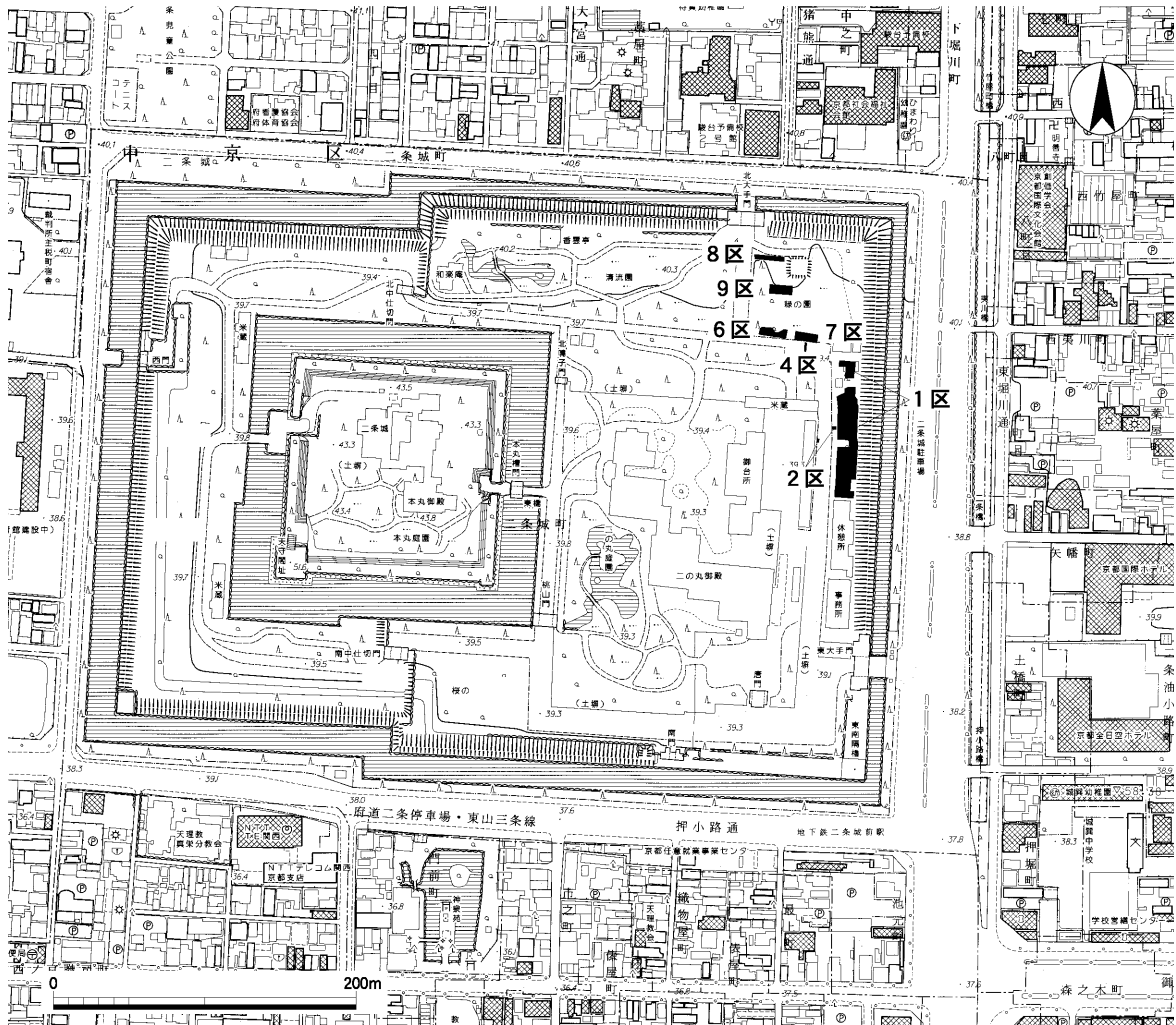


図18 調査位置図 (1:5,000)



図20 調査前全景



図21 調査風景

2. 遺 構

(1) 遺構の概要

1区 1-1区・1-4区では、平安時代前期から中期の池堆積土層、平安時代後期の池盛土層・景石・池堆積土層・溝、鎌倉時代から室町時代の池堆積土層・溝、室町時代後期（戦国時代）の溝・柱穴・土壌・整地土層、桃山時代の溝、江戸時代前期の柱穴・土壌、江戸時代中期から後期の土壌・井戸・柱穴・溝を検出した。

1-2区では、平安時代前期から中期の洲浜・汀線・池堆積土層、平安時代後期の汀線・池盛土層・池堆積土層・溝・井戸・柱穴・土壌、鎌倉時代から室町時代の溝・井戸・柱穴・土壌・整地土、桃山時代の土壌・柱穴、江戸時代前期の建物・柱穴、江戸時代中期から後期の建物・土壌・溝・柱穴・井戸を検出した。

1-3区では平安時代前期から中期の汀線・池堆積土層、平安時代後期の池堆積土層・溝、鎌倉時代から室町時代の池堆積土層、室町時代後期（戦国時代）の柱穴・溝、桃山時代の溝、江戸時代中期から後期の土壌・柱穴を検出した。

2区 2区は池の広がりや堆積土層の確認で設定した試掘調査トレンチで、2-1区では平安時代前期から中期の池堆積土層上の池盛土層を確認した。2-2区では平安時代前期から中期の池堆積土層を確認したが、池堆積土層上の池盛土層は確認していない。

4区 4区も7区で確認した陸地部から池汀線と池堆積土層の確認のため試掘調査区で、緩やかな傾斜を形成して池の堆積が始まる、ほぼ東西方向に伸びる汀線を確認している。

6区 平安時代前期から中期の池堆積土層・池盛土層・列石・焼土層・景石、平安時代後期の池堆積土層、鎌倉時代から室町時代の池堆積土層、室町時代後期の柱穴・土壌、江戸時代中期から後期の柱穴・土壌を検出した。

7区 平安時代前期から中期の池庭陸地部、室町時代後期の柱穴・土壌、江戸時代中期から後期の柱穴・土壌を検出した。

8区 室町時代後期の柱穴・土壌、江戸時代中期から後期の石敷き・瓦敷き土間・井戸・柱穴・土壌を検出した。

9区 平安時代前期から中期の池堆積土層・池盛土層・汀線・景石・池庭陸地部、平安時代後期の池堆積土層・汀線・景石、室町時代後期の柱穴・土壌、江戸時代中期から後期の井戸・柱穴・土壌を検出した。

(2) 1区の遺構(図版7~12、図22)

平安時代前期から中期の汀線・流路・洲浜・池堆積土層は、1-2区の3ヶ所の下層確認トレンチで確認した。汀線は1-2区の北東から南東方向に伸びる。この中央東側から青灰色の微砂層が堆積する幅約3m前後、深さ0.5mの流路を検出した。洲浜は最大幅5mから最小幅2m前後を測る。径2~5cmの多数の小礫を淡黄色粘土層に貼り付けたもので、縄文土器、石器、平安時代前期の土器類も混入している。平安時代前期から中期の池堆積土層は1-2区北西部、1-1区・1-4区の全域、1-3区の南西部に広がり、これを遺構掘形断面と下層確認トレンチで確認した。1-3区では調査区北側で北方向に緩やかに上昇する砂礫層を検出しており、池庭洲浜の傾斜部分

表3 遺構概要表

時代	遺構				
	1区	6区	7区	8区	9区
縄文時代前期	遺物包含層				
平安時代前期	洲浜、池堆積土層、汀線、流路		池庭陸地、洲浜上部、汀線		汀線、池堆積土層、景石
平安時代中期	洲浜、池堆積土層、汀線、流路	池堆積土層、池盛土層、景石、列石	池庭陸地、洲浜上部、汀線		汀線、池堆積土層、景石
平安時代後期	洲浜、池堆積土層、汀線、池盛土層、景石、SD233、SX275、SE226・227、SD83・217、SD10・110・153下層	池堆積土層			池堆積土層
鎌倉時代	池堆積土層	池堆積土層			池堆積土層
室町時代前期	池堆積土層	池堆積土層			
室町時代後期	整地土層、SE232・314	SK6・8・9	柱穴	柱穴、土壌	柱穴
桃山時代	SD10・110・153上層				
江戸時代前期	柱穴、土壌、整地土層	整地土層	整地土層	整地土層	
江戸時代中期	建物跡、柱穴、土壌、SE8、SX327	Pit27・28・29、SK1	SK6・17・18・26、SD7	石組遺構、土間状遺構、柱穴、土壌	柱穴、SE1
江戸時代後期	柱穴、土壌	柱穴、土壌	柱穴、土壌	柱穴、土壌	

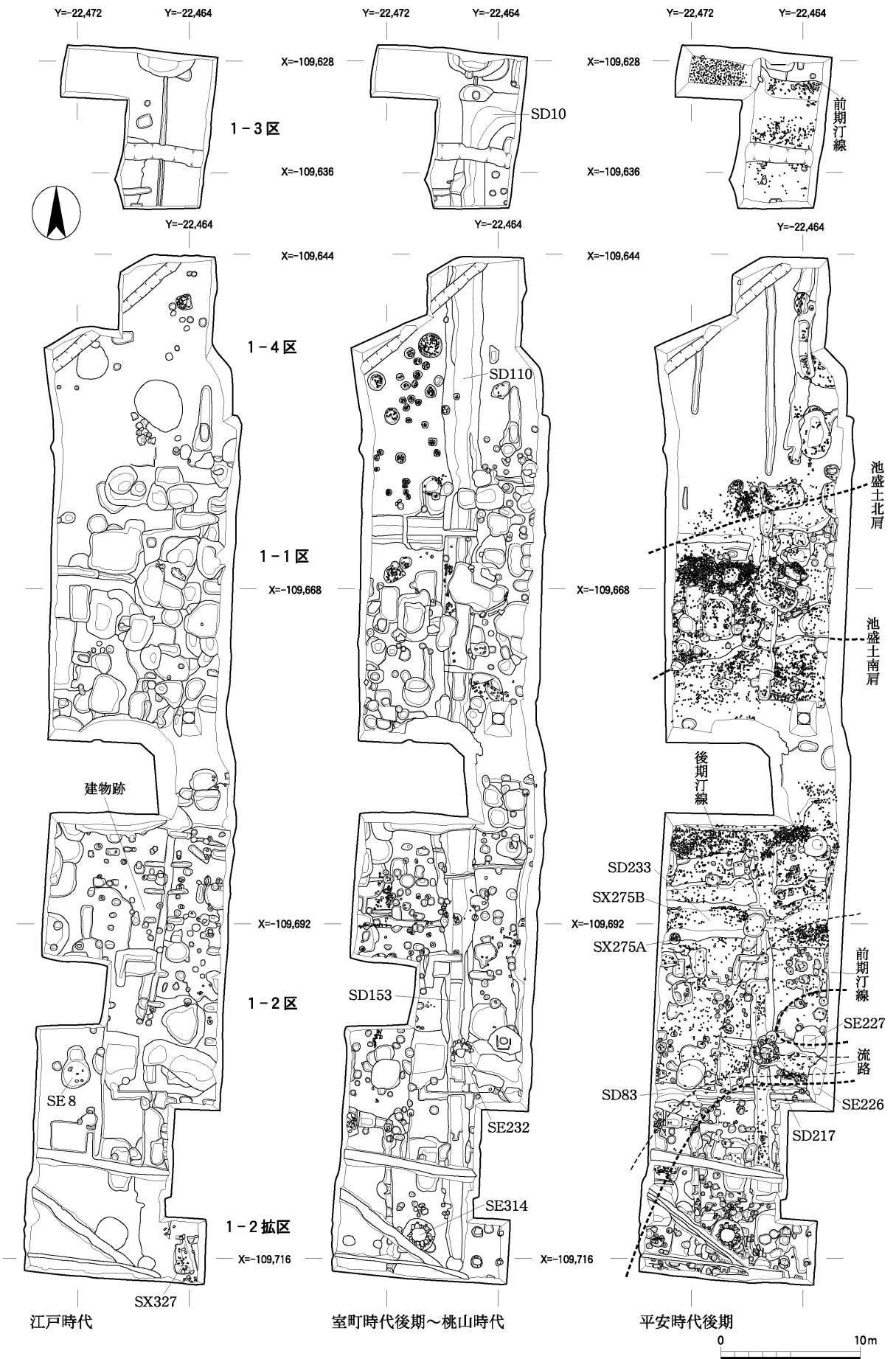


図22 1区遺構平面図(1:400)

とみられ、上面に厚さ0.5～0.7m前後の砂の厚い堆積が確認できる。下層では平安時代前期、上層では平安時代中期初頭の遺物が多量に出土した。

平安時代後期の池盛土層と景石は1-1区で検出した。池盛土層は、平安時代前期から中期の池堆積土層約0.3mの上に、砂と小礫が混合された土砂を厚さ約0.4～0.3mの高さで盛ったもので、北側で厚く、南側に薄い。1-1区中央で東西方向、やや北西から南東に傾いている。幅は推定復元長約10mである。景石は最大長1.5m、最大幅0.8mの石材10石以上を7ヶ所に配置したもので、さらに景石の周辺と池盛土層のほぼ全体に径5～10cmの川原礫を貼り付けている。

景石1(図24)は3石からなり、1の長軸を北西から南東に向け、2を南東端、3を北東端に据える。1は長軸1.35m、短軸0.7m、灰白色チャートである。2は長軸0.7m、短軸0.5m、灰白色チャート。3は長軸0.5m、短軸0.35m、白色チャート。

景石4(図24)は4石からなり、共に長軸を北東から南西に向け、それぞれ連続して据え付け、天端をほぼ揃える。1は長軸0.55m、短軸0.3m、褐灰色チャート。2は長軸0.85m、短軸0.3m、粘板岩。3は長軸0.55m、短軸0.4m、明青灰色チャート。4が長軸0.45m、短軸0.35m、灰色砂

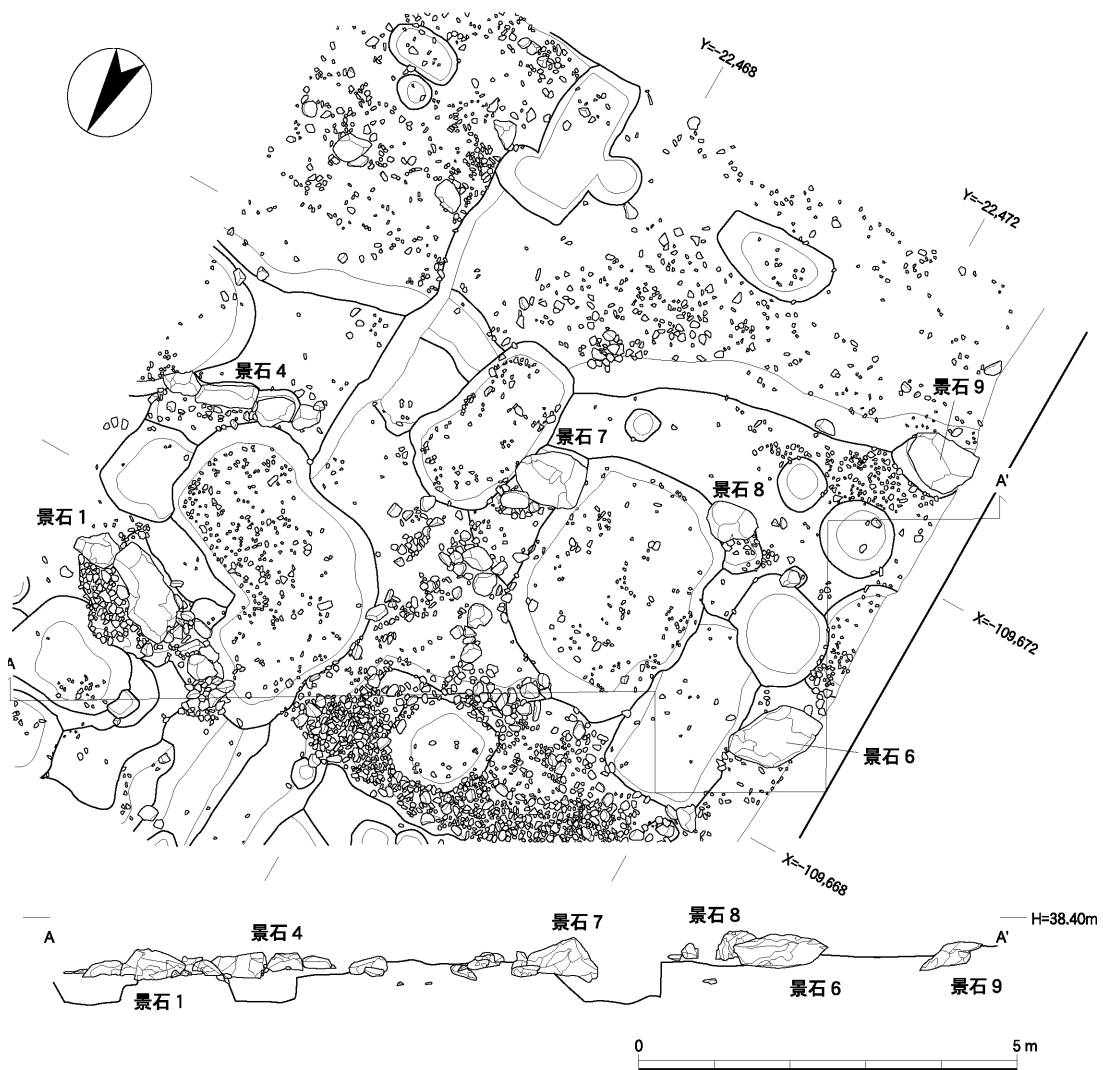


図23 1-1区景石配置実測図(1:100)

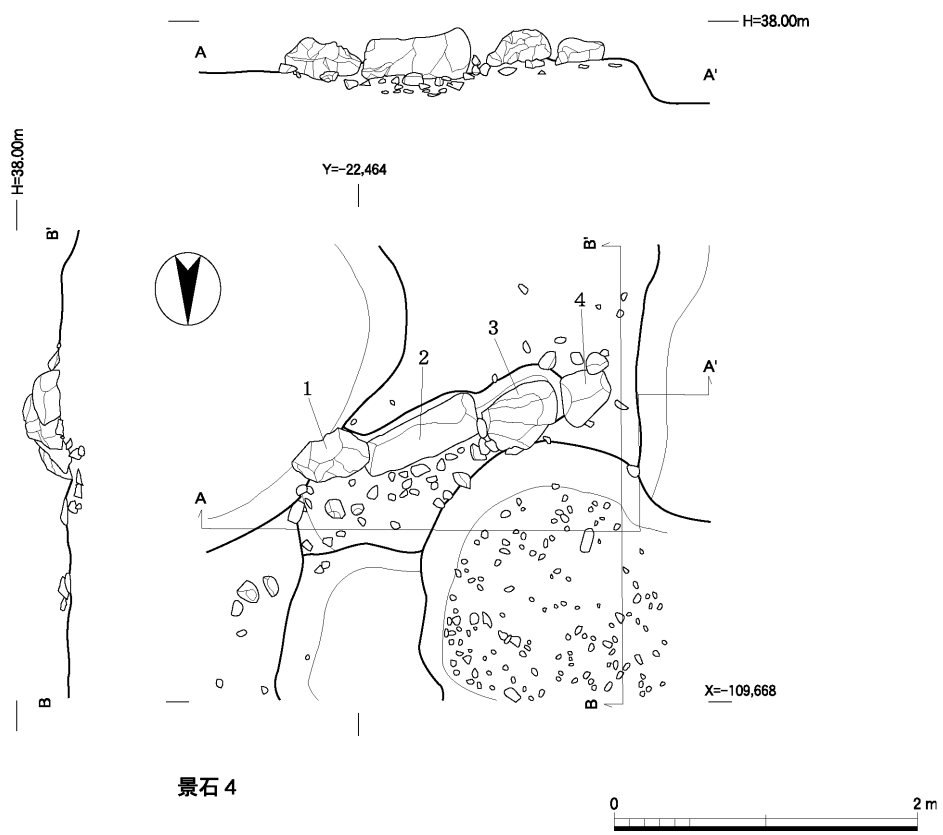
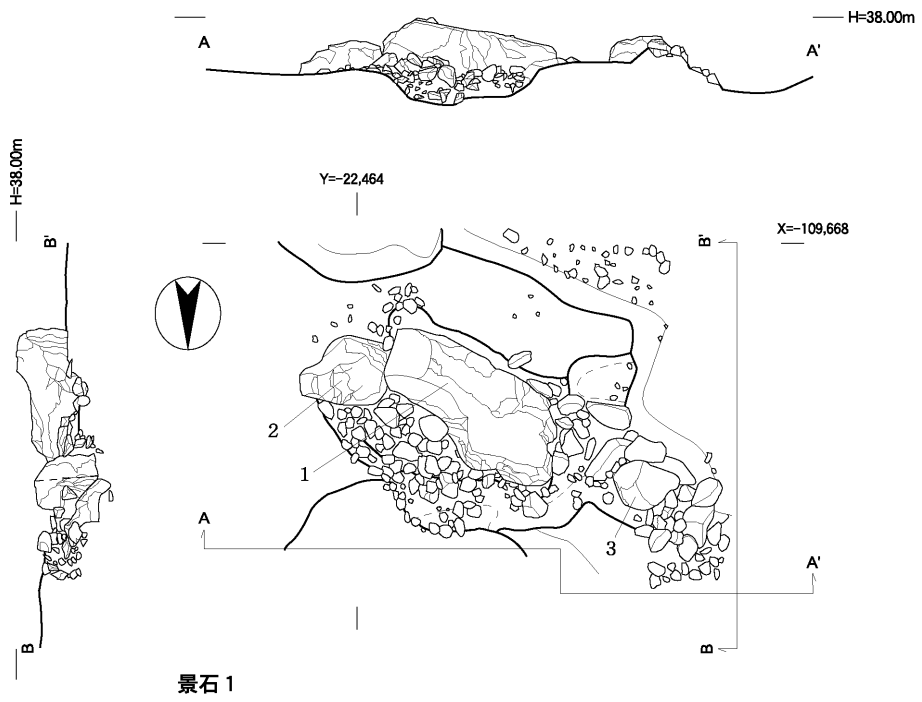
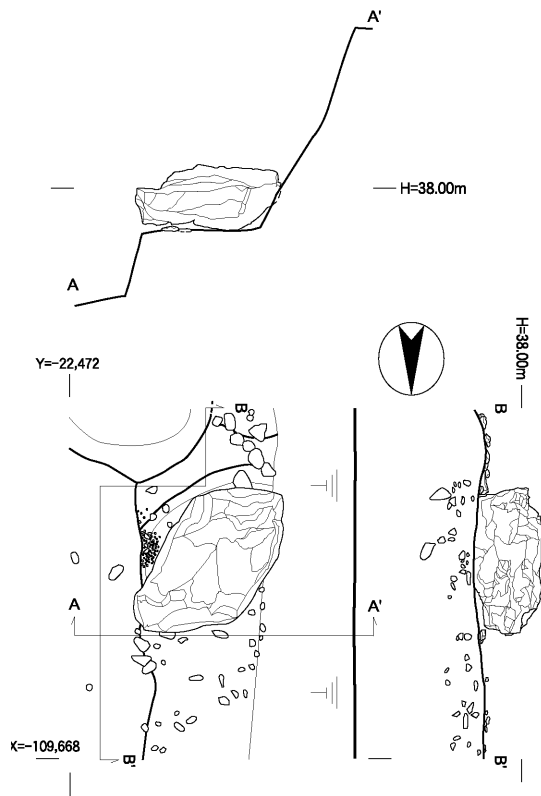
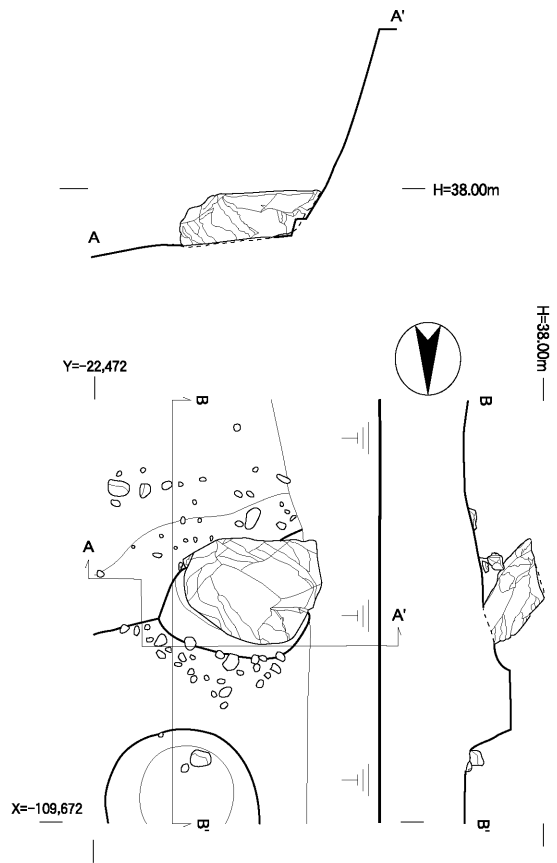


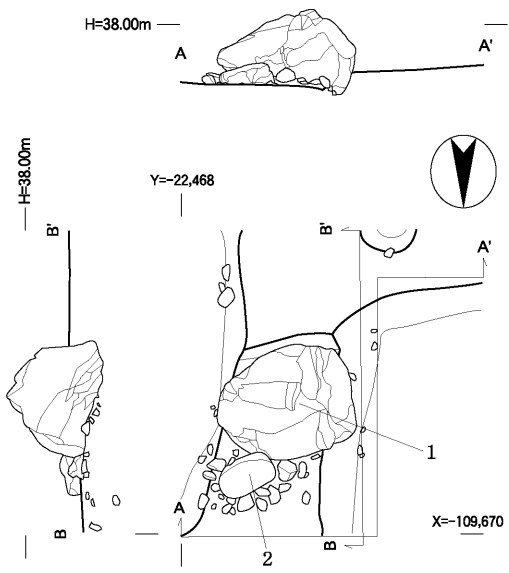
图24 景石 1・4 实测图 (1 : 50)



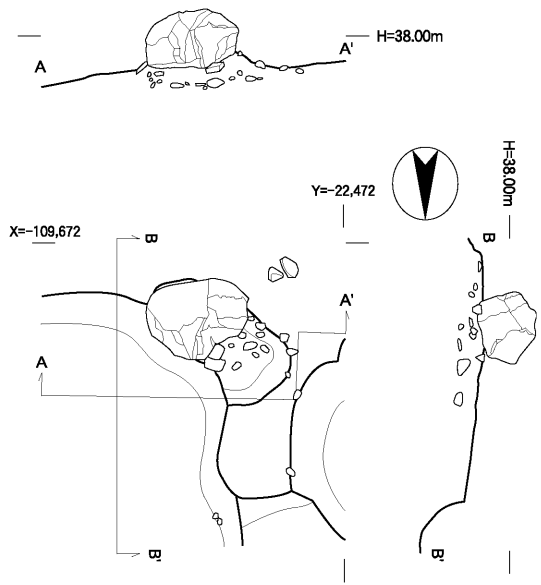
景石 6



景石 9



景石 7



景石 8



图25 景石 6 ~ 9 实测图 (1 : 50)

岩（熱変成）である。

景石6（図25）は、長軸を北東から南西に向け、天端を水平にして据える。長軸0.5m、0.3m、石質は灰褐色チャート（熱変成）。

景石7（図25）は大小2石からなり、1が長軸0.9m、短軸0.7mを測り、2が長軸0.4m、短軸0.25mを測る。それぞれ長軸を北東から南西に向けて並べて据える。石質はそれぞれ灰色砂岩（熱変成）、褐灰色砂岩（熱変成）。

景石8（図25）は、長軸0.7m、短軸0.5m、長軸を北西から南西に向けて据える。石質は白色チャート（熱変成）である。

景石9（図25）は、長軸約1m、短軸0.65mを測る。長軸をほぼ東西に向けて据え、南側に根石を入れて支える。石質は灰褐色砂岩（熱変成）。

この池盛土層と景石の上に平安時代後期から鎌倉時代・室町時代の灰色泥砂層が堆積する。

平安時代後期の池の汀線・井戸・溝・柱穴は1-2区で検出した。汀線は1-2区北端に北東から南西方向へ緩やかに湾曲する。前期の洲浜から北西方向に10m前後の範囲を土砂で埋め立て、幅2.5m前後の洲浜を形成し、表面に径5～10cmの小礫を貼り付けている。溝SD233はこの埋め立て土砂を切りこんで成立する。東から西方向の東西溝で、幅2.5m、深さ0.5mを測る。この溝の西端の両側に、石材を組み合わせたものと、小礫を詰めたものが対になった土壌SX275A・275B（図28）があり、橋の脚を据え付けた痕跡とみられる。井戸SE226・227は1-2区中央東端で検出した。SE227（図28）は径2.1mの円形の掘形をもち、深さ1.6m、井戸側は木枠組みで、最下段の木枠が遺存し、中央に径0.5mの曲物を据えている。SE226は木枠が遺存せず、すべて抜き取られた後に埋め戻されたとみられよう。溝SD83・217は1-2区中央で東西方向に検出した。SD83は西側幅1.3m、深さ0.4m、東側幅0.5m、深さ0.2mを測り、西流する。SD217は幅0.5m、深さ0.2mを測り、東西に5m分を確認した。柱穴は1-2区南東部に多く検出している。径0.2m前後の柱穴を10数基に上るが建物としてはまとまらない。

1区全域に室町時代後期（戦国時代）の井戸・柱穴・整地土層他がみられる。井戸SE232・314は石組み井戸で、SE232（図28）は掘形径2.1m、内径1.1mの円形石積み井戸で、石材は径0.2～0.4mの川原石を使用する。深さは未掘により不明、径0.8mの石材を中に落とし込んで廃棄している。SE314（図28）は掘形の平面円形で、径2.2mを測る。石積み円形井戸で、径0.2～0.4mの川原石を積み上げる。検出面での径約1m、内部で径1.15mとやや膨らむ。深さ1.7m以上を測る。柱穴は径1.5～2.0mのものが多く、調査区全域で検出されるが、建物・柵としてまとまるものは少ない。整地土層は1-2区北西部以北、池堆積土層上を中心に1区全域で、約0.15～0.2mの厚さで見られ、土層中に小礫を多量に含む、軟弱な湿地地盤を考慮した整地とみられる。

1区中央を南北に貫く溝SD10（1-3区）、SD110（1-1区）、SD153（1-2区）はいずれの地区でも幅約2m前後、深さ0.7m前後を測る。1-3区中央で東方向に屈曲する。堆積土層下層に室町時代後期後半（16世紀後半）の遺物が堆積し、1-2区のSE232を壊し成立している。しかしながら、溝の位置・方位が左京二条二坊五町、西一行、西二行の南北界線にほぼ沿うこと、

溝断面の両側方に古期の溝肩部とみられる堆積を確認していることなどから、平安時代後期末頃に成立し、池の排水を目的とした機能を果たしたが、室町時代までには一旦埋没し、室町時代後期前半（戦国時代前半期）の井戸・柱穴などが成立。その後室町時代末期（戦国時代後半期）に至って断面箱型に深く掘り直されたもので、桃山時代末期には大量の黄色粘土を使用して一気に

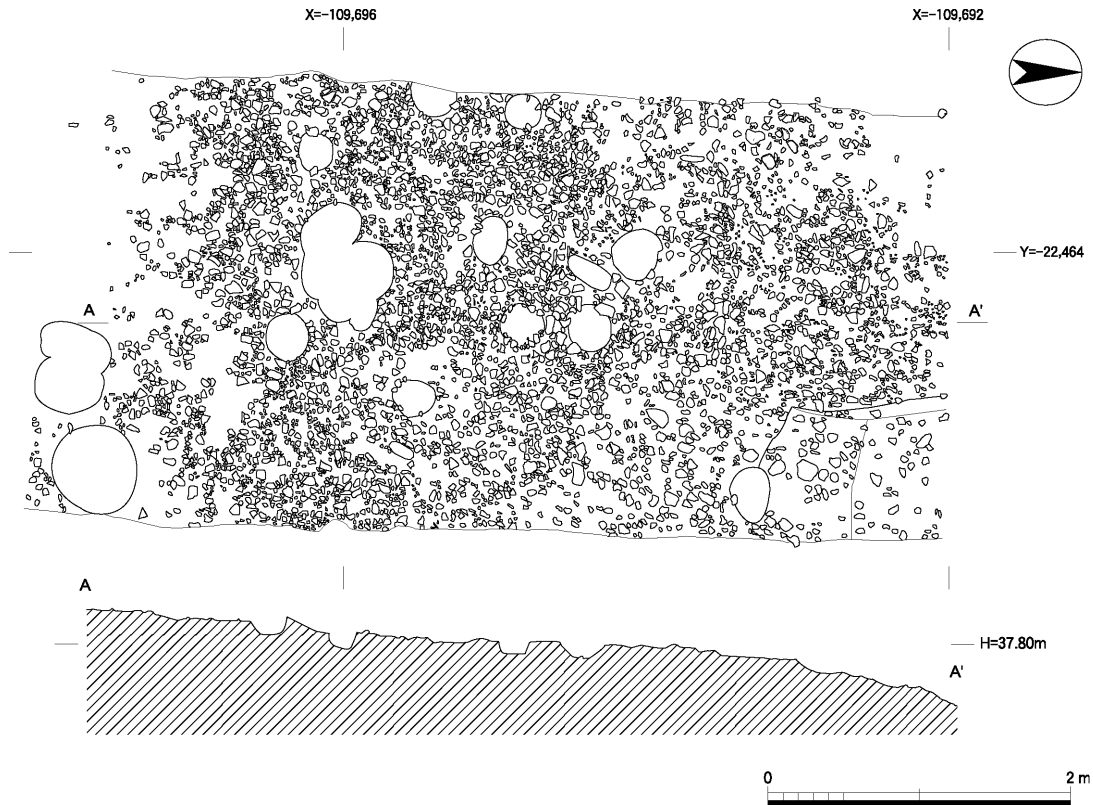


図26 1-2区洲浜実測図(1:50)

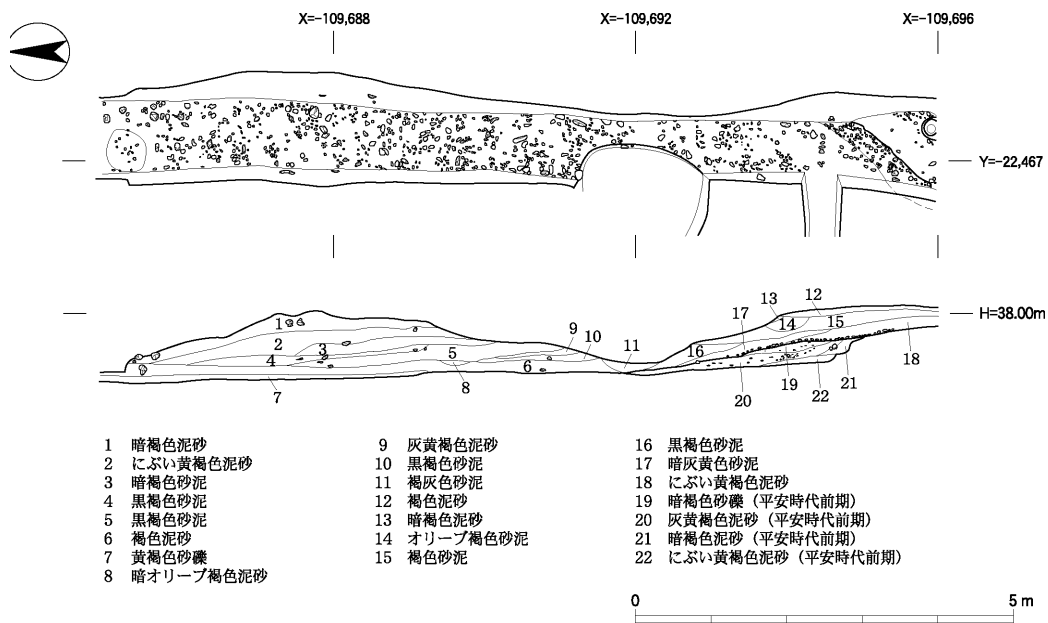


図27 1-2区断割調査実測図(1:100)

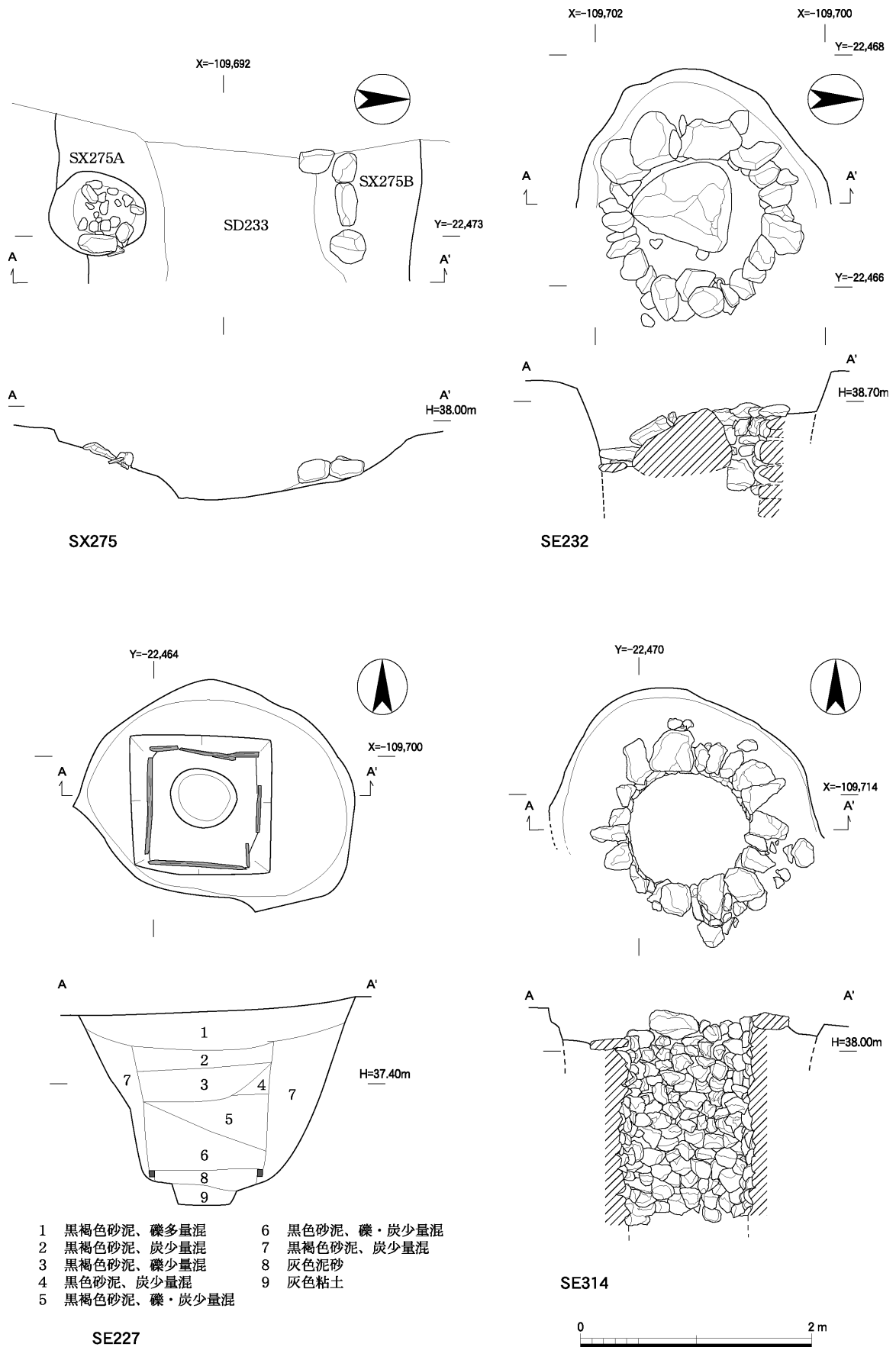


図28 1-2区SX275、SE232・227・314実測図(1:50)

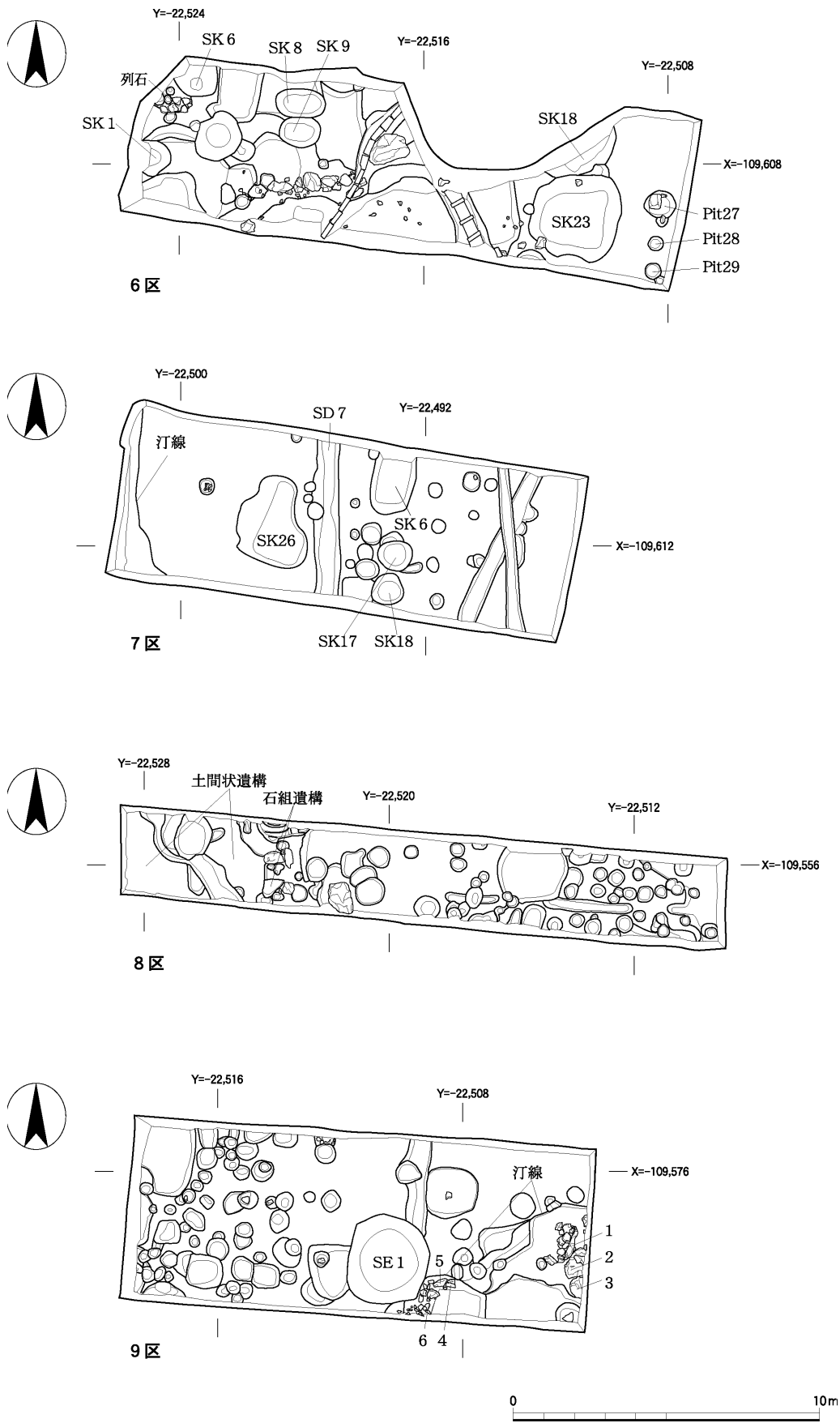


图29 6 ~ 9区遺構平面図 (1 : 200)

埋め戻されたものとみられよう。

江戸時代には井戸SE 8、鑄造遺構SX327、柱穴多数が密集した地区がある。SE 8は木枠や石積みは認められない。壁面が礫層で硬いため、素掘りの井戸であった可能性が高い。江戸時代中期の遺物が出土している。掘形は円形で径約2m、深さ2m以上を測る。SX327は中央に焼土層と鉍滓が堆積し、側面に焼け歪んだ壁面をもつ。四方に礎石を据えた柱痕が検出されており、上屋施設を備えたものとみられる。1-2区北半部東西約10m、南北約10mの範囲に径0.1~0.2m前後の柱穴が密集して検出される。柱穴の時期は江戸時代中期から後期に及び、縦横10m前後の規模で、数回の建替えを受けた建物跡とみられる。

(3) 6区の遺構(図版13、図29)

平安時代中期の池堆積土層は調査区南西部に検出した。汀線から南側に堆積し、上層は厚さ0.5mで暗褐色泥砂層、下層は厚さ0.2mで黒褐色砂泥層が堆積し、下層には炭、焼土が多量に混入する。汀線は北東方向から南西に向かい、上場から下場まで1m前後落ち込む。池盛土層は砂に小礫を混入したもので、汀線の北域に厚さ1.2m前後で盛られている。景石(図30)は、径1.5m前後ものから0.5m前後の石材が汀線上場に沿って配置されている。石質は1が白色チャートで長軸1.1m、短軸0.7mを測る。2が黒雲母花崗岩で、長軸0.35m、短軸0.25mを測る。3は長軸0.25m、短軸0.2m、黒雲母花崗岩。4が長軸0.45m、短軸0.3m、灰色砂岩(熱変成)。5が長軸0.55m、短軸0.45m、黒色粘板岩(熱変成)。6が長軸0.25m、短軸0.2m、褐灰色砂岩(熱変成)。7が長軸0.3m、短軸0.2m、灰白色砂岩(熱変成)。8は灰色砂岩(熱変成)で、長軸0.7m、短軸0.3mを測る。列石は調査区西端に、天端を揃えた径0.3m前後の川原礫を複数個、東西に並列して

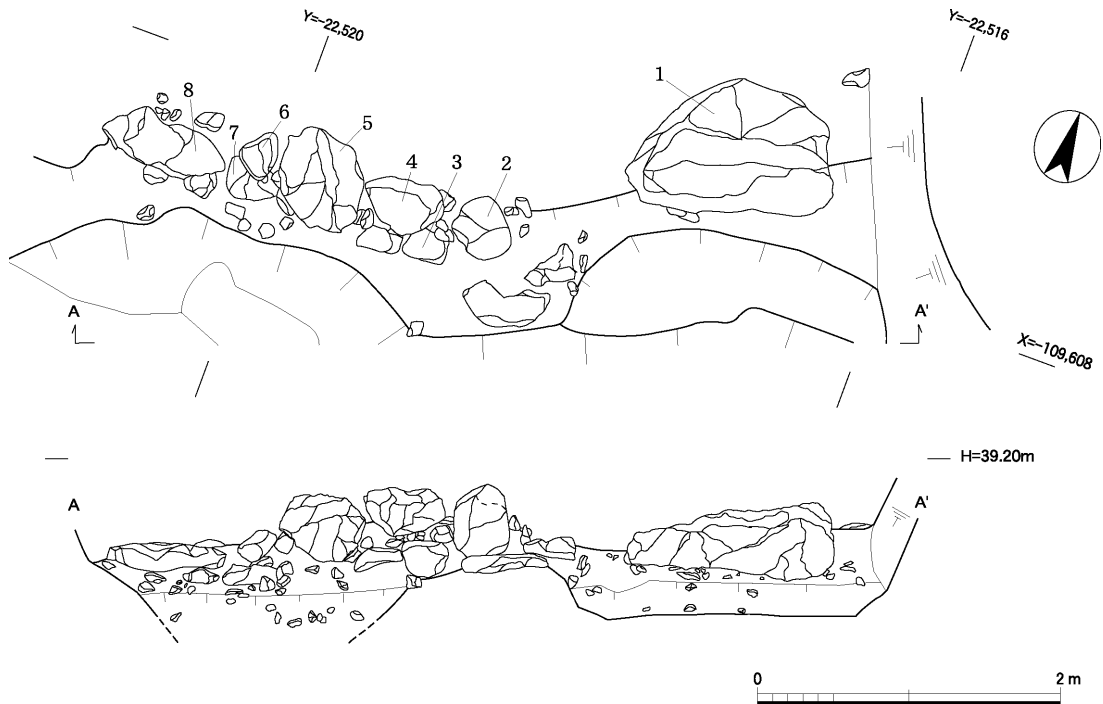


図30 6区景石実測図(1:50)

据えられる。建物に付属した雨落溝の一部である可能性がある。調査では5石の配置と2ヶ所の抜き跡を確認した。

池堆積土層の上層は平安時代後期から鎌倉時代の出土遺物があり、池は、平安時代中期以降鎌倉時代までに徐々に埋没した様相が窺える。

室町時代後期の土壌SK6・8・9は調査区西側で検出した。SK6は径1.5mの円形で北西半は調査区外で、深さ1mを測る。SK8は平面楕円形で、東西長1.5m、南北長0.9m、深さ0.3mを測る。SK9も平面楕円形を呈し、東西長1.3m、南北長0.9m、深さ0.5mを測る。土壌SK18は南東の一部を検出した。径2.6mの平面形円形で、北西部は調査区外である。深さ1.2mを測る。土壌SK23は平面形隅丸方形で、一辺2.5m、深さ1.2mを測る。

江戸時代中期から後期の遺構は江戸時代前期の整地層上に柱穴Pit27・28・29、土壌SK1などがある。Pit27は径0.9m、中央に径0.4mの石が据えられ、礎石の可能性がある。Pit28・29は径0.6m、深さ0.5mを測る。SK1は調査区東端で検出した。径1.2m、西半は調査区外である。深さ1.5m、素掘りであるが、井戸側を取り払われた井戸の可能性がある。

(4) 7区の遺構(図版14、図29)

平安時代前期から中期の池庭の陸地を調査区中央で、池への傾斜が始まる洲浜天端部と汀線を調査区西端で確認した。汀線は北西方向から南東方向に伸びる。洲浜には一部に地山の黄色砂泥層に径5cm前後の小礫が叩き込まれている。

室町時代後期の柱穴は調査区中央で径0.4m前後、深さ0.4m前後のものを多数検出したが、建物としてはまとまらない。

江戸時代中期から後期の土壌SK6・17・18・26、溝SD7がある。SK6は調査区中央端で検出した。一部は調査区外にのびる。平面形長方形を呈し、東西1.4m、南北2.0m以上、深さ0.4mを測る。SK17は平面円形で径1.2m、深さ0.4m、SK18も平面円形で径1.0m、深さ0.4mを測る。SK26は平面不定形で、東西2.5m、南北3.0m、深さ0.5mを測る。SD7は幅1.0m前後、深さは0.1~0.2m前後を測り、南側で深くなる。溝の流下方では北西から南東へ傾く。

(5) 8区の遺構(図版14、図29)

8区では平安時代に遡る遺構は確認できていない。

室町時代後期の遺構には調査区東側を中心に径0.5m前後、深さ0.3m前後の柱穴が多数検出された。建物としてはまとまらない。

江戸時代中期から後期の遺構は調査区西側で径0.7mと0.8mの2個の石材を南北0.5m間隔で、天端を揃えて配置した石組み遺構、砂と粘土で整地面を造りだし上端に瓦片を貼り付けた瓦敷き土間状遺構を確認している。石組み遺構と土間状遺構の天面は揃っている。上屋を持った建物の土間部分とみられ、石組み遺構はその間隔から上面に柱を据えた出入口施設であった可能性がある。この付近に比定されている番所建物に関係した遺構とみられる。

(6) 9 区の遺構 (図版15、図29)

9 区は12年度の試掘確認調査で設定、調査を実施した 2 区の西側、3 区の南側に設定した。

平安時代前期から後期の池堆積土層を調査区南東部で確認した。堆積土層下層で平安時代前期から中期の遺物が、上層で平安時代後期から鎌倉時代の遺物が出土した。汀線 (図31) は南西から北東に円弧を描いて伸び、12年度調査の汀線に続く。景石の配置は 2 群に分けられ、1 群は北東部汀線より下のレベルに0.4m前後の厚さで砂礫と粘土による盛土を行い、径1.2~0.4m前後の石材を組み合わせて配置される。2 群は南西部汀斜面に径0.4m前後の石材を配置している。1 は長軸1.1m、短軸0.3m、白色チャート (熱変成)、2 は長軸0.7m、短軸0.5m、灰色チャート (熱

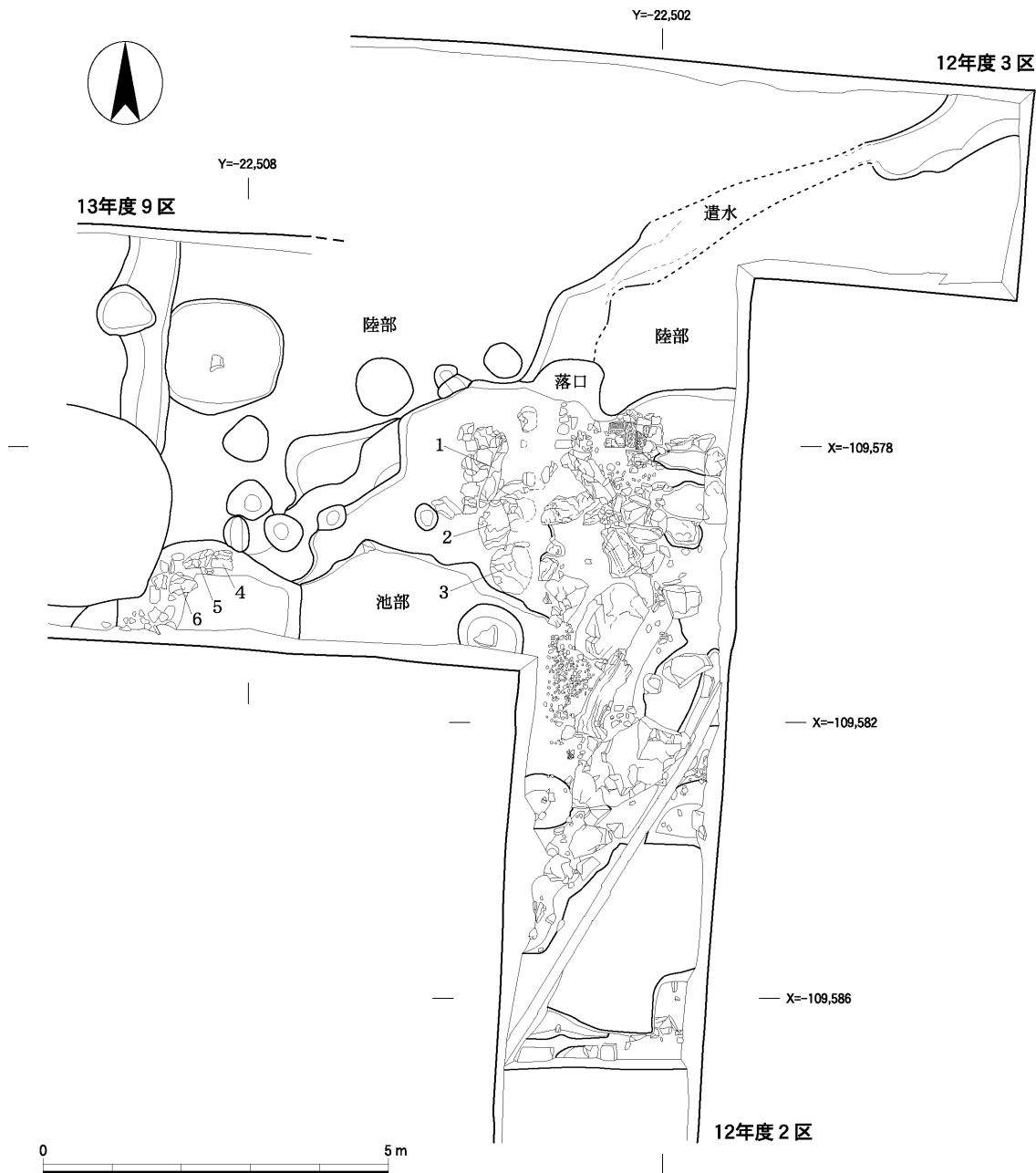


図31 9 区東半・12年度調査区遺構平面図 (1 : 100)

変成) 3は粘板岩ホルンフェルスで、長軸0.7m、短軸0.5m以上を測る。4は長軸0.3m、0.25m、石材は灰白色凝灰岩。5は0.5m短軸0.25m、黒色粘板岩ホルンフェルス。6は長軸0.4m、0.3m、黒色粘板岩ホルンフェルス。この汀線の北側は陸地部となる。

室町時代後期の遺構は径0.5m前後、深さ0.2m前後の柱穴が多数確認されているが、建物などにはまとまらない。

江戸時代中期から後期の井戸SE 1は平面円形で、径3.0m、深さ3.0m以上、底部に桶枠を有する。桶枠は上下2段を確認し、上段は径1.2m、高さ0.8m、下段は径0.9m、高さ0.8mを測る。

柱穴は0.7m前後、深さ0.3m前後のものが確認されるが、建物としてはまとまらない。

3. 遺物

(1) 遺物の概要

縄文時代の遺物は、1-2区で出土した。土器と石器(石斧・石鏃・剥片)があり、早期と前期に属する。

平安時代前期の遺物は、土師器・緑釉陶器・灰釉陶器・黒色土器・輸入陶磁器・瓦類がある。主として1-4区池の肩口で出土した。他に1-2区の平安時代前期の洲浜周辺と9区で少量が出土した。平安時代中期の遺物は、土師器・緑釉陶器・灰釉陶器・瓦類がある。1区の池堆積土層

表4 遺物概要表

時代	内容	コンテナ箱数	Aランク点数	Bランク箱数	Cランク箱数
縄文時代	縄文土器、石器、土鏃		縄文土器32点、石鏃16点、石斧1点、土鏃1点		
平安時代	土師器、須恵器、黒色土器、緑釉陶器、灰釉陶器、白色土器、瓦器、輸入陶磁器、瓦類、銭貨、土製品		土師器41点、須恵器5点、黒色土器2点、緑釉陶器3点、灰釉陶器6点、白色土器4点、瓦器7点、白磁11点、彩釉陶器20点、軒丸瓦27点、軒平瓦58点、平瓦1点、銭貨30点、土鏃1点、陶鏃1点		
鎌倉時代	土師器、陶器、瓦器、輸入陶磁器、瓦類、石製品		軒丸瓦3点、軒平瓦5点		
室町時代	土師器、施釉陶器、瓦器、輸入陶磁器、瓦類、銭貨、石製品		土師器5点、施釉陶器2点、白磁1点、染付磁器1点、銭貨1点、温石2点		
桃山時代	土師器、陶器、輸入陶磁器、瓦類		土師器4点、施釉陶器4点、染付磁器1点、金箔軒丸瓦2点、金箔軒平瓦1点		
江戸時代	土師器、陶磁器、瓦類、銭貨		土師器3点、施釉陶器4点、塩壺1点、軒平瓦1点、丸瓦1点、銭貨8点		
計		749箱	317点(12箱)	23箱	714箱

下層、6区池盛土層から出土したが量は少ない。平安時代後期の遺物は土師器・陶器・瓦器・輸入陶磁器・瓦類がある。1-1区、1-2区池堆積土層、1-2区南東地区の溝・土壌・柱穴等から多量に出土した。

鎌倉時代から室町時代の遺物は、土師器・陶器・瓦器・輸入陶磁器・石製品・瓦類がある。1区池堆積土層、6区池堆積土層から出土した。量は少ない。室町時代後期（戦国時代）の遺物は土師器・陶器・輸入陶磁器・瓦類・銭貨があり、各調査区から出土している。

桃山時代の遺物は、土師器・陶器・輸入陶磁器・瓦類が出土している。1区の溝、6～9区各遺構から出土したが、量は少ない。

江戸時代前期の遺物は、土師器・陶磁器・瓦類がある。1-2区で少量が出土した。江戸時代中期から後期の遺物は、土師器・陶磁器・瓦類・銭貨がある。1・6～9区で多量に出土した。

注目すべき遺物には、1-1区から出土した三彩陶器・彩釉陶器がある。平安時代後期の池堆積土層から出土した。

(2) 土器類 (図版18、図32～36、付表5)

1-3区黄灰色砂層出土土器 (図32 - 1～26)

1-3区北部、黄灰色砂層から出土したものである。

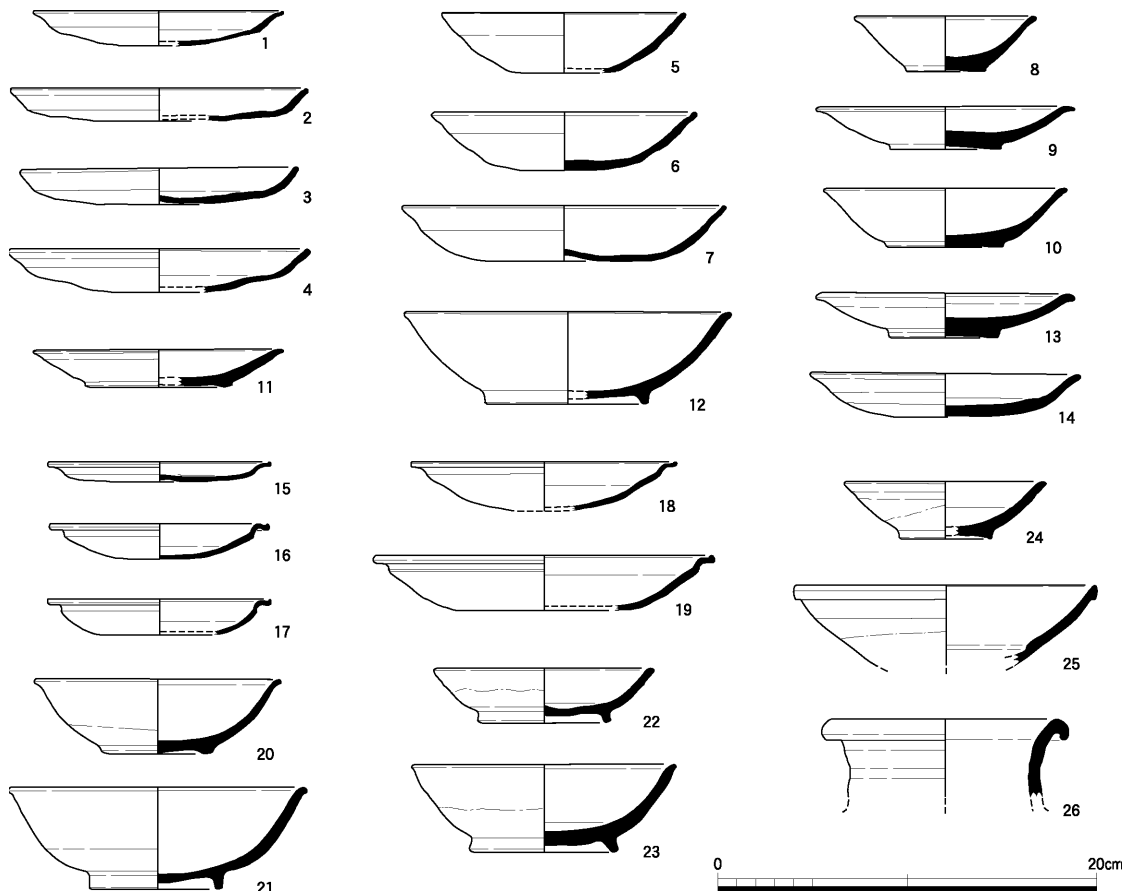


図32 1-3区黄灰色砂層出土土器類実測図 (1:4)

1～7は土師器で、1～4が皿、5～7が杯である。8～10は緑釉陶器で、9が皿、8・10が椀である。11・12は黒色土器で、11が皿、12が椀で、いずれも内面黒色のAタイプに属する。13・14は須恵器皿で、14は高台を持たない。平安時代前期新相、9世紀後半に属する。

15～19は土師器で、15～17が皿、18・19が杯、いずれも口縁部は内弯気味に立ち上がり、反転して端部をつまみ上げる。20・21は白色土器椀で、白生地、釉のかからないものである。22・23は灰釉陶器椀で、薄い灰釉が内面と外面中途までかかる。平安時代中期古相、10世紀前半に属する。

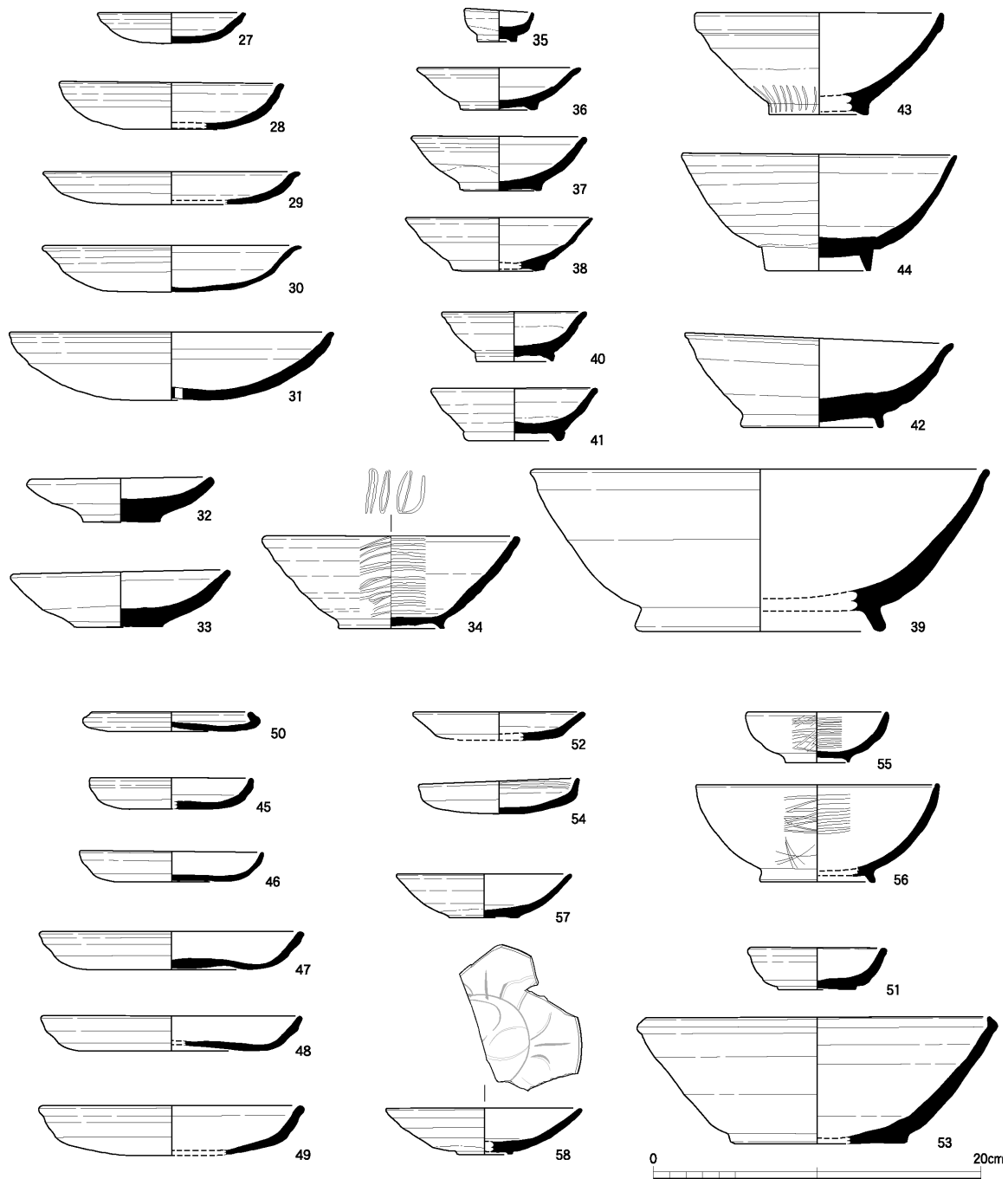


図33 1 - 2 区SD233出土土器類実測図 (1 : 4) 下層 : 27 ~ 44、上層 : 45 ~ 58

24～26は輸入陶磁器の白磁で、24は皿である。25は椀で小さな玉縁を有する。26は壺で頸部は外反し、口縁部は下方に垂れ下がる。平安時代後期に属する。

1 - 2 区SD233出土土器 (図33 - 27 ~ 58)

1 - 2 区SD233から出土したもので、27～44が下層、45～58が上層出土遺物である。

27～31は土師器皿、口縁端部は外反して広がる。32・33は白色土器皿で、高台に糸切り痕が残る。34は瓦器椀、内面底部に縦長の螺旋状暗文が施される。35～38、43・44は輸入陶磁器の白磁で35は小椀、36～38・43・44は椀で、43は口縁部に幅広の玉縁を有し、底部から高台外面にかけて鐫状の押圧文を巡らせる。39は灰釉陶器鉢で、高台は貼り付けで、大きく外方に踏ん張る。40～42は灰釉陶器椀で、口縁部は緩やかに外反する。高台はいずれも貼り付けである。平安時代中期新相、11世紀前半に位置付けられる。

45～50は土師器皿で、口縁部は斜め上方に立ち上がり、端部は立ち上がらない。50は口縁端部を内側に折り曲げる。51・53は須恵器で、51が杯、53は鉢で口縁端部は外方に肥厚し、端面は内傾する。52・54～56は瓦器で、52・54が皿、55・56は椀で内面を密に磨く。外面はやや疎らである。57・58は輸入陶磁器の白磁皿で、58は内面に陰刻花文を施し、透明釉をかける。平安時代後期新相、12世紀前半に属する。

1 - 2 区SD217出土土器 (図34 - 59 ~ 66)

59～66は土師器皿で、59は口縁部を内側に折り曲げる。60は底部から口縁部にかけて内弯しながら立ち上がり、口縁部は大きく屈曲して端部をつまみ上げる。口径10cm前後の小型の皿である。その他の皿はいずれも口縁下部は斜め外方に広がり、端部をわずかにつまみ上げる。平安時代後期新相、11世紀後半に属する。

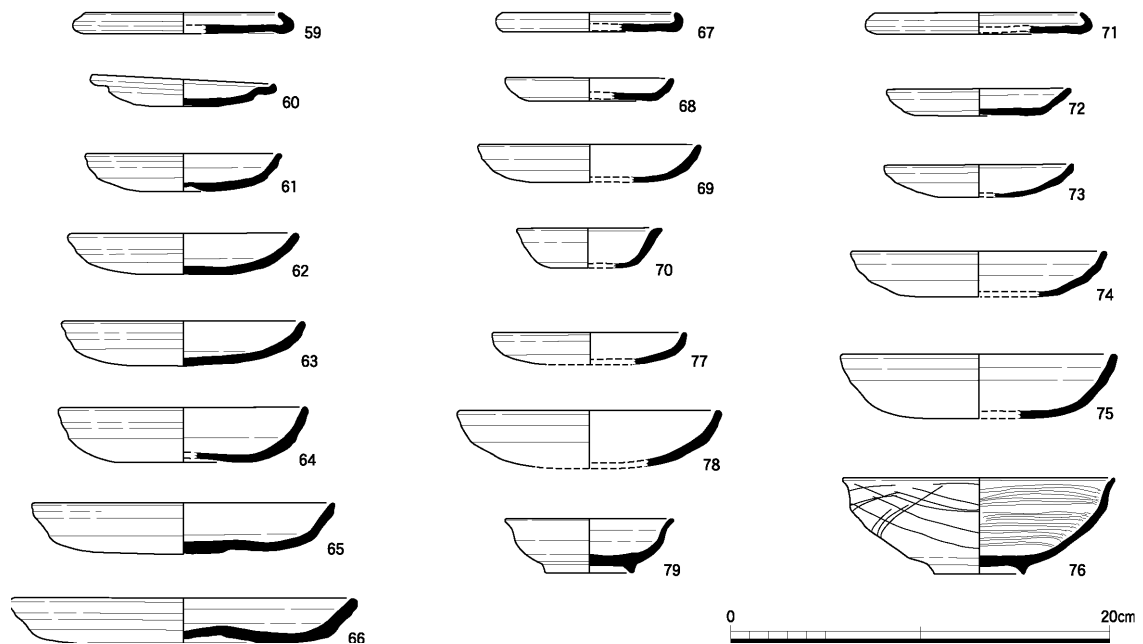


図34 1 - 2 区SD217・SE226・SD83・SE227出土土器類実測図 (1 : 4)

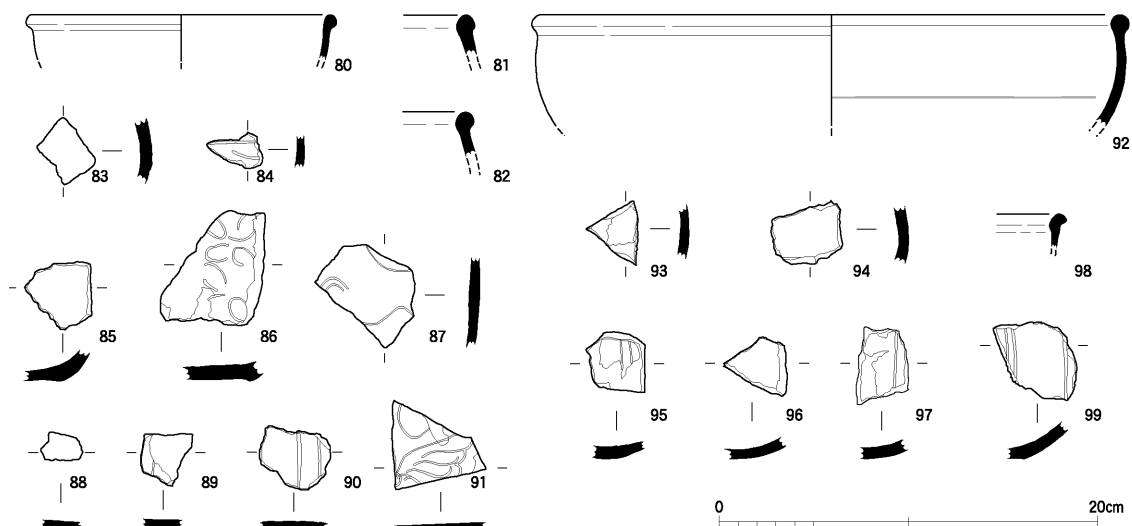


図35 1区出土彩釉陶器実測図(1:4)

1-2区SE226出土土器(図34-67~70)

67~69が土師器皿、70が瓦器皿である。67は口縁部を内方に折り曲げる。68・69は口縁下部は斜め上方に立ち上がり、端部をゆるくつまみ上げる。70の口縁端部はやや肥厚して外方に開く。平安時代後期新相、11世紀後半に属する。

1-2区SD83出土土器(図34-71~76)

71~75が土師器皿、76が瓦器碗である。71は口縁部が内方に折れ曲がる。72~75は口縁下部が斜め上方に立ち上がり端部をややつまみ上げる。76は内面見込みを併行に磨く。外面は疎らな襷状のヘラ磨きを施す。平安時代後期新相、11世紀後半に属する。

1-2区SE227出土土器(図34-77~79)

77・78が土師器皿で、口縁が斜め上方に立ち上がり、端部はつまみ上げられる。79は須恵器小碗で、体部は内弯して立ち上がり、口縁で外反する。平安時代後期新相、11世紀後半に属するが、SD217、SE226、SD83、SE227の順にわずかに新しい様相を示している。

1区出土彩釉陶器(図35-80~99)

80~91が1-1区、92~97が1-2区、98・99が1-4区の灰色粘土上層から出土した輸入陶磁器、彩釉陶器盤の細片で、81・82・92が大型盤の口縁部、80・98が小型盤の口縁部である。83・84・87・93・94が体部片、85・86・88~91、95~97・99が底部片である。底部は平坦で、底部から体部の境にわずかな稜が付き擬高台状を呈するが、明瞭な高台を持つものは出土片中には見当たらない。体部は短く内弯して口縁部に繋がり、口縁部は内外に肥厚する玉縁状を呈し、端部は丸く納めている。内外に濃い緑色の釉が懸けられ、底部内面には印刻による花文を彫り、黄色釉、茶色釉で彩色される。底部外面は露胎のままで、胎土は褐色で粗く、砂粒を多く含む。類例の盤は平安京左京八条三坊七町の調査¹⁾、右京六条一坊五町の調査²⁾で出土している。平安時代後期から鎌倉時代の出土遺物と共伴出土する。

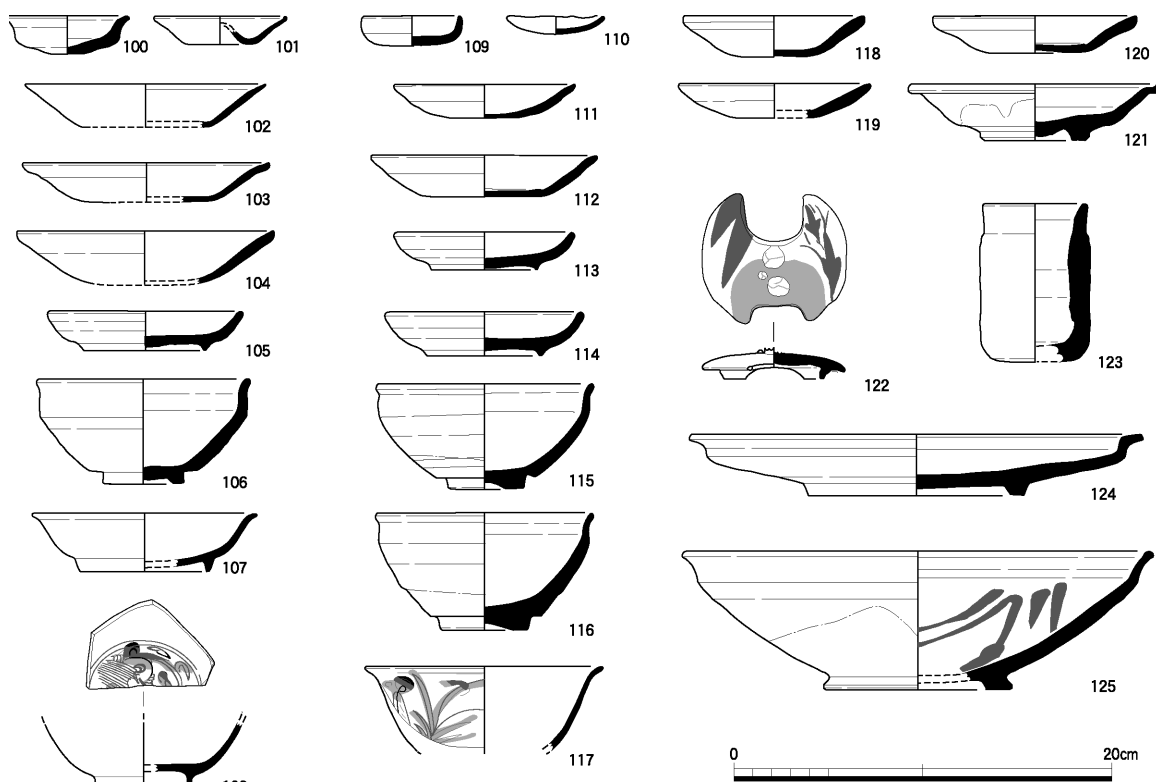


図36 室町時代から江戸時代の土器類実測図（1：4）

1 - 1 区SD110出土土器（図36 - 100～108）

100～104が土師器皿、105が陶器皿、106が陶器椀でいわゆる天目形の椀、107・108が輸入陶磁器で107が白磁皿、108が染付磁器椀である。100は器壁厚く、口縁部は外反する。101は底部が内側に膨らむヘソ皿で、口縁端部を上方につまみ上げる。102～104は底部から斜め上方に緩やかに立ち上がり、口縁上部でやや外反、端部を上方につまみ上げる。105は瀬戸・美濃産皿で、断面三角形の低い高台が廻る。全体にやや黄ばんだ灰釉がかかる。106は底部から体部外面はロクロによる鋭角的のケズリがみられ、口縁は垂直に立ち上がり、端部がやや外反する。内面から体部上半に黒褐色の分厚い釉が掛かる。107は断面逆台形の高台を持ち、体部は内弯して立ち上がり、口縁部は斜め外方に広がり、端部は丸くおさめる。内外に白化粧して透明油を掛ける。108は器壁薄く、細く高い高台が付き、体部は内弯して立ち上がる。内面底部には青色釉で花卉文を染め付ける。いわゆる明染付の椀である。

1 - 2 区SD153出土土器（図36 - 109～117）

109～112は土師器皿で、109は底部から急角度で上方に折り曲げられ、口縁端部を上方につまみ上げる。110は底部から緩く内弯して口縁部に至り、端部をつまみ上げる。111・112は底部から内弯気味に斜め上方に伸び、口縁下半で緩く外反、端部はわずかにつまみ上げる。112には内面底部と体部の境目に不明瞭な凹線が認められる。113・114は施釉陶器皿で、いずれも断面三角形の低い高台が付き、底部から短く内弯して口縁部に至り、端部は丸くおさめる。115・116は施釉陶器椀で、いずれも幅広の輪高台を削りだし、体部は丸く内弯して立ち上がり、口縁部は器壁を

減じて短く外反、端部は丸くおさめる。黒褐色の鉄釉は内面と外面体部上半に掛かる。117は輸入染付磁器椀で、器壁薄く、体部は内弯しつつ上方に伸び、口縁部は短く外反、端部は丸くおさめる。桃山時代、16世紀後半に属する。

1 - 2 区SE 8 出土土器 (図36 - 118 ~ 125)

118 ~ 120は土師器皿で、いずれも底部から外反気味に立ち上がり、口縁部をやや肥厚させ、端部を上方に軽くつまみ上げる。119・120は内面底部と体部の境目に凹線が認められる。121は陶器皿で、底部に断面5角形の高台を削りだし、内面をやや窪ませた底部は斜め上方に広がり、体部は直線的に口縁部と接続され、口縁部は横方向に短く伸びて、端部は上方につまみ上げられる。122は施釉陶器灯明具の蓋で、灯明の芯紐を通すため、両端に切れ込みを入れる。上面に花卉文を染め付けるが、小さいアーチ状のツマミを欠く。123は土製品壺で、いわゆる塩壺である。底部は平坦で、体部は直線的に上方に伸び、口縁部内面は器壁を減じて短く終り、端部は丸くおさめる。型造りである。124は施釉陶器皿で断面逆台形の高台が付き、底部・体部は緩い傾斜で横方向に広がり、口縁部は上方と横方向に屈曲し、口縁端部は丸くおさめる。125は施釉陶器鉢で、外方に踏ん張る短く幅広の高台が付き、体部は緩く内弯しつつ斜め上方に広がり、口縁部は短く外反し、端部はわずかに肥厚して丸くおさめる。内面には花卉文を染め付け、釉は内面と外面上半に掛ける。江戸時代前期、17世紀前半に属している。

(3) 瓦 類 (図版19、図37 ~ 40、附表6)

1 - 1 区出土瓦類 (図37 - 126 ~ 150)

126は単弁十二葉蓮華文軒丸瓦で、中房の蓮子は1 + 5、外区に珠文16個を配する。搬入瓦で平城宮6133-A型式、平安宮内裏内での出土が多い。127は複弁八葉蓮華文軒丸瓦で、蓮子の数は不明、外区に珠文を密に配する。間弁を配さず、内・外区の境に1条の界線が巡る。128は小振りの蓮華文軒丸瓦で、界線と花卉間に珠文を配する。129は単弁八葉蓮華文軒丸瓦で、中房の蓮子は1 + 4、輪郭線を持つ花卉先端が尖り、子葉は盛り上がる。間弁は撥形を呈し、1条の界線の外側に間弁に対応した珠文を配する。130は単弁八葉蓮華文軒丸瓦で、蓮子は1 + 8、蓮弁は互いに接し、子葉は大きい。平安時代中期。

131は均整唐草文軒平瓦で、3転する唐草の主葉と支葉は分離する。外区に小さい珠文を密に配する。平安時代後期。132は緑釉均整唐草文軒平瓦で、唐草は左右に2転半し、外区の珠文の間隔は広く疎らである。浅い緑釉を掛ける。幡枝瓦窯産。133は偏行唐草文軒平瓦で、唐草は左から右方向に偏行する。曲線顎、瓦当部成形は半折り曲げ。幡枝瓦窯産。134は均整唐草文軒平瓦で、左右に3反転する唐草は支葉が多く、主葉唐草の先端部は水滴状を呈する。平安時代前期。135は均整唐草文軒平瓦で、唐草は主葉・支葉ともに付け根を離して3反転し、支葉を多く配する。平安時代中期。136は唐草文軒平瓦で、分離した唐草が反転し、先端は二股に分かれる。内区は狭く、広い外区に珠文を配する。137は均整唐草文軒平瓦で、唐草は各单位が離れ、主葉は強く巻き込む。外区に珠文を配する。芝本瓦窯産。138は水波文軒平瓦で、独立して円弧を描く凸線を交互に配し

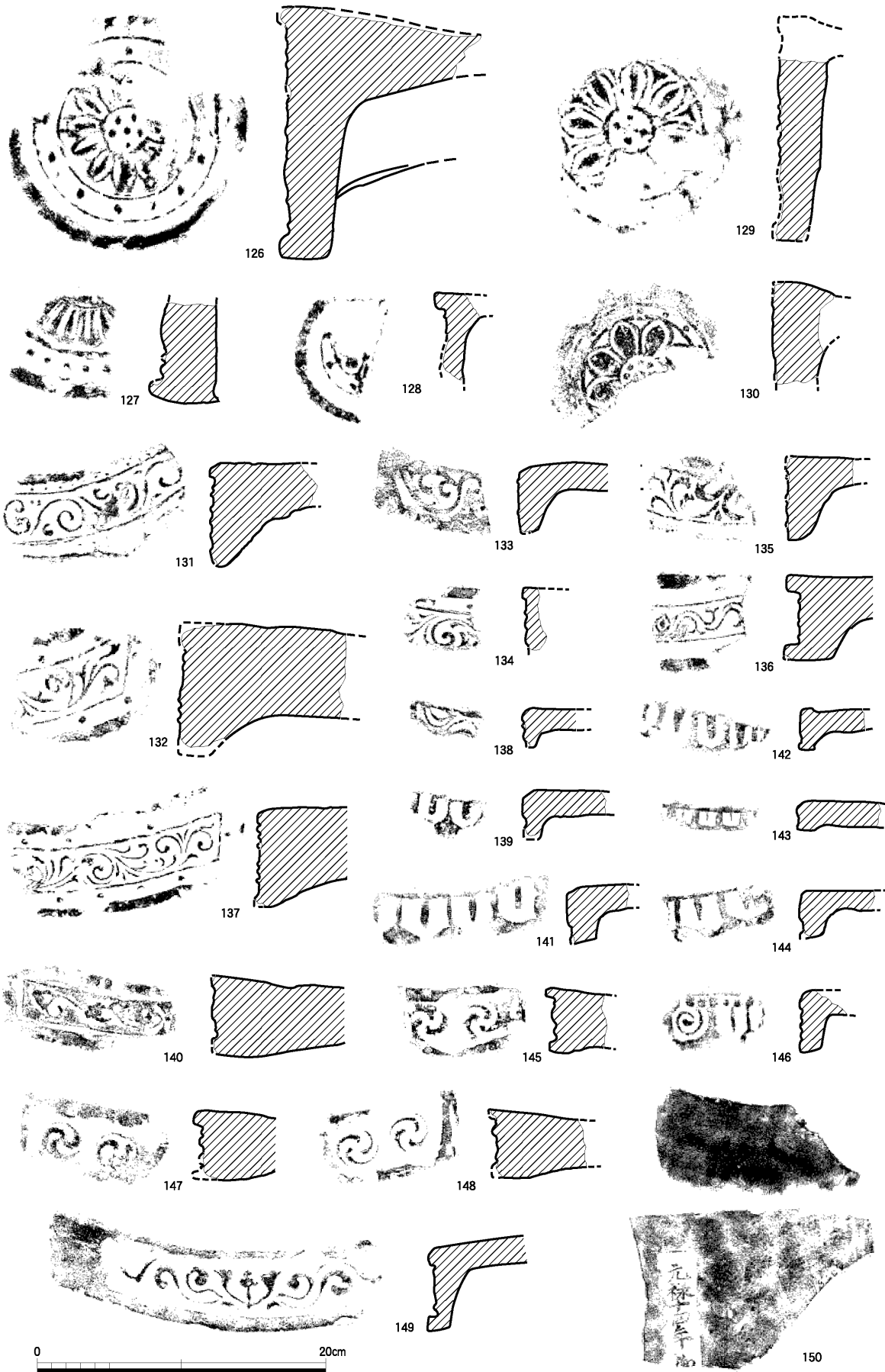


图37 1-1区出土瓦類拓影·实测图(1:4)

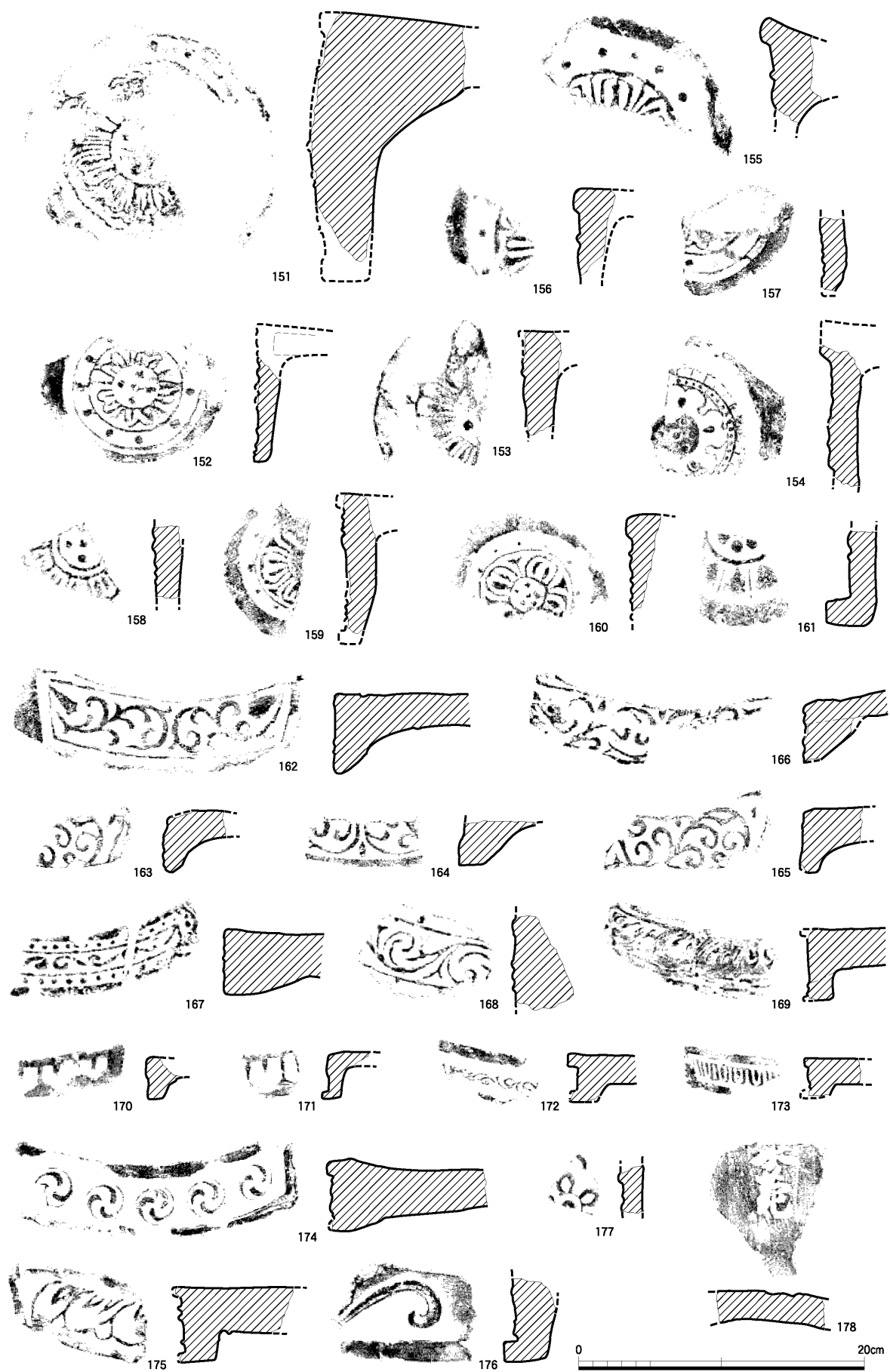


图38 1-2区出土瓦類拓影·實測圖(1:4)

て水波を表わす。瓦当部は折り曲げる。平安時代後期。139は剣頭文軒平瓦で、鎬はやや太い。瓦当上部から平瓦凹面にかけてヘラ記号。140は唐草文軒平瓦で、主葉は緩く反転するが、支葉は急角度で折れ込む。讃岐産、平安時代後期。141～144は剣頭文軒平瓦で、141・142・144の剣は大きく、互いに離れる。143は剣先が丸く、小さな剣頭を配する。145・147・148は連巴文軒平瓦で、小さな巴文を横一列に配し、巴はいずれも右巻きであるが、145・148は巴頭部が離れ、147は頭部を接している。146は剣巴文軒平瓦で、剣頭文の中央に右廻りの渦巻き状に巻く一巴を配する。尾部は長い。149は唐草文軒平瓦で、中心飾りから独立した唐草文軒平瓦が左右に反転し、唐草は先端が太くなる。

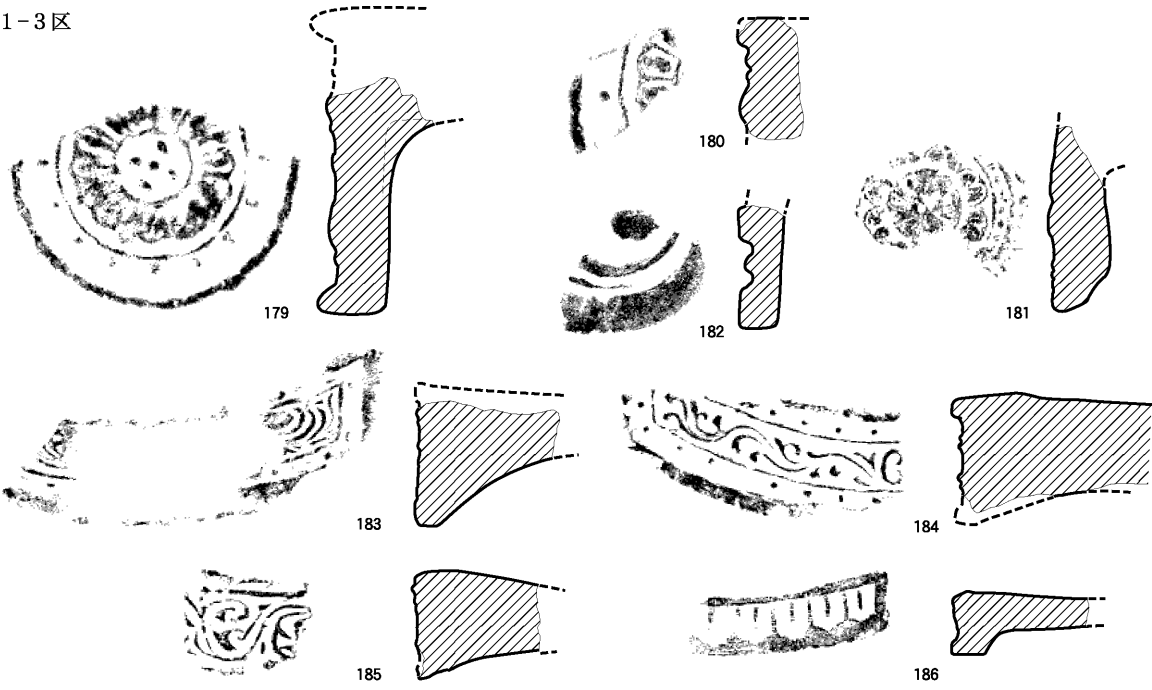
150は丸瓦で、凹面に陽刻による刻印「元禄十四年 御」が認められる。元禄14年は、西暦で1701年にあたる。瓦の製造年を刻したものとみられよう。

1 - 2 区出土瓦類 (図38 - 151 ~ 178)

151は複弁八葉蓮華文軒丸瓦で、中房は盛り上がり、中心蓮子に圈線が巡るもので、間弁は小さな撥形を呈する。西賀茂瓦窯産。152は複弁五葉蓮華文軒丸瓦で、中房の蓮子は1 + 4。蓮弁・子葉・間弁は凸線で表わす。山城産、平安時代後期。153は単弁蓮華文軒丸瓦で、二十二葉とみられる。単弁の輪郭線が連続し内外区を分ける。154は単弁五葉蓮華文軒丸瓦で、中房には1 + 6の蓮子を配し、中央で切れ込む蓮弁の中央に水滴形の子葉を配し、その外側に界線を巡らせて珠文を密に配する。外区には珠文帯の外側に弁状の文様を密に描く。155は単弁蓮華文軒丸瓦で、蓮弁・子葉・間弁を凸線で表現し、間弁と内外区界線は接する。外区には大粒の珠文を配する。156は複弁蓮華文軒丸瓦で、簡略化された蓮弁を凸線で表現している。外区には珠文を配する。157は複弁蓮華文軒丸瓦で、内外区界線とさらに1条の圈線を凸線で描き、その間に珠文を配する。158は複弁蓮華文軒丸瓦で、中房に圈線を巡らし、内側の圈線内に1 + 4の蓮子を配する。蓮弁は互いに接する凸線で描き、2個の幅広の子葉を配する。159は小振りの複弁蓮華文軒丸瓦で、蓮弁は凸線、間弁は撥形を呈する。瓦当裏面には布目の痕跡。160は小振りの複弁四葉蓮華文軒丸瓦で、中房に1 + 5の蓮子を配し、蓮弁は凸線、子葉はやや幅広に表現、間弁は撥形を呈し、内外区界線を巡らし、小粒の珠文を配する。161は単弁蓮華文軒丸瓦で、中房に大粒の蓮子を配し、中房圏線と周縁に接しない蓮弁を細い凸線で描く。

162～166は唐草文軒平瓦で、162は両側から中心に向けて唐草が転回し、主葉は連続して大きく反転する。支葉端面は太く強く巻く。平瓦凸面の瓦当裏面近くにヘラ記号。164・166は162と文様の転回は同様であるが、中心上下に小葉が独立したように配される。小野瓦窯でも同様のものが出土している。平安時代後期。163・165は同范で、左から右に反転する唐草文を配する。167は均整唐草文軒平瓦で、内区は幅狭く、唐草は両側から便化した支葉が緩く展開する。外区には珠文が密に配される。168は緑釉均整唐草文軒平瓦で、唐草は巻き込みの強い支葉を多く配し、外区珠文は間隔が広い。瓦当面に緑釉を掛ける。幡枝瓦窯産、平安時代前期。169・175は複弁蓮華文軒平瓦で、複弁の蓮弁と子葉を凸線で表わし、互いに接して両側を開くように配する。段頸で、平安時代後期。170・171は剣頭文軒平瓦で、大きく尖った剣頭を持つ。172は唐草文軒平瓦

1-3区



1-4区

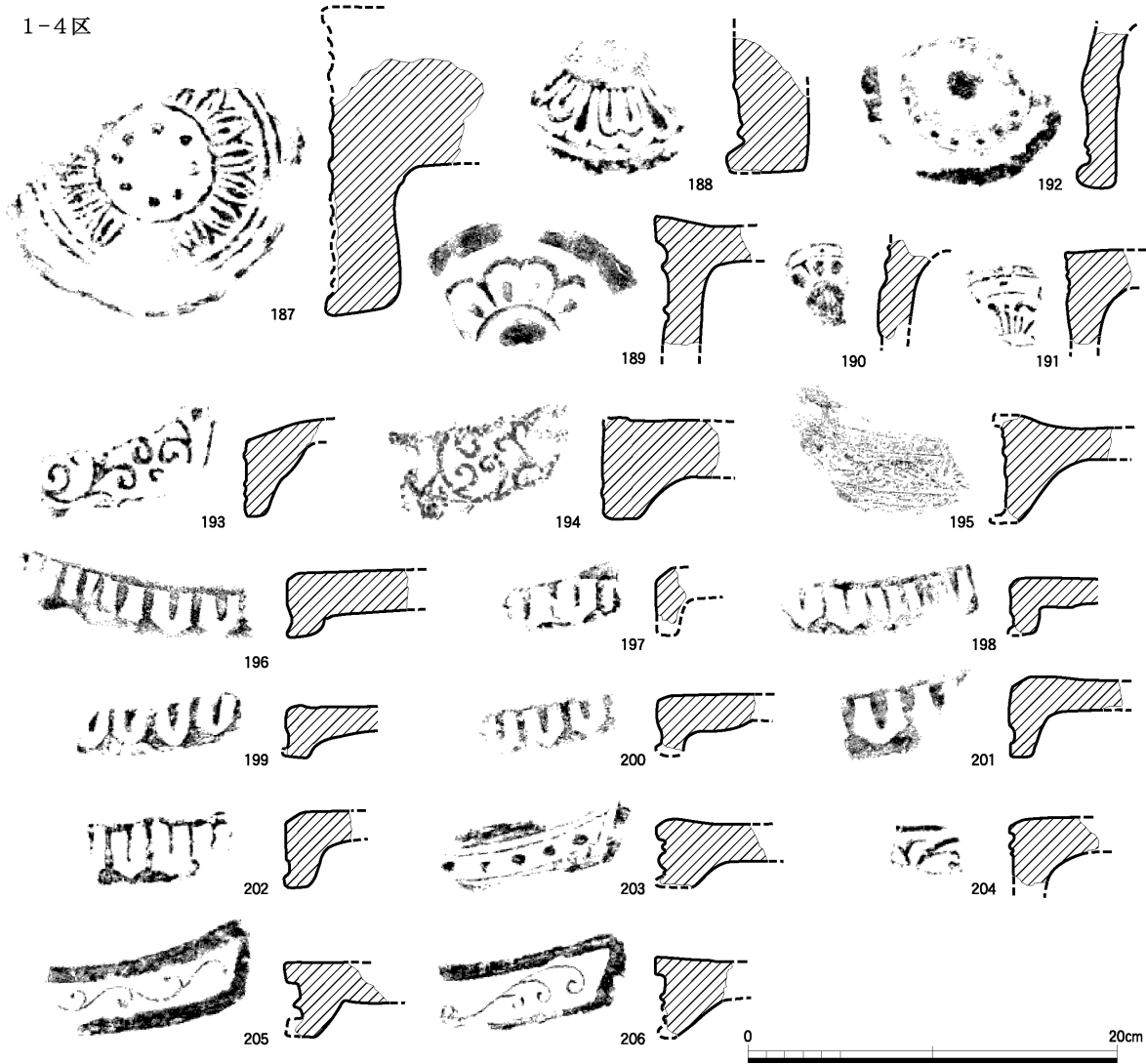


图39 1-3·1-4区出土瓦類拓影·実測図(1:4)

で、やや退化した凸線による唐草を緩く展開させ、支葉の巻きは強い。173は剣頭文軒平瓦で、細い凸線で剣と鎬を描く。鎌倉時代。174は巴文軒平瓦で尾部、頭部共に接しない右回転する三巴を5個配する。

176は金箔唐草文軒平瓦で、2転する盛り上がった唐草を描く。瓦当面に金箔を押す。177は金箔単弁五葉蓮華文軒丸瓦で、蓮弁は木の葉状、金箔を押す。いずれも桃山時代。

178は「神泉苑」銘平瓦で、平瓦凸面に陰刻による刻印が確認される。

1 - 3区出土瓦類 (図39 - 179 ~ 186)

179は単弁蓮華文軒丸瓦で、中房に1 + 4の蓮子を配する。蓮弁は先端に稜を持ち、幅広の子葉が付く。内外区界線と蓮弁は離間し、広い外区の内側寄りに珠文を配する。平安時代前期。180は単弁蓮華文軒丸瓦で、蓮弁は幅広で反りが強い。中房の蓮子数は不明である。181は複弁八葉蓮華文軒丸瓦で、大きく盛り上がった中房には蓮子を配する。小さな肉厚の子葉を囲む輪郭線があり、内側の細い界線と外側の太い圏線に挟まれて密に珠文を配する。外側には唐草文を配している。平安時代中期。

182は金箔三巴文軒丸瓦で、巴は右巻きで、尾部は長く、互いに接しない。瓦当面に金箔を押す。桃山時代。

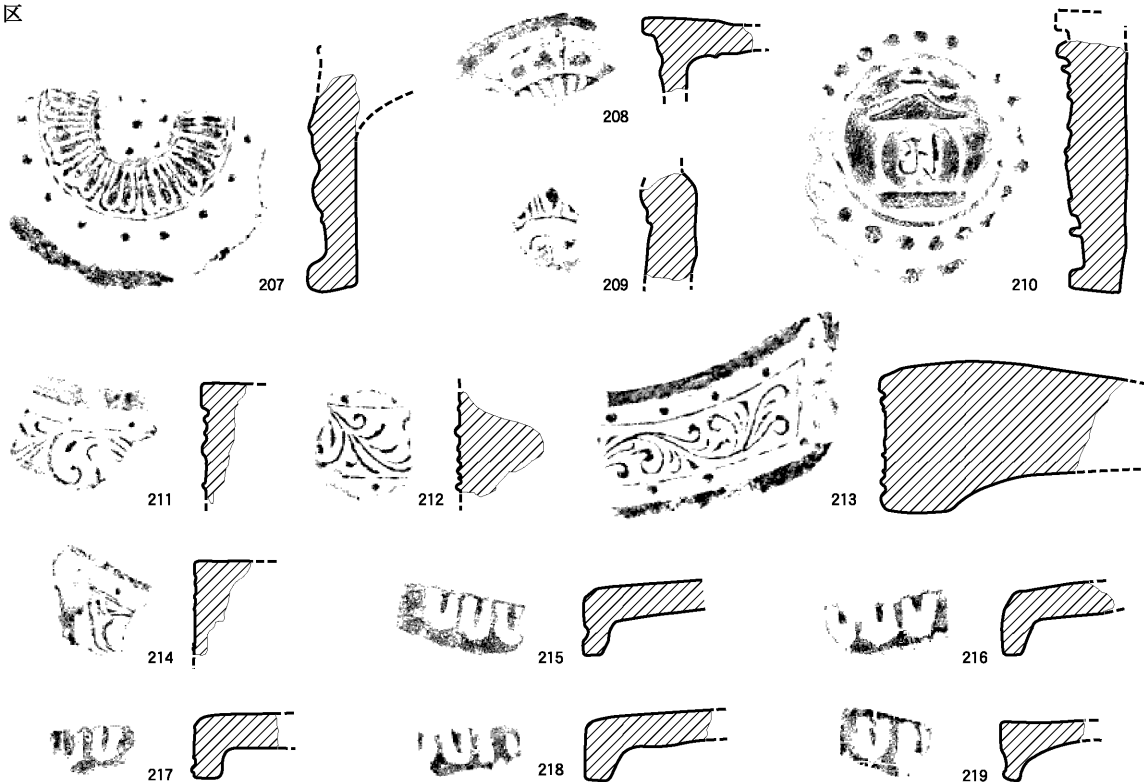
183は唐草文軒平瓦で、唐草の支葉多く、外区珠文は小粒である。胎土は砂粒多く、焼成は堅致、平安時代中期。184は均整唐草文軒平瓦で、対向C字形の中心飾りを有し、左右に緩く反転する唐草を持ち、支葉先端は膨らむ。外区珠文は小粒でやや多い。平安時代前期。185は唐草文軒平瓦で、唐草を大きく回転させるが、ややいびつで角張る。平瓦凸面には粗い布目痕が残る。平安時代中期か。186は剣頭文軒平瓦で、剣先端は尖り、鎬はやや細い。

1 - 4区出土瓦類 (図39 - 187 ~ 206)

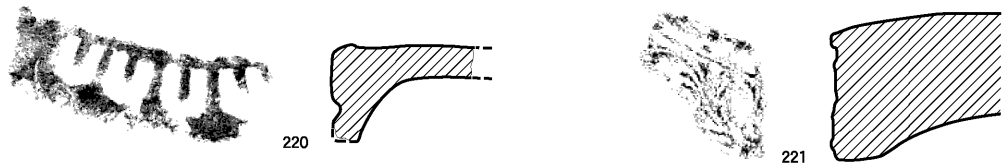
187は複弁八葉蓮華文軒丸瓦で、中房に蓮子8個を配し、中央の蓮子を欠く。花弁はY字形の間弁で画され、内外区に二重の界線が巡り、周縁内側に三角形の鋸歯文を配する。平城宮6225-A型式。188は複弁蓮華文軒丸瓦で、大きな中房を持ち、蓮弁と子葉は細い凸線で描かれ、間弁は先端で太くなる。界線は中央、蓮弁と間弁間で窪む。189は複弁六葉蓮華文軒丸瓦で、中房は平らで圏線を有し、複弁は六葉、互いに接して子葉を持つ。播磨産、平安時代後期。190は小振りの複弁蓮華文軒丸瓦で、中房が壇状に盛り上がる。間弁は互いに連なり、2個の子葉が描かれ、外区に小粒の珠文が配される。191は複弁蓮華文軒丸瓦で、蓮弁と間弁を凸線で描き、外区に珠文を配する。192は蓮華文軒丸瓦で、中房は突出するが、文様は磨滅が激しく、蓮弁の数は不明である。外区に珠文を配する。

193・194は偏行唐草文軒平瓦で、193は左から右に4反転する唐草を配し、支葉は三巴風に作る。194は唐草文軒平瓦は右から左方に大きく展開し、支葉を三巴文風に表現される。195は唐草文軒平瓦で、ゆったりした太い唐草文で、周縁はヘラ削りされる。196~202は剣頭文軒平瓦で、196~198・200は剣先端は尖り、199の剣頭はやや丸くなる。198は平瓦凹面にヘラ記号。201・202の剣頭は大きく、201の鎬は太く、202は細い。いずれも平安時代後期。203は連珠文軒平瓦で、

6区



7区



9区

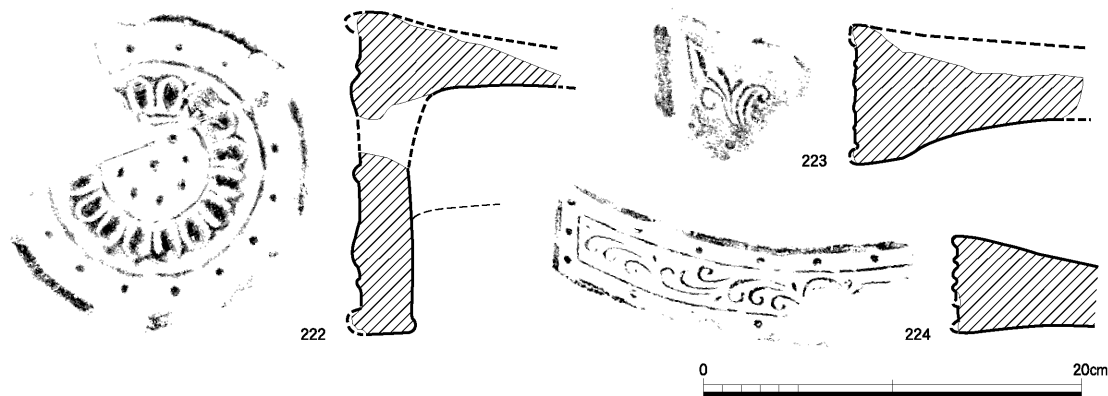


図40 6・7・9区出土瓦類拓影・実測図(1:4)

内区に大粒の珠文を並べて配置する。内外区に細い界線を描く。204~206は唐草文軒平瓦で、204は太めの唐草文を配する。205は細い唐草を緩く反転させ、支葉先端を水滴状に膨らます。周縁は広く平坦である。206は長く伸びた細い主茎の先端は強く巻き、3本の蕨手状に分枝する。いずれも平安時代後期。

6区出土瓦類(図40-207~219)

207は複弁十二葉蓮華文軒丸瓦で、中房に1+6の蓮子を配する。蓮弁は長く紡錘形の子葉2個

を配し、反りが強い。内外区に細い界線を巡らし、広い外区の内側寄りに珠文を配する。珠文の間に竹管文の印を押捺している。208は複弁蓮華文軒丸瓦で、中房の外周には雄蕊帯を有し、子葉は円形を呈する。209は蓮華文軒丸瓦で、広い中房に蓮子が配され、凸線による蓮弁を描き、子葉は幅広い。210は五輪塔文軒丸瓦で、内区は五輪塔文で水輪に陽刻種字を配する。内外区に太い界線を描き、外区に大粒の珠文を密に配する。

211～214は均整唐草文軒平瓦で、中心飾りは対向C字形、唐草は左右に2転半し、支葉の先端は水滴状にやや膨らむ。外区には間隔広めに珠文を配する。幡枝瓦窯産、平安時代前期。215～219は剣頭文軒平瓦で、小振りの剣頭文を配し、218のみ剣頭先端は丸い。216には平瓦凹面にヘラ記号。いずれも平安時代後期。

7区出土瓦類（図40 - 220・221）

220は剣頭文軒平瓦で、大振りの剣頭をそれぞれ離間して配する。平瓦凸面にヘラ記号。平安時代後期。221は均整唐草文軒平瓦で、細かく枝分かれする支葉を有する。

9区出土瓦類（図40 - 222～224）

222は単弁十六葉蓮華文軒丸瓦で、大きな中房に1 + 8の蓮子を配し、蓮弁は短く互いに接し、先端が丸くなる。子葉は幅広く、楕円形状を呈する。内外区に蓮弁と離して界線を描き、外区にゆったりとした間隔で珠文を配する。平安時代前期。

223は均整唐草文軒平瓦で、唐草を繊細な凸線で描き、支葉の先端はわずかに水滴状に膨らむ。224は均整唐草文軒平瓦で、左右対称に3本の蕨手状の唐草を3単位配する。各単位それぞれに間枝を配し、珠文は間隔を広く配する。中心飾りは欠けているが、「松」の裏字と思われる。

（4）銭貨（図41、付表7）

各調査区から出土した銭貨で、225～227が唐銭、228～254が宋（北宋）銭、255が明銭、256～263が国産銭貨である。唐銭は開元通寶があり、製作年代は7世紀から9世紀代までのものが出土している。宋銭は、宋通元寶、太平通寶、咸平元寶、景德元寶、天禧通寶、皇宋通寶、嘉祐通寶、治平元寶、熙寧元寶、元豊通寶、元祐通寶、紹聖元寶、政和通寶がある。明銭では永楽通寶、国産銭貨には寛永通寶が出土した。

225～227が開元通寶、228が宋通元寶、229が太平通寶、230が咸平元寶、231・232が景德元寶、233が天禧通寶、234が皇宋通寶、235が嘉祐通寶、236が治平元寶、237～241が熙寧元寶、242～246が元豊通寶、247～251元祐通寶、252・253が紹聖元寶、254が政和通寶、255が永楽通寶、256～263が寛永通寶である。このうち政和通寶までが12世紀初頭までに輸入され、永楽通寶は15世紀初頭以降に輸入されたものである。

1 - 1区から225・242・243・247・250・252・256～258、1 - 2区から226・227・229・231・232・234～237・239・244～246・248・249・254、1 - 3区から238・240・241・251・263、1 - 4区から228・230・255、6区から233・262、8区から260・261、9区から253・259が出土した。

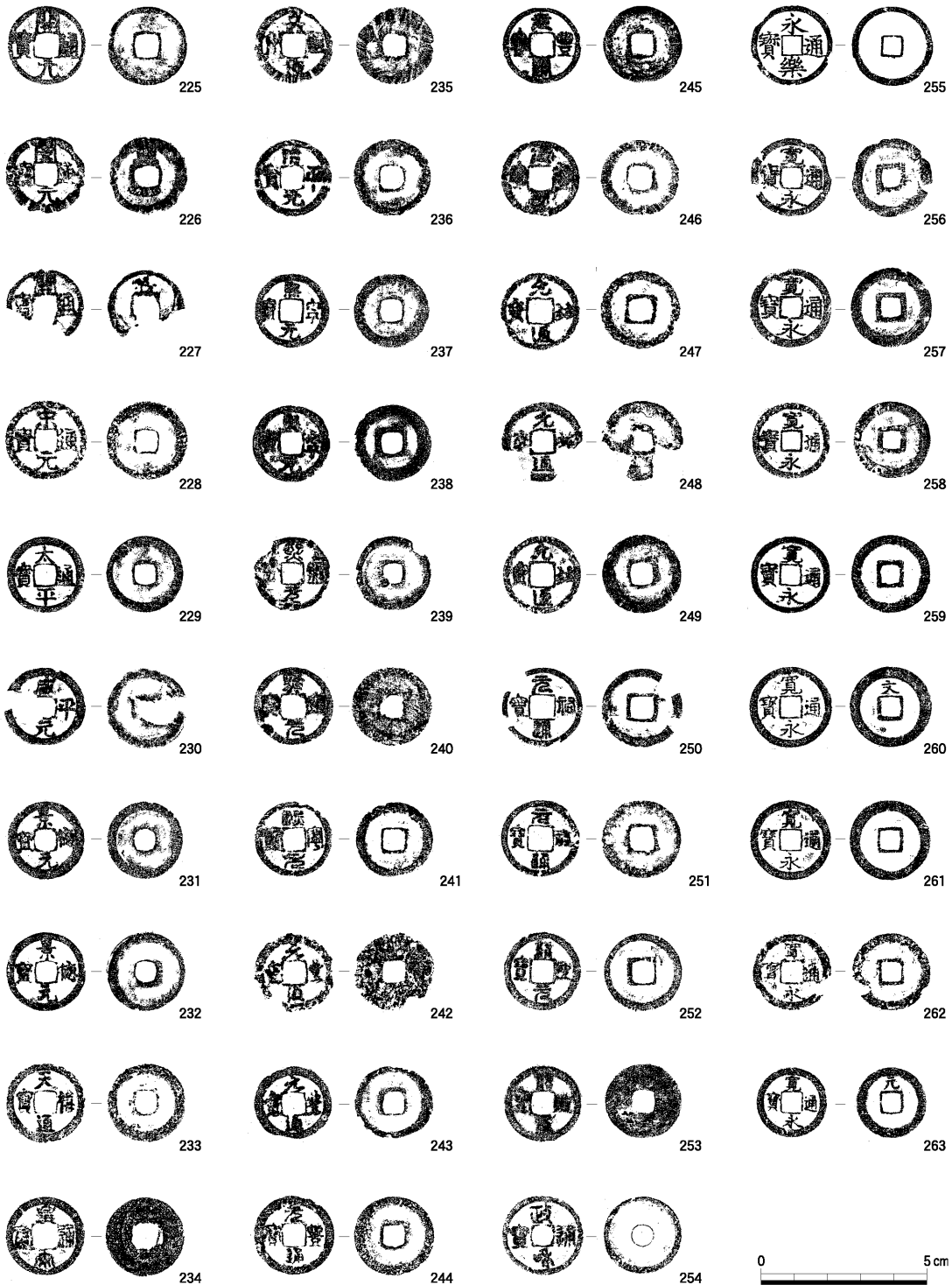


図41 錢貨拓影(1:2)

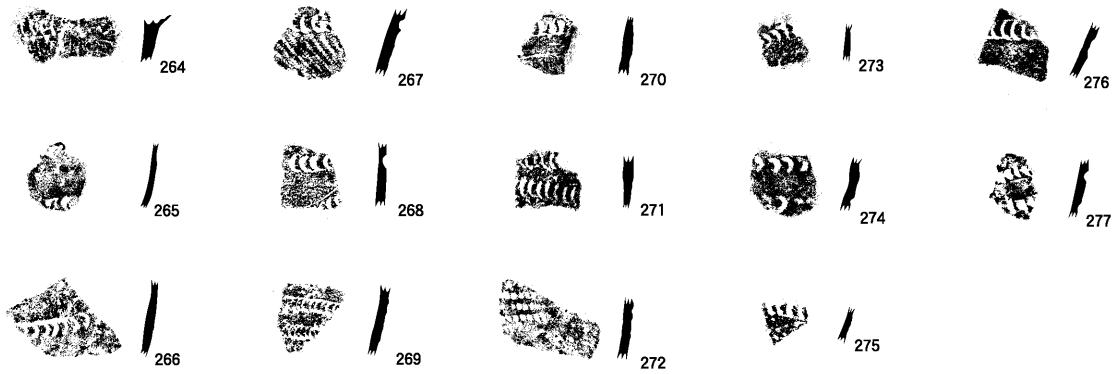
(5) 縄文土器・その他の遺物(図42~44、付表8・9)

縄文土器(図42 - 264 ~ 295)

264 ~ 277が1 - 2 拡張区、278 ~ 295が洲浜周辺で出土した縄文土器である。

264 ~ 266が前期北白川下層 a式に属するものとみられ、265がC字爪形文、266が逆C字爪形文を施す。267 ~ 271は前期北白川下層 c式に属するとみられ、267・268・271が連続C字爪形

拡張区出土



洲浜周辺出土

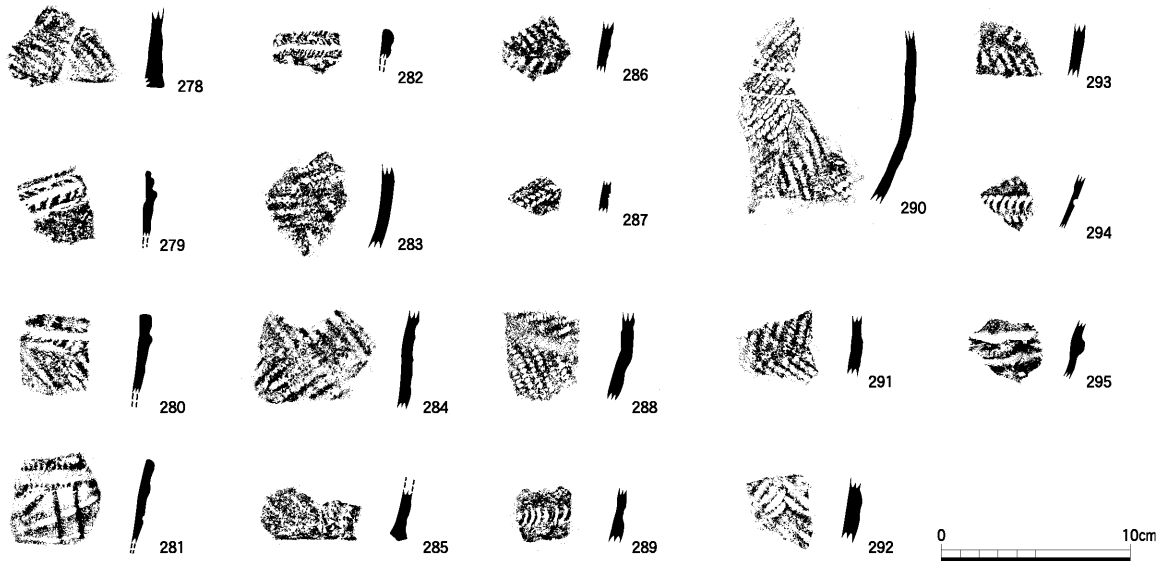


図42 縄文土器拓影・実測図(1:4)

文、270が逆C字爪形文を持つ。269が押し引きC字爪形文、270は逆C字爪形文、271がC字爪形文を施す。272~278も前期北白川下層式に属し、272は縄文地、273・274は逆C字爪形文、275・276はC字爪形文、277は逆D字爪形文が施される。

278は前期北白川下層a式に属し、羽状縄文で飾る。279~282は前期北白川下層式に属し、279・280は地縄文に凸帯を廻らせて爪で刻む。281は凸帯を廻らせ、爪刻み。282も凸帯を廻らせ、爪刻みを施す。283~294は前期北白川下層式に属し、283・284・286・288・291・292・293は羽状縄文が施される。287・289は逆C字爪形文、294はC字爪形文を施す。290は2種類の原体を使用して羽状縄文を施す。瀬戸内地方の影響が強い土器とみられる。295は凸帯を持つ晩期舟橋式に属する縄文土器で、凸帯は肩部の凸帯とみられる。

石鏃(図43-296~311)

296~307は1-2区洲浜周辺から出土した。296~301が平基無茎鏃、302~304が凹基無茎鏃、305が円基鏃、あるいは平基無茎鏃の粗製品ともみられる。306・307は凸基有茎鏃である。材質は296~303・305・306がサヌカイト製、304・307が赤色チャート製である。

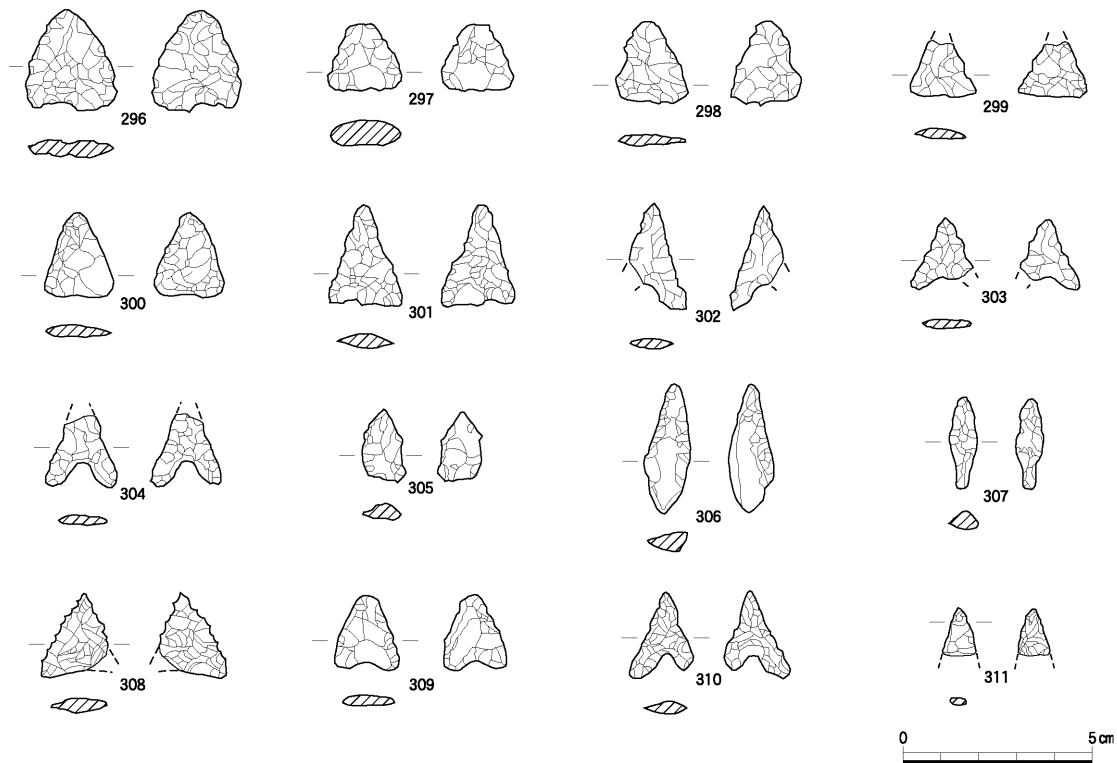


図43 石鏃実測図(1:2)

308～311は1-2拡張区を中心に出土した。308は平基無茎鏃、309・310が凹基無茎鏃、311は基部の大半を欠くが、先端の刃部形状から凹基無茎鏃とみられる。308・310が赤色チャート製、309・311がサヌカイト製。いずれも縄文時代前期に属している。

石斧(図44-312)

312は縄文時代の定角式磨製石斧で、頭部を欠く。表面の研磨は丁寧で、全体を極めて平滑に仕上げている。石材は珪灰石を含む変成岩とみられる。1-2区SD233出土。

土錘・陶錘(図44-313～315)

313は縄文時代に属する有溝土錘で、球形の土塊中央に幅2cm、深さ1cmの溝を巡らせている。胎土中に砂粒を多く含む。1-1区SK14出土。

314は陶錘で、断面円形で両サイドが窄まる陶製で、縦5cm、横3cm、中央に1cm小孔を穿つ。全体は青灰色を呈し、堅く須恵質に焼き締まる。315は土錘で、断面1cm前後の円形で、縦3.5cm、中央に0.3cmの小孔が穿たれる。314・315は共に1-2区洲浜周辺出土。平安時代に属する。

温石(図44-316・317)

316が縦10cm以上、横7cm、厚さ2cmを測り、中央に1cm前後の小孔を開け、陰刻による翼を展開した鳥らしき文様が描かれる。滑石製で、断面がカーブしており、石鍋などの2次転用とみられる。317は縦11cm、横9cm、厚さ最大2cmを測る。1cm未満の小孔を2ヶ所に穿つ。滑石製で、石鍋などの2次転用品である。いずれも室町時代後期に属したものとみられる。316は6区SK23下層、317は1-2区洲浜周辺出土。

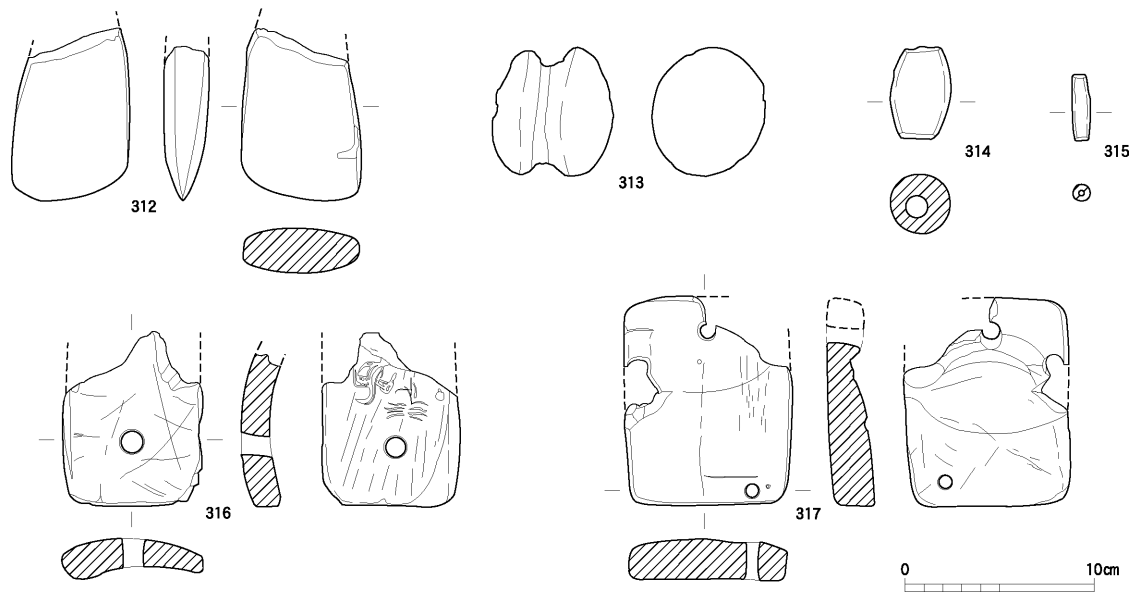


図44 その他の遺物実測図(1:4)

註

- 1) 鈴木廣司ほか『平安京左京八条三坊』京都市埋蔵文化財研究所調査報告第6冊 (財)京都市埋蔵文化財研究所 1982年
- 2) 梅川光隆ほか『平安京右京六条一坊 - 平安時代前期邸宅跡の調査 - 』京都市埋蔵文化財研究所調査報告第11冊 (財)京都市埋蔵文化財研究所 1992年

4.まとめ

(1) 各区の遺構について

1-1・1-2区で平安時代前期と中期から後期にかけての池庭を検出した。1-1区では池堆積土層上に砂と川原礫により、北東から南西方向に伸びる池盛土層を成形して複数の景石を配置している。1-2区では北西方向に傾斜する汀線を確認した。汀線は盛土を行い、礫を貼り付けたもので、平安時代後期に属する。前期・中期の汀線はやや南東に後退した地区に北東から南西方向に広がる洲浜ラインを確認した。この洲浜ラインの一部で東北東方向から流れ込む流路を確認し、この方向からも池庭に給水されたことが明確になった。また南東部陸地では平安時代後期の溝、焼土面、井戸、柱穴、土塙を確認した。1-3区では平安時代前期から後期の池堆積土層、池庭の前期から後期の北東岸とみられる汀線の一部を確認した。

6区でも平安時代中期から後期にかけての汀線と複数の景石を検出した。汀線は砂と川原礫によって盛土され、南東面する。肩口に景石を並べている。この池盛土層の北西部で、建物の雨落溝に係る東西方向の列石を検出した。7区では池陸部と南西に斜面を有した汀線の一部を確認している。

9区では南西面する汀線と景石の配置を確認した。昨年度調査で確認した汀線と景石の配置と一連のものとみられる。

8区は池陸部とみられる砂礫面を検出し、9区以北の陸部を確認した。

6～9区の調査対象であった寛永行幸時造営の御蔵遺構については、明確な遺構として確認していない。蔵北端付近の8区調査では、江戸時代中期・後期の番頭屋敷・番屋敷に関係した遺構群が多く検出され、行幸終了後の撤去・削平は急であったといえよう。

(2) 冷泉院の池庭について

一連の調査で、冷泉院池庭西半部の池の広がりがほぼ明らかになった。池は4町中央、9区東端付近を発し、やや西偏して6区北東端に至り南西方向に広がる。一方東岸は、7区南端をかすめて東伸、1-3区北東端から南西伸、1-2区北東付近に達して調査区を斜めに横切り南西伸する。この中途に、東北東からの流路が位置し、さらに南下して冷泉院中央南面築地に近接し、この付近で大きくカーブして池南岸に接続するものとみられる。また、池庭に配置されたほとんどの石材が、京都盆地北東部、高野川流域および比叡山山麓から採取されたものであり、火山活動による熱変成を受けた石材が多数に上る。

池庭は、各期に渡る改修痕跡が認められ、特に平安時代後期、11世紀後半には池南東部を埋め立て、池内に盛土、景石を据え直す大規模な改修を施している。池は鎌倉時代以降、室町時代まで泥土層の堆積が確認される。長期に渡って徐々に埋没した痕跡が認められる。

室町時代後期(戦国時代)に至って、池を含めた広範囲な整地を受けて居住環境が整えられ、暫時、柱穴、井戸、溝などの居住関連施設遺構の増加が確認される。この遺構群は全調査区で検出されるため、旧冷泉院敷地の大半が居住対象地に転化されたとみられる。

この後、慶長8年(1603)の徳川家康による二条城築城によって、冷泉院敷地の大半が城内範囲に取り込まれ、江戸時代前期の寛永行幸時の西方への大拡張と本丸の新造が行われる。中期・後期を経過した後、幕末に至って徳川慶喜による大政奉還の舞台になるなどの変遷を経て、明治時代を迎えている。

自然科学分析

平成12年度の試掘確認調査において、2区で確認した池庭の堆積土層と8掘3区で確認した堀の堆積土層から花粉と珪藻の種類と量的多寡などの分析を行い、当該時期の植生と環境の復元を試みた。分析は環境考古学研究会に委託、植生と古環境を復元して頂いた。その結果を報告する。

(1) 試料について

試料は二条城跡2区のSS6-3(試料A)、SS6-4(試料B)、SS6-5(試料C)、SS6-6(試料D)の4点と、8掘3区のSS12-9(試料E)の1点の計5点である。2区の試料は2区北側西壁下、景石間の各堆積土、8掘3区の試料は二条城創建期西面堀の堆積土である。

(2) 花粉分析

原理

種子植物やシダ植物等が生産する花粉・胞子は分解されにくく堆積物中に保存される。花粉は空中に飛散する風媒花植物と虫媒花植物等があり、虫媒花植物に対し風媒花植物は非常に多くの花粉を生産する。花粉は地表に落下後、一部土壤中に留まり、多くは雨水や河川で運搬され水域に堆積する。堆積物より抽出した花粉の種類構成や相対比率から、地層の対比を行ったり、植生や土地条件の古環境や古気候の推定を行う。普通、比較的広域に分布する水成堆積物を対象として、堆積盆単位などのやや広域な植生や環境と地域的な対比に用いられる。考古遺跡では堆積域の狭い遺構などの堆積物も扱い、局地的な植生や環境の復元にも用いられている。

方法

花粉粒の分離抽出は、基本的には中村(1973)を参考にして、試料に以下の物理化学処理を施して行った。

- 1) 5%水酸化カリウム溶液を加え15分間湯煎する。
- 2) 水洗した後、0.5mmの篩で礫などの大きな粒子を取り除き、沈澱法を用いて砂粒の除去を行う。
- 3) 25%フッ化水素酸溶液を加えて30分放置する。
- 4) 水洗した後、氷酢酸によって脱水し、アセトリシス処理(無水酢酸9:濃硫酸1のエルドマン氏液を加え1分間湯煎)を施す。
- 5) 再び氷酢酸を加えた後、水洗を行う。
- 6) 沈渣に石炭酸フクシンを加えて染色を行い、グリセリンゼリーで封入しプレパラートを作製する。

以上の物理・化学の各処理間の水洗は、遠心分離(1500rpm、2分間)の後、上澄みを捨てるという操作を3回繰り返して行った。

検鏡はプレパラート作製後直ちに、生物顕微鏡によって300～1000倍で行った。花粉の同定は、島倉（1973）および中村（1980）をアトラスとして、所有の現生標本との対比で行った。結果は同定レベルによって、科・亜科、属、亜属、節および種の階級で分類した。複数の分類群にまたがるものはハイフン（-）で結んで示した。なお、科・亜科や属の階級の分類群で一部が属や節に細分できる場合はそれらを別の分類群とした。イネ属に関しては、中村（1974、1977）を参考に、現生標本の表面模様・大きさ・孔・表層断面の特徴と対比して分類しているが、個体変化や類似種があることからイネ属型とした。

結果

1) 分類群

出現した分類群は、樹木花粉3、草本花粉7、シダ植物孢子1形態の計11である。これらの学名と和名および粒数を表5に示した。なお同時に検鏡したところ、寄生虫卵および明らかな消化残渣は認められなかった。

以下に出現した分類群を記す。

〔樹木花粉〕マツ属複維管束亜属、スギ、コナラ属コナラ亜属

〔草本花粉〕イネ科、カヤツリグサ科、ソバ属、アカザ科 - ヒユ科、アブラナ科、タンポポ科、ヨモギ属

〔シダ植物孢子〕単条溝孢子

2) 花粉群集の特徴

2区

試料A、試料B、試料C、試料Dは花粉がほとんど検出されない。

8 拡3区

試料E 花粉はあまり検出されないが、スギ、イネ科、ヨモギ属、ソバ属などが検出される。

花粉分析から推定される植生と環境

2区

試料A、試料B、試料C、試料Dは花粉がほとんど検出されず、花粉などの有機質遺体が分解される乾燥か乾湿を繰り返す堆積環境または堆積速度の速い環境が考えられる。

8 拡3区

試料E 花粉が少なく乾燥か乾湿を繰り返す堆積環境が示唆される。周囲にはスギの樹木とイネ科、ヨモギ属などの草本が分布し、ソバ属の検出から畑の分布が示唆される。

(3) 珪藻分析

原理

珪藻は主に水域に生息する珪酸の被殻を有する単細胞植物であり、海水域から淡水域のほぼすべての水域に生活し、湿った土壌、岩石、コケの表面にまで生息する。塩分濃度、酸性度、流水性などの環境要因に応じてそれぞれの種類が固有にまたは許容範囲をもって多重な環境要因に生

育する。珪酸の被殻は死後、堆積粒子として堆積物中に残存する。堆積物より検出した珪藻遺骸の種類構成や組成は当時の堆積環境を反映し水域の環境を主とする古環境の復元に用いられる。

方法

試料には以下の物理化学処理を施し、プレパラートを作成した。

- 1) 試料から1cm³を秤量する。
- 2) 10%過酸化水素水を加え、加温し反応させながら、1晩放置する。
- 3) 上澄みを捨て、細粒のコロイドおよび薬品の水洗を行う。水を加え、1.5時間静置後、上澄みを捨てる。この操作を5・6回繰り返す。
- 4) 残渣をマイクロピペットでカバーガラスに滴下し乾燥させる。マウントメディアによって封入しプレパラートを作成する。

プレパラートは生物顕微鏡で600～1500倍で検鏡し、直線視野法により計数を行う。計数は、同定・計数は珪藻被殻が100個体以上になるまで行い、少ない試料についてはプレパラート全面について精査を行った。

結果

試料から出現した珪藻は、貧塩性種（淡水生種）11分類群である。計数された珪藻の学名と個数を表6に示す。

2区

試料A 珪藻の密度は低い。沼沢湿地付着生の好止水性種の*Eunotia minor*が検出される。

試料B 珪藻は検出されない。

試料C 珪藻の密度は低い。陸生珪藻の*Hantzschia amphioxys*などが検出される。

試料D 珪藻は検出されない。

8 拡3区

試料E 珪藻の密度は低い。陸生珪藻の*Navicula mutica*などが検出される。

珪藻分析から推定される堆積環境

2区

試料A 沼沢湿地付着生の好止水性種が検出され、沼沢の環境が示唆されるが、珪藻の密度は低く、堆積速度が速いか一時的な状況を反映していると推定される。

試料B 珪藻は検出されなく、珪藻の生育できない乾燥した環境が示唆される。

試料C 珪藻密度は低く、陸生珪藻が検出され、湿った土壌の環境からやや乾燥した環境が示唆される。

試料D 珪藻は検出されず、珪藻の生育できない乾燥した環境が示唆される。

8 拡3区

試料E 珪藻の密度は低く、陸生珪藻が検出され、湿った土壌の環境からやや乾燥した環境が示唆される。

(4) まとめ

花粉分析と珪藻分析から推定される植生と環境を以下にまとめる。

2区

試料A 乾燥した堆積環境であり、一時的に沼沢の環境の時期があったと考えられる。

試料B 乾燥した堆積環境が示唆される。

試料C 湿った土壌の環境からやや乾燥した環境が示唆される。

試料D 乾燥した堆積環境が示唆される。

8 拡3区

試料E 周囲にはスギの樹木とイネ科、ヨモギ属などの草本が生育し、ソバ属の畑など分布し、湿った土壌の環境からやや乾燥した環境であった。

参考文献

- 中村純 (1973) 『花粉分析』 古今書院 p.82-110
- 金原正明 (1993) 「花粉分析法による古環境復原」 『新版古代の日本第10巻古代資料研究の方法』 角川書店 p.248-262
- 島倉巳三郎 (1973) 「日本植物の花粉形態」 『大阪市立自然科学博物館収蔵目録第5集』 60p
- 中村純 (1980) 「日本産花粉の標徴」 『大阪自然史博物館収蔵目録第13集』 91p
- 中村純 (1974) 「イネ科花粉について、とくにイネ (*Oryza sativa*) を中心として」 『第四紀研究 13』 p.187-193
- 中村純 (1977) 「稲作とイネ花粉」 『考古学と自然科学 第10号』 p.21-30
- Hustedt, F. (1937-1938) Systematische und ologische Untersuchungen über die Diatomeenflora von Java, Bali und Sumatra nach dem Material der Deutschen Limnologischen Sunda-Expedition. Arch. Hydrobiol., Suppl. 15, p.131-506.
- Patrick, R. eimer, C. W. (1966) The diatom of the United States, vol.1. Monographs of Natural Sciences of Philadelphia, No.13, The Academy of Natural Siences of Philadelphia, 644p.
- Lowe, R.L. (1974) Environmental Requirements and pollution tolerance of fresh-water diatoms. 333p., National Environmental Reserch.Center.
- Patrick, R. eimer, C. W. (1975) The diatom of the United States, vol.2. Monographs of Natural Sciences of Philadelphia, No.13, The Academy of Natural Siences of Philadelphia, 213p.
- Asai, K. & Watanabe, T. (1995) Statistic Classification of Epilithic Diatom Species into Three Ecological Groups relating to Organic Water Pollution (2) Saprophilous and saproxenous taxa. Diatom, 10, p.35-47.
- 小杉正人 (1986) 「陸生珪藻による古環境解析とその意義 - わが国への導入とその展望 - 」 『植生史研究 第1号』 植生史研究会 p.29-44
- 小杉正人 (1988) 「珪藻の環境指標種群の設定と古環境復原への応用」 『第四紀研究 27』 p.1-20
- 安藤一男 (1990) 「淡水産珪藻による環境指標種群の設定と古環境復原への応用」 『東北地理 42』 p.73-88
- 伊藤良永・堀内誠示 (1991) 「陸生珪藻の現在に於ける分布と古環境解析への応用」 『珪藻学会誌 6』 p.23-45

表5 花粉分析表

分類群	学名	和名	2区				8拵3区
			試料A	試料B	試料C	試料D	試料E
Arboreal pollen		樹木花粉					
	Pinus subgen. Diploxylon	マツ属複維管束亜属					1
	Cryptomeria japonica	スギ					10
	Quercus subgen. Lepidobalanus	コナラ属コナラ亜属	1				
Nonarboreal pollen		草本花粉					
	Gramineae	イネ科					5
	Cyperaceae	カヤツリグサ科					1
	Fagopyrum	ソバ属					1
	Chenopodiaceae-Amaranthaceae	アカザ科-ヒユ科					2
	Cruciferae	アブラナ科		1			1
	Lactuoidae	タンポポ亜科					1
	Artemisia	ヨモギ属					3
Fern spore		シダ植物孢子					
	Monolate type spore	単条溝孢子	1				1
Arboreal pollen		樹木花粉	1				11
Nonarboreal pollen		草本花粉		1			14
Total pollen		花粉総数			0	0	25
		試料1 cm ² 中の花粉密度	1.8	0.6	0	0	1.1
			×10	×10			×10 ²
Helminth eggs		寄生虫卵	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)
		明らかな消化残渣	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)

表6 珪藻分析表

分類群	2区				8拵3区	
	試料A	試料B	試料C	試料D	試料E	
貧塩性種 (淡水生種)						
Cocconeis placentula			2			
Denticula sp.					1	
Eunotia minor	18					
Hantzschia amphioxys	2		2		1	
Melosira lirata					1	
Meridion circulare v. constricta	4				2	
Navicula confervacea					2	
Navicula mutica	1				10	
Pinnularia borealis					2	
Pinnularia subcapitata					2	
Stauroneis sp.			2			
合計	25	0	6	0	21	
未同定	2	0	0	0	0	
破片	26	0	18	2	10	
	試料1 cm ² 中の殻数密度	5.0	-	1.2	-	4.2
		×10 ³		×10 ³		×10 ³
完形殻保存率 (%)	-	-	-	-	-	

付表1 平成12年度調査 土器類一覧表

番号	器種	器形	器高	口径	胎土	焼成	色調	区	遺構・層名	時期
1	弥生土器				砂粒含	良	にぶい橙色	2区	Pt115	弥生時代前期
2	弥生土器				砂粒・雲母含	良	にぶい黄橙色	2区	SX82	弥生時代前期
3	土師器	皿	1.25	10.8	密	良	浅黄色	2区	景石間埋土下層	平安時代前期
4	土師器	皿	2.1	14.6	密	良	浅黄色	2区	景石間埋土下層	平安時代前期
5	土師器	皿	3.3	14.1	密	良	浅黄色	2区	景石間埋土下層	平安時代前期
6	土師器	皿	2.8	17.0	密	良	浅黄色	2区	景石間埋土下層	平安時代前期
7	須恵器	杯蓋	1.6	14.0	密		暗灰色	2区	景石間埋土下層	平安時代前期
8	土師器	皿	1.75	10.2	密	良	浅黄色	1区	にぶい黄橙色泥砂層	平安時代後期
9	土師器	皿	1.7	10.0	密	良	浅黄色	1区	にぶい黄橙色泥砂層	平安時代後期
10	土師器	皿	2.1	11.8	密	良	浅黄色	1区	にぶい黄橙色泥砂層	平安時代後期
11	土師器	皿	1.8	13.0	密	良	浅黄色	1区	にぶい黄橙色泥砂層	平安時代後期
12	土師器	皿	2.1	13.2	密	良	浅黄橙色	1区	にぶい黄橙色泥砂層	平安時代後期
13	土師器	皿	2.7	15.8	密	良	淡黄色	1区	にぶい黄橙色泥砂層	平安時代後期
14	輸入青白磁	合子蓋	1.5	5.0			白色	1区	にぶい黄橙色泥砂層	平安時代後期
15	輸入白磁	椀	3.5以上	17.6			灰白色	1区	にぶい黄橙色泥砂層	平安時代後期
16	輸入白磁	椀	4.0以上	16.6			灰白色	1区	にぶい黄橙色泥砂層	平安時代後期
17	輸入白磁	椀	2.0以上				白色	1区	にぶい黄橙色泥砂層	平安時代後期
18	土師器	皿	2.1	10.2	密	良	浅黄色	1区	SD29	平安時代後期
19	土師器	皿	1.8	10.4	密	良	浅黄色	1区	SD29	平安時代後期
20	土師器	皿	2.0	10.5	密	良	浅黄色	1区	SD29	平安時代後期
21	土師器	皿	2.2	11.1	密	良	浅黄色	1区	SD29	平安時代後期
22	土師器	皿	2.1	11.6	密	良	浅黄色	1区	SD29	平安時代後期
23	土師器	皿	2.1	11.6	密	良	浅黄色	1区	SD29	平安時代後期
24	土師器	皿	2.7	14.3	密	良	浅黄色	1区	SD29	平安時代後期
25	土師器	皿	1.0	10.6	密	良	浅黄色	1区	SD29	平安時代後期
26	土師器	皿	1.4	11.9	密	良	浅黄色	1区	SD29	平安時代後期
27	輸入青磁	皿	1.8以上	9.0			白色	1区	SD29	平安時代後期
28	輸入白磁	椀	1.8以上	16.0			白色	1区	SD29	平安時代後期
29	輸入白磁	椀	4.0以上	15.0			白色	1区	SD29	平安時代後期
30	施釉陶器	椀	5.2	9.6			灰色	2区	SK67	江戸時代中期
31	施釉陶器	椀	5.3	9.3			灰白色	2区	SK17	江戸時代中期
32	施釉陶器	香炉	7.8	8.6			にぶい黄橙色	2区	SK17	江戸時代中期
33	染付磁器	皿	4.0	18.6			灰白色	2区	SK17	江戸時代中期
34	染付磁器	小皿	2.0	10.2			白色	2区	SK17	江戸時代中期
35	施釉陶器	皿	5.2	10.4			灰白色	3区	遺構検出中	江戸時代中期
36	施釉陶器	椀	4.5	12.2			白色	3区	遺構検出中	江戸時代中期
37	施釉陶器	鬚水入れ	4.15	11.3			灰白色	3区	遺構検出中	江戸時代中期
38	染付磁器	椀	5.2	10.2			灰色	3区	SK26	江戸時代中期
39	土師器	皿	1.9	9.6	密	良	浅黄色	3区	SK22	江戸時代中期
40	土師器	皿	1.9	10.0	密	良	浅黄色	3区	SK22	江戸時代中期
41	土師器	皿	2.2	10.6	密	良	浅黄色	3区	SK22	江戸時代中期
42	土師器	皿	2.2	10.1	密	良	浅黄色	3区	SK22	江戸時代中期
43	土師器	皿	1.5	11.5	密	良	浅黄色	3区	SK22	江戸時代中期
44	土師器	皿	1.8	12.5	密	良	浅黄色	3区	SK22	江戸時代中期
45	土師質土器	壺蓋	1.8	8.0	粗砂粒含	良	橙色	3区	SK22	江戸時代中期
46	土師質土器	壺蓋	3.5	7.8	砂粒含	良	淡橙色	3区	SK22	江戸時代中期
47	白磁	皿	2.0	8.0			白色	3区	SK22	江戸時代中期
48	染付磁器	仏飯器	6.1	8.3			灰白色	3区	SK22	江戸時代中期
49	施釉陶器	椀	5.0	12.6			灰黄褐色	3区	SK22	江戸時代中期
50	瓦質土器	焙烙	6.5	26.0			にぶい橙色	3区	SK22	江戸時代中期

付表2 平成12年度調査 瓦類一覧表

番号	瓦名	瓦当縦径	瓦当厚	胎土	色調	焼成	区	遺構・層名	時期
51	単弁八葉蓮華文軒丸瓦	19.4		砂粒含	淡黄灰	硬質	3区	SD29	平安時代前期
52	単弁八葉蓮華文軒丸瓦	12.0		砂粒含	灰白色	やや軟	1区	SK36	平安時代中期
53	単弁十六葉蓮華文軒丸瓦	16.0		砂粒含	明灰黄	硬質	2区	SG 5 下層	平安時代前期
54	複弁蓮華文軒丸瓦	17.0		砂粒多く含	灰白色	硬質	8区	にぶい黄褐色砂泥層	平安時代前期
55	単弁蓮華文軒丸瓦	8.0		砂粒含	灰黄	軟質	2区	Pit94	平安時代前期
56	複弁蓮華文軒丸瓦			砂粒含	暗灰色	堅緻	2区	SK 8	平安時代中期
57	均整唐草文軒平瓦		6.6	細砂少量含	灰白色	やや軟	8区	北壁整形	平安時代前期
58	均整唐草文軒平瓦			小礫混	黒灰色	硬質	3区	Pit83	平安時代前期
59	均整唐草文軒平瓦		5.0	砂粒多く含	灰黒色	やや軟	3区	遺構検出中	平安時代前期
60	剣頭文軒平瓦			砂粒少量含	黒灰色	やや軟	8区	暗褐色砂泥層	平安時代後期
61	剣頭文軒平瓦		2.6	砂粒含	灰色	やや硬	3区	遺構検出中	平安時代後期
62	金箔家紋軒丸瓦	12.0		砂粒含	灰白色	やや軟	2区	にぶい黄褐色砂泥層	桃山時代
63	金箔三巴文軒丸瓦	15.0		砂粒含	灰白色	硬質	8区	黒褐色砂泥層	桃山時代
64	金箔唐草文軒平瓦		4.0	細砂少量含	灰白色	硬質	9区	東壁断割	桃山時代
65	三巴文軒丸瓦	16.4		蜜	灰白色	やや軟	3区	Pit84	江戸時代
66	三巴文軒丸瓦	14.7		密	黒灰色	良	8区	にぶい黄褐色砂泥層	江戸時代
67	菊丸瓦	10.5		蜜	黒灰色	やや軟	1区	SK 2	江戸時代
68	菊丸瓦	8.7		砂粒含	灰白色	やや軟	9区	東壁断割	江戸時代
69	菊丸瓦	8.5		密	黒灰色	やや硬	9区	暗褐色砂泥層	江戸時代
70	菊丸瓦	7.9		砂粒少量含	灰白色	硬質	9区	暗褐色砂泥層	江戸時代
71	菊丸瓦	8.1		砂粒含	灰白色	やや軟	2区	SK13	江戸時代
72	菊丸瓦	7.6		砂粒含	灰白色	やや硬	9区	黒褐色砂泥層	江戸時代
73	菊丸瓦	6.7		砂粒含	灰白色	やや軟	9区	暗褐色砂泥層	江戸時代
74	菊丸瓦	8.6		密	黒灰色	やや硬	1区	褐色砂泥層	時期不明
75	唐草文軒平瓦		4.0	砂粒含	灰白色	やや硬	9区	黒褐色砂泥層	江戸時代
76	唐草文軒平瓦		4.7	密	灰青色	堅緻	9区	SK 1	江戸時代
77	唐草文軒平瓦		4.8	砂粒含	黒色	やや軟	1区	遺構検出中	江戸時代
78	道具瓦		5.6	砂粒少量含	青黒色	良	8区	にぶい黄褐色砂泥層	江戸時代
79	軒棧瓦			砂粒含	黒灰色	硬質	8区	遺構検出中	時期不明
80	鬼瓦			砂粒少量含	灰白色	硬質	9区	SK 1	江戸時代以降

付表3 平成12年度調査 銭貨一覧表

番号	銭名	縦外径	縦内径	横外径	横内径	厚さ	重さ	産地	初鑄年	区	遺構・層名	時期
81	咸平元寶	24.0	20.0			1.5	2.0	北宋	998	2区	黒褐色砂泥	平安時代
82	紹聖元寶	24.0	18.0	24.0	18.0	2.0	3.0	北宋	1094	1区	Pt13	平安時代
83	皇宋通寶	25.0	23.0	25.0	23.0	2.0	2.5	北宋	1038	1区	にぶい黄褐色砂泥層	平安時代
84	天聖元寶	(24.0)	(20.0)	(25.0)	(20.0)	1.0	2.0	北宋	1023	1区	にぶい黄褐色砂泥層	平安時代
85	元豊通寶	24.0	19.0	24.0	19.0	1.0	1.5	北宋	1078	6区	SX 2	平安時代
86	天禧通寶	25.0	21.0	25.0	21.0	2.0	2.0	北宋	1017	6区	SD 3	平安時代
87	景德元寶	22.0	20.0	22.0	20.0	1.5	1.5	北宋	1004	8区	SK 7	平安時代
88	寛永通寶	23.8	20.6	23.7	19.7	1.0				2区	SK67	江戸時代
89	寛永通寶	24.0	19.8	24.2	20.1	1.3				2区	SK67	江戸時代
90	寛永通寶	23.0	18.8	22.8	18.9	1.3				2区	SK67	江戸時代
91	寛永通寶	24.7	24.7	24.7	19.7	1.2				2区	SK67	江戸時代
92	寛永通寶	24.5	19.6	24.4	19.6	1.0				2区	SK67	江戸時代
93	寛永通寶	22.8	16.9	22.6	17.4	0.9				2区	SK67	江戸時代
94	寛永通寶	24.2	19.5	24.5	19.3	1.0				2区	SK67	江戸時代
95	寛永通寶	23.4	19.2	23.8	19.0	1.0				2区	SK67	江戸時代
96	寛永通寶	25.1	20.1	25.0	20.0	2.0	3.5			2区	北壁整形	江戸時代
97	寛永通寶	25.0	20.0	25.0	20.0	2.0	3.5			2区	SK 8	江戸時代
98	寛永通寶	22.0	18.0	22.0	18.0	1.0				3区	Pt73	江戸時代
99	寛永通寶	24.0	20.0	24.0	20.0	1.1	1.5			3区	SK150	江戸時代
100	寛永通寶	25.0	20.0	25.0	20.0	1.5	3.5			8区	南壁清掃中	江戸時代
101	寛永通寶	24.0	20.0	24.0	20.0	1.5	3.5			8区	南壁清掃中	江戸時代
102	寛永通寶	25.0	20.0	25.0	20.0	1.0	3.5			8区	南壁清掃中	江戸時代
103	寛永通寶	24.0	20.0	24.0	20.0	1.0	3.0			8区	黒褐色砂泥層	江戸時代
104	寛永通寶	25.0	19.0	25.0	20.0	1.5	2.5			8区	SK 3	江戸時代
105	寛永通寶	21.0	18.0	21.0	18.0	1.5	1.5			8区	8 拵 - 3 区壁面	江戸時代
106	寛永通寶	24.5	19.8	24.5	20.1	1.1	2.5			9区	南壁整形	江戸時代
107	寛永通寶	22.0	17.0	22.0	18.0	1.0	1.5			3区	遺構検出中	江戸時代
108	寛永通寶	22.0	17.0	22.0	17.0	1.5				3区	遺構検出中	江戸時代
109	寛永通寶	25.0	19.0	25.0	19.0	1.2	2.5			3区	遺構検出中	江戸時代
110	寛永通寶	23.0	19.0	23.0	19.0	1.1				3区	遺構検出中	江戸時代
111	寛永通寶	23.0	19.0	24.0	19.0	1.0	2.0			8区	SK 1	江戸時代

付表4 平成12年度調査 その他の遺物一覧表

番号	種類	品名	縦長	横幅	形状	材質	色調	区	遺構・層名	時期
112	土製品	土錘			筒状		明褐灰色	1区	灰黄褐色泥砂層	弥生時代前期
113	土製品	碁石	2.0	1.8	楕円形		黄褐色	2区	SK 1	江戸時代
114	金属製品	煙管				黄銅		8区	暗褐色砂泥層	江戸時代前期
115	金属製品	煙管				黄銅		8区	暗褐色砂泥層	江戸時代前期
116	石製品	扁額						9区	黒褐色泥砂層	江戸時代

付表5 平成13年度調査 土器類一覽表

番号	器種	器形	器高	口径	胎土	色調	区	遺構・層名	時期
1	土師器	皿	1.9	13.4	密	浅黄橙色	1-3区	黄灰色砂層	平安時代前期
2	土師器	皿	1.8	15.6	密	浅黄色	1-3区	黄灰色砂層	平安時代前期
3	土師器	皿	2.0	15.2	密	黄褐色	1-3区	黄灰色砂層	平安時代前期
4	土師器	皿	2.4	16.0	密	浅黄色	1-3区	黄灰色砂層	平安時代前期
5	土師器	杯	3.2	12.8	密	浅黄色	1-3区	黄灰色砂層	平安時代前期
6	土師器	杯	3.1	14.0	密	浅黄橙色	1-3区	黄灰色砂層	平安時代前期
7	土師器	杯	3.0	17.0	密	浅黄色	1-3区	黄灰色砂層	平安時代前期
8	緑釉陶器	椀	2.9	9.6	密	灰白色	1-3区	黄灰色砂層	平安時代前期
9	緑釉陶器	皿	2.3	13.6	密	灰白色	1-3区	黄灰色砂層	平安時代前期
10	緑釉陶器	椀	3.1	12.8	密	灰白色	1-3区	黄灰色砂層	平安時代前期
11	黒色土器A	皿	2.0	13.2	密	灰灰白色	1-3区	黄灰色砂層	平安時代前期
12	黒色土器A	椀	5.0	17.6	密	浅黄色	1-3区	黄灰色砂層	平安時代前期
13	須恵器	皿	2.4	13.7	密	灰白色	1-3区	黄灰色砂層	平安時代前期
14	須恵器	皿	2.5	15.0		灰白色	1-3区	黄灰色砂層	平安時代前期
15	土師器	皿	1.1	11.8	密	にぶい黄褐色	1-3区	黄灰色砂層	平安時代中期
16	土師器	皿	1.9	11.6	密	にぶい黄褐色	1-3区	黄灰色砂層	平安時代中期
17	土師器	皿	1.9	11.8	密	にぶい黄褐色	1-3区	黄灰色砂層	平安時代中期
18	土師器	杯	2.7	14.0	密	にぶい黄褐色	1-3区	黄灰色砂層	平安時代中期
19	土師器	杯	2.9	18.0	密	にぶい黄褐色	1-3区	黄灰色砂層	平安時代中期
20	白色土器	椀	4.0	13.2	密	灰白色	1-3区	黄灰色砂層	平安時代中期
21	白色土器	椀	5.4	15.8	密	灰白色	1-3区	黄灰色砂層	平安時代中期
22	灰釉陶器	椀	2.9	11.7	密	灰白色	1-3区	黄灰色砂層	平安時代中期
23	灰釉陶器	椀	4.6	14.0	密	灰白色	1-3区	黄灰色砂層	平安時代中期
24	輸入白磁	皿	3.0	10.6		灰白色	1-3区	黄灰色砂層	平安時代後期
25	輸入白磁	椀		16.0		灰白色	1-3区	黄灰色砂層	平安時代後期
26	輸入白磁	壺		13.0		灰白色	1-3区	黄灰色砂層	平安時代後期
27	土師器	皿	2.1	10.0	密	黄灰白色	1-2区	SD233下層	平安時代中期
28	土師器	皿	2.9	14.0	密	黄灰白色	1-2区	SD233下層	平安時代中期
29	土師器	皿	2.0	15.7	密	黄灰白色	1-2区	SD233下層	平安時代中期
30	土師器	皿	2.8	15.8	密	黄灰白色	1-2区	SD233下層	平安時代中期
31	土師器	皿	4.1	19.8	密	黄灰白色	1-2区	SD233下層	平安時代中期
32	白色土器	皿	2.7	11.4	密	褐灰色	1-2区	SD233下層	平安時代中期
33	白色土器	皿	3.3	13.4	密	褐灰色	1-2区	SD233下層	平安時代中期
34	瓦器	椀	5.6	15.8	密	灰白色	1-2区	SD233下層	平安時代中期
35	輸入白磁	小椀	1.8	4.0		灰白色	1-2区	SD233下層	平安時代中期
36	輸入白磁	椀	2.6	10.0		灰白色	1-2区	SD233下層	平安時代中期
37	輸入白磁	椀	3.3	10.8		灰白色	1-2区	SD233下層	平安時代中期
38	輸入白磁	椀	3.3	11.4		灰白色	1-2区	SD233下層	平安時代中期
39	灰釉陶器	鉢	9.8	28.0		灰白色	1-2区	SD233下層	平安時代中期
40	灰釉陶器	椀	2.9	8.8		灰色	1-2区	SD233下層	平安時代中期
41	灰釉陶器	椀	3.2	10.2		褐灰色	1-2区	SD233下層	平安時代中期
42	灰釉陶器	椀	5.6	16.4		灰色	1-2区	SD233下層	平安時代中期
43	輸入白磁	椀	6.2	15.2		灰白色	1-2区	SD233下層	平安時代中期
44	輸入白磁	椀	7.1	16.8		黄白色	1-2区	SD233下層	平安時代中期
45	土師器	皿	1.9	10.0	密	にぶい黄橙色	1-2区	SD233上層	平安時代後期
46	土師器	皿	1.8	11.2	密	にぶい黄橙色	1-2区	SD233上層	平安時代後期
47	土師器	皿	2.3	16.2	密	浅黄橙色	1-2区	SD233上層	平安時代後期
48	土師器	皿	2.1	16.0	密	にぶい黄橙色	1-2区	SD233上層	平安時代後期
49	土師器	皿	3.0	16.2	密	灰白色	1-2区	SD233上層	平安時代後期
50	土師器	皿	1.2	10.8	密	にぶい黄橙色	1-2区	SD233上層	平安時代後期
51	須恵器	杯	2.5	8.4		灰色	1-2区	SD233上層	平安時代後期
52	瓦器	皿	1.8	10.6		灰黒色	1-2区	SD233上層	平安時代後期
53	須恵器	鉢	7.7	22.0		灰色	1-2区	SD233上層	平安時代後期
54	瓦器	皿	2.1	9.8	密	灰白色	1-2区	SD233上層	平安時代後期
55	瓦器	椀	3.1	8.8	密	灰白色	1-2区	SD233上層	平安時代後期
56	瓦器	椀	6.0	14.8	密	灰白色	1-2区	SD233上層	平安時代後期
57	輸入白磁	皿	2.7	10.8		褐灰色	1-2区	SD233上層	平安時代後期
58	輸入白磁	皿	2.8	12.0		灰白色	1-2区	SD233上層	平安時代後期

番号	器種	器形	器高	口径	胎土	色調	区	遺構・層名	時期
59	土師器	皿	1.1	11.6	密	にぶい橙色	1-2区	SD217	平安時代後期
60	土師器	皿	1.6	9.8	密	にぶい橙色	1-2区	SD217	平安時代後期
61	土師器	皿	2.0	10.4	密	にぶい橙色	1-2区	SD217	平安時代後期
62	土師器	皿	2.2	12.2	密	にぶい橙色	1-2区	SD217	平安時代後期
63	土師器	皿	2.4	12.9	密	にぶい橙色	1-2区	SD217	平安時代後期
64	土師器	皿	2.9	13.2	密	にぶい橙色	1-2区	SD217	平安時代後期
65	土師器	皿	2.7	16.0	密	灰白色	1-2区	SD217	平安時代後期
66	土師器	皿	2.4	18.4	密	にぶい橙色	1-2区	SD217	平安時代後期
67	土師器	皿	1.0	9.8	密	にぶい黄橙色	1-2区	SE226	平安時代後期
68	土師器	皿	1.2	8.8	密	にぶい黄橙色	1-2区	SE226	平安時代後期
69	土師器	皿	2.0	11.8	密	にぶい黄橙色	1-2区	SE226	平安時代後期
70	瓦器	皿	2.1	7.6	密	灰色	1-2区	SE226	平安時代後期
71	土師器	皿	1.1	12.0	密	灰白色	1-2区	SD83	平安時代後期
72	土師器	皿	1.5	9.8	密	黄灰白色	1-2区	SD83	平安時代後期
73	土師器	皿	1.8	10.0	密	浅黄橙色	1-2区	SD83	平安時代後期
74	土師器	皿	2.4	13.6	密	黄灰白色	1-2区	SD83	平安時代後期
75	土師器	皿	3.4	14.6	密	浅黄褐色	1-2区	SD83	平安時代後期
76	瓦器	椀	5.1	14.4	密	灰白色	1-2区	SD83	平安時代後期
77	土師器	皿	1.8以上	10.2	密	浅黄褐色	1-2区	SE227	平安時代後期
78	土師器	皿	3.0	14.0	密	浅黄色	1-2区	SE227	平安時代後期
79	須恵器	小椀	2.9	9.0		灰色	1-2区	SE227	平安時代後期
80	輸入彩釉陶器	盤		17.0	密	灰白色	1-1区	Pit134	平安時代後期
81	輸入彩釉陶器	盤			やや密	にぶい黄橙色	1-1区	2面掘下げ	平安時代後期
82	輸入彩釉陶器	盤			やや密	にぶい黄橙色	1-1区	SK 7	平安時代後期
83	輸入彩釉陶器	盤			やや密	にぶい黄橙色	1-1区	掘下げ	平安時代後期
84	輸入彩釉陶器	盤			やや密	にぶい黄橙色	1-1区	SD110上層	平安時代後期
85	輸入彩釉陶器	盤			やや密	灰白色	1-1区	2面掘下げ	平安時代後期
86	輸入彩釉陶器	盤			やや密	にぶい黄橙色	1-1区	掘下げ	平安時代後期
87	輸入彩釉陶器	盤			やや密	灰黄褐色	1-1区	Pit76	平安時代後期
88	輸入彩釉陶器	盤			やや密	にぶい黄橙色	1-1区	SD110上層	平安時代後期
89	輸入彩釉陶器	盤			やや密	浅黄橙色	1-1区	SK118	平安時代後期
90	輸入彩釉陶器	盤			やや密	浅黄褐色	1-1区	掘下げ	平安時代後期
91	輸入彩釉陶器	盤			やや密	浅黄褐色	1-1区	掘下げ	平安時代後期
92	輸入彩釉陶器	盤		31.6	やや密	にぶい黄橙色	1-2区	SK 4	平安時代後期
93	輸入彩釉陶器	盤			やや密	浅黄褐色	1-2区	2面掘下げ	平安時代後期
94	輸入彩釉陶器	盤			やや密	褐色	1-2区	SD153	平安時代後期
95	輸入彩釉陶器	盤			やや密	褐色	1-2区	掘下げ	平安時代後期
96	輸入彩釉陶器	盤			やや密	褐色	1-2区	2面掘下げ	平安時代後期
97	輸入彩釉陶器	盤			やや密	にぶい黄褐色	1-2区	2面掘下げ	平安時代後期
98	輸入彩釉陶器	盤			やや密	浅黄褐色	1-4区	掘下げ	平安時代後期
99	輸入彩釉陶器	盤			やや密	褐色	1-4区	掘下げ	平安時代後期
100	土師器	皿	2.0	6.6	密	淡黄色	1-1区	SD110中層	室町時代後期
101	土師器	皿	1.6	7.1	密	浅黄褐色	1-1区	SD110中層	室町時代後期
102	土師器	皿	2.3	12.8	密	灰白色	1-1区	SD110中層	室町時代後期
103	土師器	皿	2.1	13.1	密	灰白-浅黄色	1-1区	SD110中層	室町時代後期
104	土師器	皿	2.9	13.7	密	浅黄褐色	1-1区	SD110中層	室町時代後期
105	施釉陶器	皿	2.1	10.4	密	灰白色	1-1区	SD110中層	室町時代後期
106	施釉陶器	椀	5.4	11.4	密	淡黄色	1-1区	SD110上層	室町時代後期
107	輸入白磁	皿	3.1	11.9		白色	1-1区	SD110上層	室町時代後期
108	輸入染付磁器	椀				白色	1-1区	SD110中層	室町時代後期
109	土師器	皿	1.6	5.2	密	にぶい黄褐色	1-2区	SD153	桃山時代
110	土師器	皿	1.0	5.2	密	にぶい黄褐色	1-2区	SD153	桃山時代
111	土師器	皿	1.8	9.6	密	浅黄褐色	1-2区	SD153	桃山時代
112	土師器	皿	2.2	12.0	密	にぶい黄褐色	1-2区	SD153	桃山時代
113	施釉陶器	皿	2.0	9.7			1-2区	SD153	桃山時代
114	施釉陶器	皿	2.3	10.6		黄白色	1-2区	SD153	桃山時代
115	施釉陶器	椀	5.5	11.6		灰白色	1-2区	SD153	桃山時代
116	施釉陶器	椀	6.2	11.6		灰白色	1-2区	SD153	桃山時代
117	輸入染付磁器	椀		12.6		白色	1-2区	SD153	桃山時代

番号	器種	器形	器高	口径	胎土	色調	区	遺構・層名	時期
118	土師器	皿	2.2	9.6	密	にぶい橙色	1-2区	SE 8	江戸時代前期
119	土師器	皿	1.8	10.2	密	にぶい橙色	1-2区	SE 8	江戸時代前期
120	土師器	皿	2.0	10.8	密	にぶい橙色	1-2区	SE 8	江戸時代前期
121	施釉陶器	皿	3.0	13.4	密	灰色	1-2区	SE 8	江戸時代前期
122	施釉陶器	灯明具蓋	1.6以上	7.6	密	黄白色	1-2区	SE 8	江戸時代前期
123	土師質土器	塩壺身	8.4	5.6	やや密	淡黄色	1-2区	SE 8	江戸時代前期
124	施釉陶器	皿	3.3	24.0	密	灰白色	1-2区	SE 8	江戸時代前期
125	施釉陶器	鉢	7.4	25.0	密	褐灰色	1-2区	SE 8	江戸時代前期

付表6 平成13年度調査 瓦類一覧表

番号	瓦名	瓦当縦径	瓦当厚	胎土	色調	焼成	区	遺構・層名	時期
126	単弁十二葉蓮華文軒丸瓦	17.5		砂粒少量含	灰黄色	硬質	1-1区	遺構検出中	平安時代前期
127	複弁八葉蓮華文軒丸瓦	6.5以上		微砂少量含	灰色	硬質	1-1区	遺構検出中	平安時代前期
128	蓮華文軒丸瓦	9.4		砂粒多量含	灰色	やや軟質	1-1区	SK130	鎌倉時代?
129	単弁八葉蓮華文軒丸瓦	15.0以上		砂粒少量含	灰黄色	やや軟質	1-1区	SK22	平安時代中期
130	単弁八葉蓮華文軒丸瓦	14.0以上		砂粒少量含	灰色	硬質	1-1区	SK35	平安時代中期
131	均整唐草文軒平瓦		7.0		灰色	硬質	1-1区	2面掘下げ	平安時代後期
132	緑釉均整唐草文軒平瓦			砂粒少量含	灰黄色	硬質	1-1区	SK208	平安時代前期
133	偏行唐草文軒平瓦		3.9	細砂少量含	灰白色	硬質	1-1区	SK97	平安時代中期
134	均整唐草文軒平瓦		4.5	砂粒少量含	灰黄色	硬質	1-1区	掘下げ	平安時代前期
135	均整唐草文軒平瓦		5.8	砂粒含	灰白色	硬質	1-1区	掘下げ	平安時代中期
136	唐草文軒平瓦		5.9	微砂含	暗灰色	硬質	1-1区	SK170	鎌倉時代
137	均整唐草文軒平瓦		6.8	細砂含	灰色	硬質	1-1区	SK41	平安時代前期
138	水波文軒平瓦		2.9	砂粒少量含	灰色	やや軟質	1-1区	SK 6	平安時代後期
139	剣頭文軒平瓦		3.3	砂粒多量含	灰白色	硬質	1-1区	Pit134	平安時代後期
140	唐草文軒平瓦		5.4	細砂含	暗灰色	硬質	1-1区	SK130	平安時代中期
141	剣頭文軒平瓦		4.0	細砂含	灰白色	やや軟質	1-1区	掘下げ	平安時代後期
142	剣頭文軒平瓦		2.9	細砂含	淡橙色	やや軟質	1-1区	SD110下層	平安時代後期
143	剣頭文軒平瓦		1.9	細砂少量含	灰黄色	やや硬質	1-1区	2面掘下げ	鎌倉時代
144	剣頭文軒平瓦		3.4	細砂含	灰黄色	やや硬質	1-1区	SD110下層	平安時代後期
145	連巴文軒平瓦		4.5		灰色	硬質	1-1区	SK 7	平安時代後期
146	剣巴文軒平瓦		4.2	砂粒少量含	灰色	硬質	1-1区	SK17	平安時代後期
147	連巴文軒平瓦		4.9	砂粒含む	灰白色	硬質	1-1区	2面掘下げ	平安時代後期
148	連巴文軒平瓦		4.9	微砂少量含	灰色		1-1区	2面掘下げ	平安時代後期
149	唐草文軒平瓦		5.7	砂粒少量含	灰色	やや軟質	1-1区	SK 4	江戸時代
150	丸瓦(刻印)			砂粒少量含	灰色	硬質	1-1区	SK48	江戸時代
151	複弁八葉蓮華文軒丸瓦	18.6	11.8	砂粒含	灰白色	硬質	1-2区	SD233	平安時代前期
152	複弁五葉蓮華文軒丸瓦	7.5以上		細砂少量含	灰黒色	硬質	1-2区	2面掘下げ	平安時代後期
153	単弁蓮華文軒丸瓦	7.7以上		細砂少量含	灰黄色	やや軟質	1-2区	2面掘下げ	平安時代前期
154	単弁五葉蓮華文軒丸瓦	9.7以上		砂粒含	灰色	やや軟質	1-2区	2面掘下げ	平安時代後期
155	単弁蓮華文軒丸瓦			砂粒少量含	灰白色	やや軟質	1-2区	SD153	平安時代中期
156	複弁蓮華文軒丸瓦	6.1以上		微砂少量含	淡灰黄	やや硬質	1-2区	SK 1	平安時代中期
157	複弁蓮華文軒丸瓦	11.2		砂粒含	灰黒色	硬質	1-2区	SD233	平安時代後期
158	複弁蓮華文軒丸瓦			微砂含	暗灰色	硬質	1-2区	遺構検出中	平安時代後期
159	複弁蓮華文軒丸瓦	10.2		微砂少量含	灰色	やや軟質	1-2区	拡張掘下げ	平安時代前期
160	複弁四葉蓮華文軒丸瓦	7.0以上		砂粒少量含	灰黄色	硬質	1-2区	断割	平安時代前期
161	単弁蓮華文軒丸瓦	13.6以上		細砂少量含	暗灰色		1-2区	SD233	平安時代後期
162	均整唐草文軒平瓦		5.6	小礫含	灰色	やや硬質	1-2区	SD233	平安時代後期
163	偏行唐草文軒平瓦		3.9	微砂含	灰白色	やや硬質	1-2区	SE227	平安時代後期
164	均整唐草文軒平瓦			細砂少量含	灰色	やや硬質	1-2区	Pit256	平安時代後期
165	偏行唐草文軒平瓦		4.3	細砂含	灰色	やや硬質	1-2区	2面掘下げ	平安時代後期
166	均整唐草文軒平瓦		4.4	細砂少量含	暗灰色		1-2区	Pit231	平安時代中期
167	均整唐草文軒平瓦		4.4	細砂少量含	暗灰色		1-2区	Pit231	平安時代中期
168	緑釉均整唐草文軒平瓦			砂粒含	淡橙色	やや軟質	1-2区	SE314	平安時代前期
169	複弁蓮華文軒平瓦		4.8	細砂多量含	灰黄色	やや硬質	1-2区	SD233	平安時代後期
170	剣頭文軒平瓦		2.9	砂粒少量含	淡橙色	やや軟質	1-2区	SE314	平安時代後期

番号	瓦名	瓦当縦径	瓦当厚	胎土	色調	焼成	区	遺構・層名	時期
171	剣頭文軒平瓦		3.4	砂粒含	灰黄白	やや軟質	1-2区	2面掘下げ	平安時代後期
172	唐草文軒平瓦		3.3				1-2区	SE314	鎌倉時代
173	剣頭文軒平瓦		2.8		暗灰色		1-2区	掘下げ	鎌倉時代
174	巴文軒平瓦		4.7	細砂含	暗灰色		1-2区	遺構検出中	平安時代後期
175	複弁蓮華文軒平瓦		5.3	細砂少量含	灰白色	硬質	1-2区	SD233	平安時代後期
176	金箔唐草文軒平瓦			細砂少量含	灰色	硬質	1-2区	遺構検出中	桃山時代
177	金箔単弁五葉蓮華文軒丸瓦			細砂含	灰色	硬質	1-2区	SD153	桃山時代
178	「神泉苑」銘平瓦			微砂少量含	灰白色	硬質	1-2区	掘下げ	平安時代後期
179	単弁蓮華文軒丸瓦			微砂少量含	灰白色	硬質	1-3区	上層掘下げ	平安時代前期
180	単弁蓮華文軒丸瓦			砂粒少量含	灰白色	やや軟質	1-3区	SD10下層	平安時代前期
181	複弁八葉蓮華文軒丸瓦	12.4		細砂少量含	灰白色	硬質	1-3区	掘下げ	平安時代中期
182	金箔三巴文軒丸瓦			細砂少量含	灰白色	やや軟質	1-3区	SD10	桃山時代
183	唐草文軒平瓦		7.5	砂粒多量含	灰色	硬質	1-3区	掘下げ	平安時代中期
184	均整唐草文軒平瓦		6.5	小礫少量含	灰白色	硬質	1-3区	上層掘下げ	平安時代前期
185	唐草文軒平瓦		5.4	砂粒少量含	淡灰緑	やや軟質	1-3区	掘下げ	平安時代中期
186	剣頭文軒平瓦		3.0	砂粒少量含	灰白色	やや軟質	1-3区	SK35	平安時代後期
187	複弁八葉蓮華文軒丸瓦	11.2		砂粒少量含	灰白色	硬質	1-4区	掘下げ	平安時代前期
188	複弁蓮華文軒丸瓦				灰白色	硬質	1-4区	掘下げ	平安時代前期
189	複弁六葉蓮華文軒丸瓦				暗灰色		1-4区	掘下げ	平安時代後期
190	複弁蓮華文軒丸瓦			砂粒含	淡橙色	硬質	1-4区	SD46	鎌倉時代
191	複弁蓮華文軒丸瓦						1-4区	掘下げ	平安時代後期
192	蓮華文軒丸瓦		4.0	砂粒多量含	灰黄色	やや軟質	1-4区	掘下げ	鎌倉時代
193	偏行唐草文軒平瓦		3.9		灰色白	やや軟質	1-4区	掘下げ	平安時代後期
194	偏行唐草文軒平瓦		5.5	細砂少量含		灰白色	1-4区	SK79	平安時代後期
195	唐草文軒平瓦		5.5	微砂少量含	灰褐色	硬質	1-4区	SD31	平安時代後期
196	剣頭文軒平瓦		3.3	砂粒多量含	灰色	やや硬質	1-4区	掘下げ	平安時代後期
197	剣頭文軒平瓦		2.7	砂粒少量含	灰白色	軟質	1-4区	掘下げ	平安時代後期
198	剣頭文軒平瓦		2.9	細砂多量含	暗灰色	硬質	1-4区	掘下げ	平安時代後期
199	剣頭文軒平瓦		2.7	微砂含	灰黄褐	やや軟質	1-4区	遺構検出中	平安時代後期
200	剣頭文軒平瓦		3.0	砂粒含	灰色	やや硬質	1-4区	掘下げ	平安時代後期
201	剣頭文軒平瓦		3.7	砂粒少量含	灰黄色	やや軟質	1-4区	掘下げ	平安時代後期
202	剣頭文軒平瓦		3.6	砂粒多量含	灰黄色	やや軟質	1-4区	掘下げ	平安時代後期
203	連珠文軒平瓦		3.6	細砂少量含	灰褐色	やや軟質	1-4区	掘下げ	鎌倉時代
204	唐草文軒平瓦			細砂少量含	灰白色	やや軟質	1-4区	SD31	平安時代後期
205	唐草文軒平瓦		3.9	微砂少量含	灰色	硬質	1-4区	掘下げ	平安時代後期
206	唐草文軒平瓦		3.9	細砂含	灰黒色	硬質	1-4区	掘下げ	平安時代後期
207	複弁十二葉蓮華文軒丸瓦	17.4		微砂含	暗灰色	硬質	6区	掘下げ	平安時代前期
208	複弁蓮華文軒丸瓦			微砂少量含	暗灰色		6区	SK 8	平安時代後期
209	蓮華文軒丸瓦			砂粒含	灰黄白	やや硬質	6区	掘下げ	平安時代前期
210	五輪塔文軒丸瓦	14.8		微砂含	灰白色	やや硬質	6区	SK23	平安時代後期
211	均整唐草文軒平瓦			砂粒少量含	灰黄白	やや軟質	6区	Pit28	平安時代前期
212	均整唐草文軒平瓦			微砂少量含	灰白褐	硬質	6区	断割	平安時代前期
213	均整唐草文軒平瓦		7.0	細砂少量含	灰褐色	硬質	6区	掘下げ	平安時代前期
214	均整唐草文軒平瓦			細砂少量含	淡赤灰	硬質	6区	断割	平安時代前期
215	剣頭文軒平瓦		3.0	細砂多量含	橙色	やや軟質	6区	SK19	平安時代後期
216	剣頭文軒平瓦		2.6	砂粒含	褐灰色	軟質	6区	掘下げ	平安時代後期
217	剣頭文軒平瓦		2.8	砂粒少量含	灰白色	硬質	6区	掘下げ	平安時代後期
218	剣頭文軒平瓦		2.6	細砂少量含	灰白色	やや軟質	6区	SK23	平安時代後期
219	剣頭文軒平瓦		3.2	細砂少量含	淡橙色	やや軟質	6区	Pit27	平安時代後期
220	剣頭文軒平瓦		4.4	細砂少量含	灰黄白	やや軟質	7区	遺構検出中	平安時代後期
221	均整唐草文軒平瓦		7.0	細砂多量含	灰白色	やや軟質	7区	遺構検出中	平安時代前期
222	単弁十六葉蓮華文軒丸瓦	17.0		細砂少量含	灰白色	硬質	9区	SK51	平安時代前期
223	均整唐草文軒平瓦			細砂少量含	灰白色	軟質	9区	掘下げ	平安時代前期
224	均整唐草文軒平瓦		5.1	細砂含	暗灰色		9区	景石間	平安時代前期

付表7 平成13年度調査 銭貨一覧表

番号	銭名	縦外径	縦内径	横外径	横内径	厚さ	産地	初鑄年	区	遺構・層名	時期
225	開元通寶	24.3	21.1	24.0	21.2	0.8	唐	621	1-1区	SK 8	飛鳥時代
226	開元通寶	24.0	(17.7)	24.4	18.8	1.2	唐	845	1-2区	SD153	平安時代
227	開元通寶	-	-	23.7	19.6	0.9	唐	845	1-2区	SK281	平安時代
228	宋通元寶	25.0	19.4	25.0	20.0	1.1	北宋	960	1-4区	2面掘下げ	平安時代
229	太平通寶	24.0	18.6	24.1	18.9	1.0	北宋	976	1-2区	遺構検出中	平安時代
230	咸平元寶	25.5	18.0	(25.0)	(19.4)	1.2	北宋	998	1-4区	2面掘下げ	平安時代
231	景德元寶	24.0	18.1	23.8	18.0	1.1	北宋	1004	1-2区	遺構検出中	平安時代
232	景德元寶	24.3	19.6	24.3	19.5	1.3	北宋	1004	1-2区	SK57	平安時代
233	天禧通寶	24.6	19.3	24.3	19.6	1.1	北宋	1017	6区	SK23下層	平安時代
234	皇宋通寶	24.6	19.4	24.5	19.1	0.8	北宋	1038	1-2区	遺構検出中	平安時代
235	嘉祐通寶	23.9	18.9	23.6	18.0	1.1	北宋	1056	1-2区	SD153	平安時代
236	治平元寶	24.0	19.0	23.9	19.2	1.1	北宋	1068	1-2区	2面掘下げ	平安時代
237	熙寧通寶	23.2	18.3	23.5	(18.3)	1.3	北宋	1068	1-2区	遺構検出中	平安時代
238	熙寧通寶	24.0	19.0	24.0	18.6	1.0	北宋	1068	1-3区	2面掘下げ	平安時代
239	熙寧元寶	23.1	18.7	23.4	(18.9)	1.0	北宋	1068	1-2区	2面掘下げ	平安時代
240	熙寧元寶	24.5	19.7	24.4	20.0	1.1	北宋	1068	1-3区	遺構検出中	平安時代
241	熙寧元寶	23.5	19.0	23.8	18.9	1.2	北宋	1068	1-3区	遺構検出中	平安時代
242	元豐通寶	24.3	18.2	24.0	18.4	0.9	北宋	1078	1-1区	SK45	平安時代
243	元豐通寶	23.0	18.0	22.8	18.3	1.2	北宋	1078	1-1区	SK43	平安時代
244	元豐通寶	24.8	18.0	24.7	18.1	1.4	北宋	1078	1-2区	2面掘下げ	平安時代
245	元豐通寶	23.9	21.5	23.8	20.0	1.2	北宋	1078	1-2区	遺構検出中	平安時代
246	元豐通寶	23.4	19.3	23.6	19.0	1.1	北宋	1078	1-2区	遺構検出中	平安時代
247	元祐通寶	24.6	20.2	24.4	20.1	1.1	北宋	1086	1-1区	SK118	平安時代
248	元祐通寶	(25.0)	(19.6)	(24.6)	(19.0)	1.2	北宋	1086	1-2区	2面掘下げ	平安時代
249	元祐通寶	24.3	20.0	24.1	19.7	1.0	北宋	1086	1-2区	掘下げ	平安時代
250	元祐通寶	24.8	20.7	24.8	21.1	1.4	北宋	1086	1-1区	SK108	平安時代
251	元祐通寶	24.1	19.9	24.3	19.5	1.2	北宋	1086	1-3区	遺構検出中	平安時代
252	紹聖通寶	24.0	19.7	23.8	19.3	1.1	北宋	1094	1-1区	SK40	平安時代
253	紹聖元寶	23.5	18.0	23.4	18.2	1.1	北宋	1094	9区	Plt 4	平安時代
254	政和通寶	24.2	20.8	24.0	21.1	1.1	北宋	1111	1-2区	SD153	平安時代
255	永樂通寶	24.8	21.1	25.0	21.2	1.5	明	1408	1-4区	掘下げ	室町時代
256	寛永通寶	24.6	19.8	24.7	19.6	1.2			1-1区	壁整形	江戸時代
257	寛永通寶	24.9	20.2	24.8	19.7	1.1			1-1区	SK 8	江戸時代
258	寛永通寶	24.1	20.0	24.1	19.6	1.2			1-1区	SK 4	江戸時代
259	寛永通寶	24.6	20.3	24.5	20.1	1.1			9区	SD35	江戸時代
260	寛永通寶	25.1	19.5	25.1	20.0	1.1			8区	掘下げ	江戸時代
261	寛永通寶	25.0	19.3	24.8	19.1	1.4			8区	遺構検出中	江戸時代
262	寛永通寶	24.0	18.6	24.0	18.9	0.9			6区	掘下げ	江戸時代
263	寛永通寶	21.8	16.4	21.8	17.3	0.9			1-3区	SD 2	江戸時代

付表8 平成13年度調査 縄文土器一覧表

番号	器種	胎土	焼成	色調	区	遺構・層名	時期
264	縄文土器	密、白砂粒少量含	良	明赤褐色	1-2掘区	SK369	縄文時代前期
265	縄文土器		良	にぶい黄褐	1-2掘区	Pit359	縄文時代前期
266	縄文土器	密、白砂粒含	良	黒褐色	1-2掘区	遺構検出中	縄文時代前期
267	縄文土器	密	良	にぶい褐色	1-2掘区	Pit354	縄文時代前期
268	縄文土器	密	良	にぶい褐色	1-2掘区	遺構検出中	縄文時代前期
269	縄文土器	密、直径1~2mm白砂粒	良	にぶい黄橙	1-2掘区	SK331	縄文時代前期
270	縄文土器	密、白砂粒少量含	良	灰黄褐色	1-2掘区	SK315	縄文時代前期
271	縄文土器	密、白砂粒少量含	良	灰黄褐色	1-2掘区	SK315	縄文時代前期
272	縄文土器	径1.5~2.0mm砂粒含	良	灰黄褐色	1-2掘区	Pit341	縄文時代前期
273	縄文土器	密	良	にぶい黄褐色	1-2掘区	Pit330	縄文時代前期
274	縄文土器	密	良	灰黄色	1-2掘区	SD257	縄文時代前期
275	縄文土器	密、極小白砂粒含む	良	褐灰色	1-2掘区	Pit377	縄文時代前期
276	縄文土器	密、径0.5cm小礫含	良	灰色	1-2掘区	SK315	縄文時代前期
277	縄文土器	密、白砂粒含	良	にぶい赤褐色	1-2掘区	SK315	縄文時代前期
278	縄文土器	微砂粒含	軟質	黄褐色	1-2区	洲浜	縄文時代前期
279	縄文土器	密、白砂粒含	良	浅黄色	1-2区	SD233	縄文時代前期
280	縄文土器	微砂粒含	軟質	灰黄褐色	1-2区	断割	縄文時代前期
281	縄文土器	微砂粒含	軟質	黄褐色・黒褐色	1-2区	2面掘下げ	縄文時代前期
282	縄文土器	やや密	軟質	明黄褐色	1-2区	Pit138	縄文時代前期
283	縄文土器	密、白砂粒少含	良	にぶい黄褐色	1-2区	洲浜	縄文時代前期
284	縄文土器	密、直径1~3mm砂粒含	良	暗灰黄色	1-2区	洲浜	縄文時代前期
285	縄文土器	密、径1~3mm白砂粒含	良	灰白色	1-2区	SD233	縄文時代前期
286	縄文土器	砂粒多量含	軟質	黒褐色	1-2区	SD233	縄文時代前期
287	縄文土器	密	良	にぶい橙色	1-2区	SD233	縄文時代前期
288	縄文土器	微砂粒含	軟質	黒褐色	1-2区	SD233	縄文時代前期
289	縄文土器	微砂粒含	軟質	黒褐色	1-2区	断割	縄文時代前期
290	縄文土器	密、白砂粒含	良	にぶい橙色	1-2区	SD233	縄文時代前期
291	縄文土器	細砂含	軟質	黒褐色	1-2区	断割	縄文時代前期
292	縄文土器	細砂含	軟質	明黄褐色	1-2区	JJ9・1区北断割部	縄文時代前期
293	縄文土器	細砂多量含	軟質	黒褐色	1-2区	SK289	縄文時代前期
294	縄文土器	微砂含	軟質	黒褐色	1-2区	Pit284	縄文時代前期
295	縄文土器	密、径1~2mm砂粒含	良	灰黄色	1-2区	洲浜	縄文時代晩期

付表9 平成13年度調査 その他の遺物一覧表

番号	種類	器形	縦長	横幅	材質	色調	区	遺構・層名	時期
296	石製品	石鎌	2.7	2.4	サヌカイト	暗青灰色	1-2区	2面掘下げ	縄文時代
297	石製品	石鎌	1.8以上	1.9	サヌカイト	暗青灰色	1-2区	洲浜	縄文時代
298	石製品	石鎌	2.2	1.9	サヌカイト	暗青灰色	1-2区	洲浜(褐色泥砂)	縄文時代
299	石製品	石鎌	1.5以上	1.8	サヌカイト	赤灰色	1-2区	洲浜(黒褐色泥砂)	縄文時代
300	石製品	石鎌	2.1	1.8	サヌカイト	褐灰色	1-2区	洲浜	縄文時代
301	石製品	石鎌	2.6	1.9	サヌカイト	暗青灰色	1-2区	2面掘下げ	縄文時代
302	石製品	石鎌	2.8	1.5以上	サヌカイト	暗青灰色	1-2区	洲浜	縄文時代
303	石製品	石鎌	1.9	1.6以上	サヌカイト	暗青灰色	1-2区	洲浜(黒褐色泥砂)	縄文時代
304	石製品	石鎌	2.0以上	1.9	赤色チャート	灰赤色	1-2区	断割	縄文時代
305	石製品	石鎌	1.9	1.1	サヌカイト	青灰色	1-2区	洲浜	縄文時代
306	石製品	石鎌	3.4	1.2	赤色チャート	赤灰色	1-2区	2面掘下げ	縄文時代
307	石製品	石鎌	2.5	0.7	サヌカイト	青灰色	1-2区	洲浜	縄文時代
308	石製品	石鎌	2.1	1.9	赤色チャート	赤褐色	1-2掘区	SK315	縄文時代
309	石製品	石鎌	2.0	1.7	サヌカイト	褐灰色	1-2掘区	暗褐色泥砂層	縄文時代
310	石製品	石鎌	2.2	1.7	赤色チャート	暗赤褐色	1-2掘区	Pit370	縄文時代
311	石製品	石鎌	1.3以上	0.9以上	サヌカイト	褐灰色	1-2掘区	暗褐色泥砂層	縄文時代
312	石製品	磨製石斧	9.0以上	6.2	変成岩(珪灰石含)	明緑灰色	1-2区	SD233	縄文時代
313	土製品	有溝土錘	6.9	6.0		黄灰色	1-1区	SK14	縄文時代
314	土製品	陶錘	4.9	3.1	須恵質	明緑灰色	1-2区	洲浜	平安時代
315	土製品	土錘	3.5	0.9		浅黄橙色	1-2区	掘下げ	平安時代
316	石製品	温石	11.0	8.7	滑石		6区	SK23	室町時代後期
317	石製品	温石	9.3以上	7.1	滑石		1-2区	2面掘下げ	室町時代後期

圖 版

報 告 書 抄 録

ふりがな	しせききゆうにじょうりきゆう (にじょうじょう)							
書名	史跡旧二条離宮 (二条城)							
シリーズ名	京都市埋蔵文化財研究所発掘調査概報							
シリーズ番号	2001-15							
編集者名	平田 泰							
編集機関	財団法人 京都市埋蔵文化財研究所							
所在地	京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町265番地の1							
発行所	財団法人 京都市埋蔵文化財研究所							
発行年月日	西暦2003年2月28日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
しせききゆうにじょうりきゆう 史跡旧二条離宮 (にじょうじょう) (二条城) へいあんきゆう・きょうあと 平安宮・京跡	きょうとしなかがきょうく 京都市中京区 にじょうどおりほりかわにしている 二条通堀川西入 にじょうじょうちよう 二条城町	26100		35度 00分 40秒	135度 45分 13秒	2000年11月 7日～2001 年3月30日	730.5m ²	収蔵庫 建設
						2001年10月 1日～2002 年3月29日	1,450m ²	
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
史跡旧二条離宮 (二条城) 平安宮・京跡	史跡	平安時代	池庭・溝	土師器・須恵器・黒色 土器・緑釉陶器・灰釉 陶器・輸入陶磁器・瓦 類・銭貨				
	都城跡	室町時代後期 (戦国)	堀・溝・柱穴	土師器・瓦器・陶器・ 輸入陶磁器・瓦類・銭 貨				
		江戸時代	柱穴・土塙・溝・ 井戸	土師器・陶磁器・瓦類 ・銭貨				

京都市埋蔵文化財研究所発掘調査概報 2001-15

史跡旧二条離宮（二条城）

発行日 2003年2月28日

編集発行 財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

住所 京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町265番地の1
〒602-8435 TEL 075-415-0521
<http://www.kyoto-arc.or.jp/>

印刷 三星商事印刷株式会社

住所 京都市中京区新町通竹屋町下る弁財天町298番地
〒604-0093 TEL 075-256-0961